

山 嶽 察

甲南山岳会通信第 62号 2007年10月

隨 想

思 い 出 —甲南と早稲田の山岳部— 佐野源一
敗戦直後の山岳部北アルプス行き 中井久夫

紀 行

タ ト ラ の 山 旅 大橋晋
四 国 の 山 廣瀬健三
雲 南 省 の 自 然 を 訪 め て 福田信三
チベットヒッチハイク横断紀行 森本寛之

論 考

第二次大戦前後の山に関する「エピソード」 雨宮宏光

読書案内

エヴェレスト・1935年 越田和男

追 悼

茂木光隆先輩のこと 越田和男
追悼 福永健治兄 廣瀬健三

甲南山岳部・甲南山岳会

隨 想

思い出 一甲南と早稲田の山岳部—
敗戦直後の山岳部北アルプス行き

佐野源一 1
中井久夫 3

紀 行

タトラの山旅
四国 の 山
雲南省の自然を訪ねて
チベットヒッチハイク横断紀行

大橋晋 7
廣瀬健三 12
福田信三 13
森本寛之 20

論 考

第二次大戦前後の山に関する「エピソード」

雨宮宏光 25

読書案内

エヴェレスト・1935年

越田和男 45

追 悼

茂木光隆先輩のこと
追悼 福永健治兄

越田和男 48
廣瀬健三 50

会員短信

秋の集会 / 総会・慰靈祭への出欠はがきから

..... 52

報 告

秋の集会 木曽福島

..... 63

定時総会

..... 63

慰靈祭

..... 65

ホームページから

ダウラギリトレッキング
ネパールトレッキング事情
雪見会 御世話になりました
バテバテの鹿島槍ヶ岳
薬師岳 薬師沢右俣黒部川山スキーリング
山行とつどい
現役の書き込み

小西啓右 66
塩崎将美 67
柏敏明 72
川野幸彦 74
山本恵昭 75
..... 77
..... 94

役部員の現ヒマラヤ登山

..... 99

— 隨 想 —

思 い 出 — 甲南と早稲田の山岳部 —

佐 野 源 一 (昭 10 旧制文)

甲南と早稲田の山岳部は、伊藤愿さんのラウンド穂高の際にも涸沢の早稲田のキャンプを訪問しているし、山嶽寮の山岳部創部七十五周年記念号に田口アッチャンが書いているように交流があったようです。私が早稲田の山岳部に入部した時のチーフリーダーは田口アッチャンが書いている伝法肌の出牛陽太郎氏で昼夜休み大学の部室に行くと、奥の方にデンとすわっていて学院の新入部員には近寄り難い雰囲気がありました。冬のスキ初心者合宿では「おい野郎共直滑降だ」等と言った調子で指導したそうです。早稲田の冬季滝谷登攀の中心人物で、槍平から立山温泉までディスタンス用のスキーを履いて一日で縦走したりもした人物でした。

私は初心者スキー合宿を免除され年内は白馬神の田圃のヒュッテでの経験者のスキー合宿に参加し、元旦から徳沢に入って穂高に登りました。その際慶応の山岳部が穂高小屋で高所幕営の研究をしていると聴いて、早稲田は滝谷の冬季完登を終わったばかりでその方面的研究はやや出遅れていると思い、その春は鹿島槍の遠見尾根の雪中キャンプに参加しました。目標は鹿島槍北壁の登攀だったので悪天候に阻まれ登れず、次の年の正月、小西、村田の両氏が登りました。その時私は剣西面でのキャンプに参加していて、連日の大雪で池ノ谷尾根の出合のベースキャンプから馬場島の小屋までいつもは20分もかからないで滑って降りられる所を、スキーを履い

て下りのラッセルで7時間半もかかったという経験をしました。

当時雪中キャンプは未だ始まったばかりでテントはどんなのが良いのか試行錯誤の段階で、ワインパー型かまぼこ型とかがあり色々使っていましたが何しろ帆布生地だから重い。特に撤収する時等は凍り付いてますます重くなるので閉口したものです。その内鐘紡グレンフェル(絹?)製のアークチックテント等が出てきました剣の小窓のコルで使いましたが確かに風に強いと思いました。その他グランドシートはどのようにしたら良いのか色々考えたものです。

上級生でも平気であだ名で呼ぶ雰囲気の甲南から早稲田の山岳部に入って一番とまどったのは上級生を「さん」づけで呼ばなくてはいけないませんでしたが、そのうち慣れてしまって後年乗鞍のスキー合宿で下級生から「さん」づけで呼ばれている私を見て伊藤文三君達を驚かせることになったのです。

その他特に甲南の山登りと違うようなことは余りありませんが、大学、第一、第二の両高等学院に山岳部があって、それぞれ別々に行動することもありましたが、全部合同しての夏の合宿等では5・60名くらいの人数になり、新入部員も多かったのでテントやザイル等共通使用品は下級生が背負い上級生のリーダー達は個人装備だけと言うようなこともありました。部員数の少ない現在ではとても

考えられないことだと思います。又鍛えることを「しごく」なんて言うのもその時分に生まれたのでしょうか、決して暴力沙汰ではありませんでしたので念の為。

早稲田では白馬の神の田圃にスキーヒュッテがありましたから冬、春、5月と十分にスキーを楽しむことが出来まして白馬乗鞍の斜面や5月には小蓮華の大斜面等は楽しい思い出になっています。唯スキーに関しては甲南とは少し変わった思い出があります。それはワックスの事です。ワックスと言えば滑降用のグライドワックスを思い浮かべるでしょうがそうでは無く登高用のシュタイグワックスです。前述の出牛さんがシールに変えてシュタイグワックスの使用を奨励したのです。詳しいことは忘れましたが、例えばグランドにはクリスターを塗りマイナス10度位の時はミックスを、0度近くなったらメディュームをその上に塗るといった具合にすると後滑りしないし前には良く滑るようになって登れるのです。現在距離競技の選手が使っているあれです。(勿論現在では色々異なったのを使つ

ていると思います。レースの時ワックスがあたったとか間違ったとかになるわけです) そんな訳でいつ頃からだったか覚えていませんがずっと私はワックス使用で登っていました。当時部内ではあまりスキーに熱中すると墮落したといわれましたが私も最後はスキー派に墮落してしまいました。勿論スキー派と言ってもアイゼンをつけピッケルを持って山に登るのですが、当時山屋はスキーは登るための道具だとか言ったりして滑降の技術には余り関心が無かったのです。テンポパラレルスティング等と言う新しいスキー技術に関心を持って練習をしたものでした。そのお陰で80歳を超えてからもスキーを続けられたのかもしれません。

以上とり止めも無い事を書き連ねましたが、七十年も前のことで記憶違いや忘れてしまった事も多々あると思いますがどうかお許し下さい。



敗戦直後の山岳部北アルプス行き

中井久夫(昭27新高)

1

もう、この時期を知る人は少ないにちがいない。しかし、たとえコミカルで悲惨であるにせよ、私たち、戦時中を小学生すごした世代が退場しつつある今、誰かが敗戦直後の甲南高校山岳部の歴史を断片的にでも記しておかないと永久に消えてしまう。何のめざましいこともないにせよ、戦後の再始動期というものはこういうものだろう。二度とこういう時期がないようにという願いも、その底にある。

戦時中、山岳部は部員の思想が特高（思想警察）に問題にされ、廃止されて鍛練部とやらになっていた。戦後、山岳部は復活したが、部員募集の際に、およそ山岳部らしからぬ仲良し組がアルプスとやらに行こうというだけで夏山に参加した。それが私たちである。もっとも、名誉のためにいえば、その中かられつきとした山岳部員が一人生まれた。柳沢君である。この年から二年、大学山岳部が本格的に活動をはじめ、彼など三百日ぐらい山にいた年もあったという噂だった。

2

私たちの学年は、1946年春、つまり戦後初めての尋常科入学生だった。次の学年は学制改革で新制中学一年となる。私たちの学年は1946年入学、1952年春卒業だったから、米軍占領下の期間と完全に重なる。太平洋戦争の期間は3年9ヶ月であるから占領はその倍の7年に近い。

入学の翌年、1947年に私たちも中学2年に編入された。せっかくの兜の前立てに「高」の尋常科の帽章が「中」に変えさせられる。

頑固に変えない連中がいて、和田邦平先生のような真面目な先生は2階の階段をおりたところで待ち構えていて、手に持った「中」を差し出して「高」をむしりとらせていた。

高等科からの入学組には、軍の学校からの転学組がけっこういて、襟章をとった軍服がちらほらみえた。これは、開戦後の入学組は愛国の熱情から軍の学生となつたので、軍国主義者にあらずと、当時の文相が執拗に占領軍に迫って、その反対を押し切つたおかげであった。みなさん、もう八十歳前後だろう。

私たちとその次の学年が持っている忘れられた記録が一つある。占領下、その後の共通一次テスト、今のセンターテストに当たるもののがあって、進学適性検査（進適）といわれ、アメリカ式の知能検査が加味されていたが、私たちの学年が全国2位、次の学年は1位だったか、とにかく甲南生の頭の柔軟さを示した記録である。序でに書き残しておこう。

3

日本政府もなかなか頭が硬かった。戦前の文部官僚が七年制高校を大正デモクラシーの温床として冷やかな眼でみており、すきあらば富山高校、浪速高校のように三年制に切り替えようと狙っていた。残ったいくつかの高校は、高校入試をバイパスする代わりに、各学年一割づつ留年させることという文部省の強い指示があつて、留年率は官立の三年制高校の倍であった。戦争が終わっても、この留年の多さは続いていた。入学の時は年300円だった授業料も悪性インフレ、封鎖預金、財産税という事態のためにたちまち高くなり、やむをえず転校する者も少なくなかつた。日

本も甲南も冬の時代であった。

だから、私たちの学年のクラス会は留年していく者も転校した者も、希望をきいて積極的にクラス会に加入してもらってきた。全く行方がわからない者は2、3名であったと思う。

4

入学してすぐ、数学の先生二人が発疹チフスになって学校は休校となり、私たちは十分に休養をとった。私たちは一学年八十人を二組にわけて、当時の中学校としては例外中の例外の少数教育だった。旧制高校の教授が教える講義は中学とはどこか違うと私たちは信じていた。戦争が終わって、動員先の工場から教壇生活に戻った先生の多くは教育熱心であったが、教科書お構いなしの奔放な講義もあった。教科書はまだ国定だが、折り畳んだ新聞紙を各自が切って揃えたものである。

占領下に柔道部、剣道部が軍国主義を育てたというわけで活動停止。やがて体操部になってしまった。実際、鉄棒、でんぐりがえり、人間ピラミッドを作つて、それはそれで運動会の呼び物になったけれども、屈辱感は拭えなかった。「忠臣蔵」が、いや一度は歌舞伎全体が禁止された時代である。

その間、1946年、敗戦の翌年だったけれども、何と共に産党の書記長・志賀義雄が講演に来た。りゅうとした背広に身を固めて北館一階の化学教室に現れた非転向の彼が何をしゃべったか、全然記憶がないが、後の質問に誰も立たない。これでは甲南がバカにされると、私は前後をわきまえずに立つて「共産党は社会党にどう対するのか」と問うた。返事は「是々非々」だったが、何年生かと聞かれ、ぎろりと睨まれた。彼は浪速高校には工具の着る菜っ葉服を着ていつたと後から聞いた。除名されて消えたのは二十年の後である。

5

山岳部は運動部の中では戦後復活組である。戦前は、多くの新ルート開拓など、輝かしい歴史がありながら、遭難者が1人もいないという他の高校山岳部にはない記録があった（最初の遭難者は私の次の学年だったと思う）。

1950年の夏山が活動再開の最初の年か2年目だったか、とにかく甲南の山岳部がこれほど素人の部員を夏山に連れていったのは一種の記録だろう。部員を広く募集したら私のような分つていない者も顔を出したということである。

当時、人類はまだマナスルにもエヴェレストにも登つていなかった。甲南高校山岳部は戦前すでにヒマラヤ研究をしていて、その記録も残っているということだったが、ヒマラヤは想像できないほど遠かった。私に至つては信州を知らず、白樺もカラマツも見たことがなかった。それは超満員の列車に半日揺られてゆく先の遠い世界であった。知らないのは私だけではなかつたろう。

なぜ、その春、大量に（一時）入部したのか。誰かが最初に声を挙げたかはわからないが、高校二年生の私たちも占領下の見通しのなさに屈託していて、何か面白いことがないかと探していたにちがいない。ずっとこのまま甲南にいたかったが、できることではない。卒業が近づくのに、甲南が大学を作るかどうかで理事会から生徒会まで会合を繰り返していた時代である。この山行きの後も、部室を溜まり場にして果てしない駄々りをしていた。山岳部こそいい面の皮である。

私は大学に入ってすぐに結核になり、山は登りたくとも登れなくなつたが、そうでなくとも、私はアルピニストには絶望的に向いていないことがつくづくわかつた。そんな私がO Bに名を連ねているのは、申し訳なさが半

分以上である。さすがに銘板に名を入れるのは辞退した。

6

それでも、芦屋のロックガーデンの練習場で初歩中の初歩を練習した。私たちは城壁の一角のようなゲートロックをよたよたと登り、白茶色のケーキのようなイタリアンをザイルで下降して、ザイルの摩擦で掌を焼いたりした。

そんな山行きでも、とにかく物資欠乏のために行くまでが大変だったろう。田辺君や阿部君などが仕切って、よく整えたものである。

もちろん、ごく質素なものだった。

食糧は米とジャガイモとタマネギの他は缶詰が主で、それもオイルサーディン、鯖のトマト煮、牛肉の大和煮である。カレーライスのための肉は塊の外側をバーナーであぶつて持つていって、盛大にたかっているウジを指ではじきとばして食べた。米は一升 240 円であった。その後の物価変動を考えると、たいへんな高価である。

服装は有り合わせ。登山用具はすべて戦前製。しかし、さすが甲南で、太くごわごわしたマニラ麻の英國製ザイルは、涸沢では他のパーティの羨望的になってしまった。灯油を使うスエーデン「サルトリウス」社製の湯沸かし器もさすがとされた。

7

当日の待ち合わせは大阪駅前だった。しかし、当時は目的地への到達が問題だった。鉄道輸送は絶望的な混雑だったからである。当時は「とにかく待つこと」が旅の条件だった。

大阪駅正面の空き地は舗装もなく土のままで、夏も焚き火がしてあった。着衣の汚れた人々がそれを囲んでいた。私たちも加わった。真夏に焚き火とはとふしげに思って、このたび同行の友に確かめたが、やはりしていたと

いう。火は人を集め、いつときの間は親しませた。

駅舎は工事が戦争で中止となり、中央が三階建、両端が二階建の貧弱で素っ気ない建物だった。駅の南側は、市電通りを隔てて、これまた戦争で工事を中止した四階建ての阪神百貨店。その向こうは梅田新道までずっと梅田の大閻市だった。これは広大なものでかなり後まで残っていた。今も残るのは東側の阪急百貨店と西側の大阪中央郵便局だけで、いずれも惜しまれつつ近く建て替えになる。

一般に列車、電車の窓は板張りであって、駅名を知るための小さな覗き窓が開けてあった。ただ阪急だけは敗戦時からずっとガラス窓を守った。これは阪急百貨店のショウケース用の買いだめを流用したものだと当時の阪急社員の息子さんにうかがった。

8

列車の中は満員どころでなかった。座席の下に身体を入れ通路に頭を出して横になったりしたが、それはまだ幸運なうちで、何時間も立ってゆく苦行が普通であった。

松本駅について松本電鉄に乗り換えて生き返る思いで、終点の「島々」でバスに乗り換えた。釜トンネルの前で天井の低い小型バスに乗り換える。小さかったトンネルを通り抜けるためである。当時の上高地は帝国ホテル以外はすべて日本式旅館だった。その前を通り抜けて徳沢まで歩き、テントを張った。徳沢はまだ牧場で、牛を飼っていた。写真をとったのはこの時だけである。

横尾で涸沢と槍沢が出会うが、そこはまだ丸木橋だった。本式の橋が架かるのは翌年である。皇太子時代の現天皇が来られたからで、道が新しくなるのは主に皇族が来る時だった。

涸沢小屋の人たちは、登ってくる私たち一行をみて、警察の手入れではないかとヤミ米

を隠したそうである。当時は米は配給制で一日一合八勺（しゃく）。これでは足りず、買い出しに農村に出かけて古着と米を交換するが、警察が列車を襲ってせっかくの米を没収する時代であった。ポリスに見られたのは、学帽に夏用の白いカバーをかけていた彼らしかつた。

9

涸沢の中腹にテントを張った。当時でも4、50はテントがあった。ハイマツの隙間のガレ場の斜面を石を動かして平らにし、イタドリなどの草を抜いては敷きつめて、その上にツェルトを敷き、一張りのテントを張って、フライング・シートをかぶせた。便所はハイマツのそばで「雉を撃った」。

それから雨が三日降り続いた。草は腐って異臭を放ち、食べ物は缶詰ばかりで、皆参った。私はごく些細なことで親しい間柄と喧嘩した。情けないことである。自分の限界と欠点を思い知った旅であった。私も含めて誰も自分の荷物がいちばん重いと思っていることもわかった。こういう苦い自己認識は列挙するほど多くはないが、若い私にとってはこの山行きの最大の収穫であったと振り返って思う。私は、それらを思い出しては自戒して生きてきたからである。すぐ近くの雪渓で、雪を食べようとした教師二人が転落して亡くなったという噂が流れてきた。致命的な失敗が何でもないところで起こることも大きな教訓となった。

10

晴れとなると、皆別人となる。グリセードを練習し、見事に晴れ渡った穂高連峰に登った。奥穂を経て前穂まで行く組とジャンダル

ムのほうに行く組とにわかれて、私は前者だった。しかし、私の山登りの記憶はイメージだけは新鮮だが、ことばにすると平凡なものにしかならない。この雑誌の読者に報告するものは何もなさそうである。それにしても、戦後の困難や人間関係のほうが半世紀を隔てて私の記憶に残っているのは面白い。こういう記憶が最後に残るのは私たちの世代だからか、一般にそうなのか。

11

穂高連峰と再会したのは何と五十歳前後であった。小諸での学会の後、地元の参加者がどこへでも案内するという。上高地を希望した。当時勤めていた神戸大学精神科の連中がわらわらとついてきた。

それはほんとうに特権的な黄金の秋の一日だった。徳沢まで行くと穂高連峰が隈なく遠望された。私たちはせめて横尾までは行きたがったが、若い人たちはとても歩けないといって、初老の私たちを驚かせた。心を残して上高地を去ったが、この記憶を「裏表紙」として私の貧しき極まりない山行きが私なりに完結した。それは今なお私の人生のジグソーパズルには欠かせないピースの一つである。



—紀行—

タトラの山旅

大橋 晋 (国学院大学山岳部OB)

タトラ山系は、スロヴァキア西部のドナウ河畔ブラチスラヴァから東に弧状に延びてハンガリー、ポーランド、ウクライナにまたがり、ルーマニア西部のドナウ川の鉄門にいたる、全長約 1500 km のカルパチア褶曲山脈の最高部である。西タトラ、高タトラ、低タトラに分かれれる。2006年9月初旬、スロヴァキア・ポーランド国境にまたがる高タトラを歩く機会があった。

参加者

L 平井吉夫 (JAC 甲南山岳会)
越田和男 (JAC 甲南山岳会)
越田光江
丸田淳一
丸田ちさと
佐藤久子
大橋 晋 (JAC 国学院大山岳会)
大橋澄子

9月1日にウィーンからスロヴァキアの首都ブラチスラヴァに入り、翌2日、車で古城のあるトレンチーンを経て、山旅の出発点、標高1347 m のシュトルプスケー・プレソ (湖) に着いた。

3日は山歩きの準備と足ならしを兼ねて周辺の散策で過ごした。夜来の雨が昼近くにあがり、北方の山がアカマツやエゾマツの上に姿を現わした。黒々とどっしりした岩峰の連なりの上部には新雪が見えた。左手ソリスコの岩稜 (最高峰は2413 m) のヴェルケー [大] ソリスコ)、右にムリニツカ・ドリナ (谷) をへだててパトリア峰 (2203 m) さらに右にやや遠く、翌々日にその山腹を歩くトゥパー峰 (2285 m)、クリン峰 (2186 m) が望めた。

周囲 2.25 km の大きさはタトラ第二というシュトルプスケー湖は、針葉樹に囲まれ、湖畔にはリンドウ、トリカブト、ヤナギラン、フウロなどが咲き、赤い大きめの実を付けたナナカマ

ドを見る。どれも日本のものとは違うようだ。

前もって用意したVKU社の2万5千分の1の登山用地図「ヴィソケー (高) タトリ」では、ルートが赤、青、緑、黄と分けられている。実際のルート上でも 50~70 メートルごとに同じ色の標識があり、地図には所要時間も記載されているので、迷うことなく目的のコースを歩くことができた。

1日目 出発前にホテルのロビーで通訳として同行するトマーシ・ユルコヴィツ君が紹介された。2メートル近い背丈でほっそりとした物静かな青年だ (プラハのカレル大学大学院の哲学部日本語科在学、31歳。村上春樹の『ノルウェーの森』『浜辺のカフカ』などのチェコ語翻訳者で、われわれの山旅の直後に早稲田大学に留学)。

雲ひとつない快晴の中、シュトルプスケー・プレソのホテル・パトリアを出発 (8時半)。本日の第1目標ポプラドスケー・プレソ (湖) までは赤のルートを北に向かう。よく整備された森の中 (エゾマツ、タトラアカマツ) の道は、西タトラから高タトラの山腹に連なるタトランスカ・マギストラーラ (タトラ街道) の一部である。しばらく登って冬季の緑ルートを右に分け、一時間ほどで突然眺望が開けた。前方に広大なメングソフスカ・ドリナ (谷) と背後のリシ峰 (2503 m) を中心とした高タトラの山々が望めた。左手のパトリア峰の東南の山腹に付けられた石畳の道をたどり、標高 1500 m のポプラドスケー湖に着いた (午前 10 時 20 分)。北西岸に瀟洒な三階建てのポプラドスケー・プレソ小屋が建つ。1879年にUKV (ハンガリー・カルパチア山岳会) が創建した山小屋で、火災と改築を重ねて現在の偉容になった。

小屋にほとんどの荷を預けて軽装になり、赤のタトラ街道と分かれ、青ルートをたどって強

風の吹きつけるなか、北西にメングソフスカーヴの上部を目指す。30分ばかりで針葉樹林帯から灌木帯になり、右にリシ峰に登る赤ルートを見送り、枝沢を数本渡り、這い松帯を抜け、相変わらずの強風のなか、岩が多い急なジグザグを登ると、カール状の台地の右手に小さな湖水が現われる。ヒンツォヴェ・オカー（ヒンツォヴォの目）という三つの小さな湖だ。風はさらに強くなり、ときどきストックを支えにしてやり過ごす。湖面が激しく波立つ。さらに進むと左にマレー（小）ヒンツォヴォ・プレソを見る。標高1921メートルだ。半ば這い上がるようにして、もう一段登ると、ヴェルキー（大）ヒンツォヴォ・プレソ（1945メートル）の湖畔に着いた（午後1時30分）。

風はますます強くなり、波しぶきが飛ぶ。立っているのが容易でない。この湖はスロヴァキア側の高タトラ最大（20メートルを超える）の氷河湖で、水深も最高（いちばん深いところは水面下53メートル）。眼前に標高2432メートルのヴェルキー（大）メングソフスキ・シュティート（峰）やチュブリナ（2371メートル）の岩峰がそびえ、峨々たる稜線の向こうはポーランドだ。

予定ではさらに青ルートを西にとり、2180メートルの、ヴィシュネー（上）クオプロフスキー・セドロ（峰）に登り、その北にあるクオプロフスキ・シュティート（2363メートル）まで行くことにしていたが、荒天のため大ヒンツォヴォ湖から引き返し、ポプラドスキー・プレソ小屋に戻ったのが午後3時40分。

小屋はすべてトイレ、シャワー付きの個室で、食堂のメニューも豊富、ちょっとしたホテル並みだ。ワイン、ビールも美味。窓の外の暮れなずむ湖と周囲の山々を眺めながらの夕食は格別だ。

2日目 ポプラドスキー・プレソ小屋を午前9時に発ち、タトラ街道（赤ルート）を東に向かう。灌木帯のなか、ジグザグの急な登りが続く。やがて這い松帯になると、前方にオストルヴァ峰（1984メートル）からトゥパー峰に連なる山

稜がある。その中ほどのセドロ・ポド・オストルヴァ（オストルヴァの下の峰1966メートル）を目指す。湖から峰まで500メートル近い直登だ。昨日と変わらない強風のなか、背後にはメングソフスキ一谷の眺めがひろがる。眼下には紺青の水をたたえたポプラドスキー・プレソと湖畔の山荘が望めた。峰着11時（西洋人向けの地図にある所要時間は1時間、われわれはその倍かかった）。風はさらに激しく吹きつける。峰の上から南麓の広々としたポプラド平原、その南にニースケ・タトリ（低タトラ）のなだらかな山並みが見渡せる。

峰からはトゥパー峰とクリン峰の緩やかな山腹に付けられた石畳状のよく整備された平坦な道が続く。路傍にはリンドウ、ヒメイトシャジン、アザミ、オミナエシなどを見る（いずれも日本のものとはいいくらい異なるようだ）。

クリン峰の山腹を南東に廻りこみ、シュトゥオルスカ・ドリナ（谷）の風当たりの少ない場所で昼食を摂り、風が相変わらず強く吹くなか、平坦な道を進み、左にそびえるコンチスター峰

（2538メートル）の稜線の南東麓を廻ると、カール状の谷バティゾフスキー・ドリナと出合う。北東に湾曲した道をたどってバティゾフスキー・プレソの南岸に着く。谷の中央に、四圍の氷河に削られてできた孤峰コストリーク（2262メートル）がそびえ、その右奥にタトラ山系の最高峰ゲルラホフスキ・シュティート（ゲルラッハ峰2654メートル）のどっしりした黒々とした岩の山容が望める。最高峰に敬意を表してワインの乾杯。

ゲルラッハ峰の南東麓を歩き、右に黄ルートを分け、赤のタトラ街道は北東に向け緩やかな下りとなる。道はヴェリツカ・ドリナに入り、ヴェリツカ・プレソが夕陽にキラキラ光るのを見る（午後4時20分）。まもなく湖水の南西岸に建つスリエスキ・ドム（山荘）に着く。

この山荘の起源は地元（スタリー・スマコヴェツ）の行政官が1871年に建てた避難小屋にさかのぼるが、2年後に焼失、1878年にハンガリー・カルパチア山岳会が再建し、一世紀を超える歴史の曲折を経て現在のベッド数130の大

山荘になった（まだ社会主义時代の残り香があると、通訳のトマーシが言った）。部屋は個室のシャワー付き（トイレは各階に共用）、食堂のメニューは昨晩同様豊富。山荘からの東面の眺めは、目の前のヴェリツケー湖とその背後に山稜が黒々と連なり、南は遠くポプラドの平原が広がり、その中心の町ポプラドの灯が夜の闇の中に望めた。風は依然と強く、激しく部屋の窓を鳴らす。

3日目 朝は冷え込んだ。山荘の入り口の外にある温度計は5℃だった。主な荷物は山荘に残し、赤のタトラ街道と分かれ、緑のルートのヴェリッカ一谷を北に遡上する（午前8時）。湖水の東岸を北上し、北東岸からジグザグの急な登りがはじまる。左側に大滝（ヴェリツキー・ヴォドバード）があり、岩のルートはそのしうきで濡れていて滑りやすい。息を切らしながらしばらく登ると滝の上に出た。眼下に青いヴェリツケー湖とスリエスキ山荘、その先に広がるポプラド平原が展開する。

滝上から谷は大きく開け、さまざまに可憐な高山植物が咲き乱れる草地になっている。ここはクヴェトニツツア（お花畠）と呼ばれている。左にタトラの主峰ゲルラッハに取り付くルートがある。岩稜の上部に人影が見える。数人のパーティのようだ。目を谷の右に転ずると、ブラダヴィツア峰（2476メートル）がそびえる。黒部五郎を想わす広い谷のなだらかな登り、草花のなかに大小の岩が累々と続く、マーモットが出そうな地形だ。チッチッと鋭い鳴き声があちこちでする。予想どおりマーモットが姿を見せはじめ、岩の上に立ち上がり、あたりを見回すものもいる。

右奥のグリヤティ・コペツ峰（2121メートル）の裾を巻くように登り、右に廻り込むと左にドゥルヘー・プレソ（1939メートル）が現われる。湖岸の大岩に「UKVシュレジエン・セクション1893」とのプレートがはめ込まれている。ハンガリー・カルパチア山岳会がこのルートを1893年に開拓したという碑文だ。

（イギリス山岳会〔AC〕の創立は1857年、オーストリア山岳会〔OAV〕は1862年、ドイツ山岳会〔DAV〕は1869年、OAVとDAVが合同してドイツ・オーストリア山岳会〔DOAV〕になったのは1874年である。そのころのオーストリアはオーストリア・ハンガリー二重帝国時代で、タトラ山域はハンガリーの支配下にあつた〔スロヴァキアもハンガリー王国の内〕。独立志向の強いハンガリー人の登山家はアルプス山脈を想わせる会名〔アルパイン・クラブ、アルペン・フェライン。略称のA〕を嫌い、自分たちの山岳会名には郷土の大山脈を探って、U〔ウンガルン=ハンガリー〕K〔カルパチア〕V〔フェライン=会〕と称した。セクション〔支部〕の名の「シュレジエン（シレジア）」はポーランドの地域名、18世紀にプロイセンとオーストリアがその領有をめぐって激しく争った。スリエスキ山荘がポーランド名なのは、このUKVシュレジエン・セクションと関係している。）

湖水は青く澄み、両岸に大きな岩が累々と重なり、草や木は見当たらない。耳に入るのは渡る風の音だけの世界がある。ここで往路を引き返し、滝の上まで下ってひと休み。目の前に堂々と立つゲルラッハ峰の雄姿を眺め、周囲のさまざまな高山植物を愛でるひとときを過ごした。ゲルラッハの岩稜をゆっくりと下る数人の人影がある、岩登りを終えて下山するパーティだろう。午前11時にスリエスキ山荘に戻る。

（この山旅の計画段階では、ドゥルヘー湖からさらに北上して、ヴェリッカ一谷の最奥にあるポルスキ・フレベニュ〔峠2200メートル〕を越え、その先のザムルズヌテー湖から東に向かう、青ルートのヴェリカ（大）ストウデナー・ドリナの渓谷を延々と下って次の宿泊地フレビエノクに出る案が、企画者の平井から出されたが、衆議のすえボツ。）

昼食を山荘で摂り、午後12時30分、赤ルート（タトラ街道）を東にフレビエノクを目指し出発した。坦々とした石畳状のルートは這い松帶の中を進む。右下一面に黒い針葉樹林がポ

プラド平原に向かい緩やかなスロープを展開する。しかし、あるところでは森の木すべてが薙ぎ倒され、倒木が累々としている(話によると、2004年 の暴風でタトラの森林の40%が被害を受ける大災害が起き、後始末がまだ続いているという)。道はやがてカラマツ帯に入り、さらに30分ほどで暗いトウヒの森に変わり、緩やかな下りの先にスキーリフトが現われ、今夜の宿ホテル・フレビエノクに着いた(午後3時30分)。

当初はホテルから5分ほど先にあるビーリコヴァー小屋に泊まるつもりだったが、どうしても予約が取れずホテル・フレビエノクに連泊することになった。その夜の食事中、ボイから日嗣の皇子誕生のニュースを聞き、ワイン(スロヴァキアのトポルチアンキ)をもう一本追加して改めて乾杯した。

4日目 快晴のさわやかな朝を迎える、山歩きを始めて四日間天気続きだ。今日はフレビエノクに滞在なので周辺を散策して、タトラの観光パンフレットに必ず出てくる名物の滝を見ながら、ストゥデニー・ポトク(川)に沿って下ることにした。

午前8時45分出発、トウヒやタトラアカマツの森の中にある赤のルートを進み、20分で青ルートと十字に交わるところ(大ストゥデナ一谷との出合い)に出た。そこから青ルートを右にとると森の中に草地があり、そこに高タトラ最古(1860年代にさかのぼる)の山小屋ライネロヴァ小屋(1290ドル)が建っている。壁はすべて石積みで屋根はスレートのこぢんまりした小屋だ。小屋の主人は品のよいお年寄りで、教師を今年退職して小屋番になったとのこと。60%からの荷を背負子で運んできたところだった。小屋の内部は古い山道具や昔の写真が所狭しと陳列しており、ちょっとした山岳博物館になっている。小屋の横に望遠鏡が据えられてトウヒの森の間からロムニツキー・シュティート(2634メートル)の山頂付近が望めた。小屋を辞し森のなかの青ルートをしばらく下り、右の黄ルート

トに入ると次々と見事な滝が現われた。滝を見ながら下る途中、右に分かれる緑のルートの先にある、予約できなかったビーリコヴァー小屋に立ち寄る。東面が開けてロムニツキー峰がくつきりと見える、小高い場所に建つ木造三階建てのこぢんまりとした小屋で、部屋数12、ベッド数27のこと。

再びストゥデニー川沿いの黄ルートに戻り、滝見物をしながら下る。一時間ほどで谷がひろがり、道も平坦になってきたところから、今までの暗い森から一転して強い陽射しの世界になった。あたりは一面の風倒木と立ち枯れの木だけの殺伐とした道となった。さらに30分ばかり下ったところで山岳鉄道のタトランスカー・レスナー駅に出た(午後12時10分)。この鉄道は東のタトランスカー・ロムニツツアと西のシュトルプスケー・プレソの間を走っている。テレビの「世界の車窓」でも紹介された、深い森の中を通る森林鉄道であったが、例の暴風により樹木が薙ぎ倒された沿線からは、北側にタトラの山並み、南側がポラド平原を望む車窓の旅をすることになる。しばらくして3輌編成のスマートな電車が到着。無人駅なので乗車券は車内の自動販売機で購入した。

西に向かう車窓の風景を楽しむのも束の間、わずか10分ちょっとでタトラの中心、スタリー・スマコヴェツツに着いた。駅近くのレストランで昼食を摂り、ここから緑ルートを歩いてフレビエノクまで登り返すという平井を残して、午後は鉄道の西の終点シュトルプスケー・プレソ(今回の山旅の出発点)まで乗り継いで山岳鉄道の旅を楽しみ、再びスタリー・スマコヴェツツに戻り、ケーブルカーでフレビエノクのホテルに帰った。

5日目 連日の好天も昨夜から雲が出はじめ、曇り空の朝を迎えた。フレビエノク発午前8時40分。赤ルート(タトラ街道)の昨日歩いた道を途中までたどり、青のルートを見送り、そのまま赤のルートを40分ばかり歩いたところでぽつぽつ雨が降り出し、まもなく本降りと

なってしまい、雨具を着ける。やがてジグザグの登りとなり、雨はますます強くなってきた。しばらくしてオブロフスキー・ヴォドバード(大滝)に着いた。雨はさらに大降りになり、風まで加わる。これからロムニツカ一見晴らし台に上がり、タトラ街道を北北東に歩いてスカルナテ・プレソに行き、そのロープウェー中間駅からロムニツキ一峰の頂上を往復し、今夜の宿のあるタトランスカ一・ロムニツツアに下るのが今日の予定だった。だが雨で眺望がなければ無意味と判断し、フレビエノクに引き返し、ケーブルカーでスタリー・スマコヴェツツに下り、山岳鉄道に乗ってタトランスカ一・ロムニツツアに着いた。宿は19世紀の香りの残るグランドホテル・プラハ。この町からロープウェ

ーでロムニツキ一峰の頂上に上るのはタトラ観光の目玉なので、翌朝さっそく駅に駆けつけたが、なんらかのトラブル（原因の説明いっさいなし）でロープウェーが動かず、涙を呞んで断念し、ハイ・タトラの山旅は幕を閉じた。

不思議なことに、泊まった山小屋ではどこでも日本人は初めてだと言われた。なお今回の企画では平井夫人の和子さん（1960年代初めから10年近くプラハに留学）に宿泊先の予約、通訳、車両の手配などすべてパーソンズにやっていただきないので、平均年齢70歳近い仲間が安心して雄大な美しい自然のなかでの山旅を満喫することができた。



高タトラ・ヴェリッカ一谷にて 左から越田、大橋、平井

四　国　の　山

廣瀬 健三 (昭36経)

平成13年(2001年)9月、森本／鵜木兄と東赤石岳に登りました。四国愛媛県新居浜から別子銅山の里に入り二泊、赤石山系に入山。これが小生にとり初めての四国の山。どんなキッカケで御両人と行ったのか、思い出せませんが、何れにせよ初めてのこの地域の山は新鮮そのもの、色々ハプニングもありましたが、今思うと卒業後、KACの人と登った山の中で、大変印象深い山の一つと成り、四国の山がすっかり気に入りました。それから5年後の2006年の夏、日本山岳会(JAC)関西支部の四国分水嶺踏査行に7月、8月と二回参加しました。(2005年に家内と旅行業者のバス旅行で、剣山に行きましたが、これは登山ではなく、山旅行、それなりにエンジョイしました。)

さて、昨年8月25日は剣山頂小屋に泊まり、明けては、何十年振りかに3:00AM起床、夜明け前に出発。厳しくも大変充実した縦走でした。小生、三年前から硬式テニスに興じています。そのお蔭か足が強く成ってきた気がします。長い長い下り以外はへばらずに元気でした。8月26日朝4:30に剣山頂小屋を出発し、3:30PM頃まで、途中昼食の約30分の休み以外は少しの休憩のみでの凄くきびきびした山歩きでした。詳細はずぼらして記しません。印象に残った事を書きます。御容赦下さい。

—— 四国の山は本当に深い、これは冒頭の森本／鵜木兄と行った時既に思いましたが。(此の時、東赤石岳、1,707Mから望んだ瀬戸内海の真っ青な海の輝きも奇麗だった。此の山行きの帰路思はぬ、遠回り?をしたので、山の深さを充分に味わった。)二人と登っていると甲南大学山岳部時代を思い出しました。後日、鵜木兄より「久し

ぶりに山岳部しました」とのコメントあり。
—— 8月26日、ヘッドランプをつけて早朝山小屋を出るとき、張り詰めた心地よい緊張感を覚えました。御来光は拝めずも、峰から峰へと渡る“滝雲”なるものを、丁寧な解説付きで眺めました。(流石JACには正確な物識りの方が大勢いるものだ。)

—— 参加メンバーの中には日本人女性で最初にマナスルに登頂した方や、1960年、日本人女性で初めてヒマラヤの高峰に登頂した76歳の女性も参加されていました。御歳(おんとし)76歳の当会員の馬力には脱帽。特に縦走最後のハードな箇所たる長い長い、しかも急な下りに見せた、足の強さ、バランスの良さにはビックリでした。

リーダーの重廣恒夫氏に次ぎ印象に残っています。同氏、「体調万全に非ず、老いを感じる」との事成るも、いざと言う時の馬力、道無き道でのルートファインディングの確かさ、急な長い下りの時に見られるスピードとバランスの良さは凄い。1970-90年代の半ばまで、主にヒマラヤの難峰でアタッカーとして又隊長として赫々たる実績を残した岳人成る事頷けます。

2007年8月1日 記

雲南省の自然を訪ねて

＜シャンギラ、梅里雪山、玉龍雪山＞
大阪 ⇒ 昆明 ⇒ 麗江 ⇒ 香格里拉 ⇒ 德欽

福 田 信 三 (昭 39 理)



中国東方航空 MU-748 便は定刻より早く昆明空港に到着。市内のホテルまでわずか 15 分。街の中の飛行場だ。気候が爽やかで気持ちが良い。確かに、ここは標高 1,800m の高原にある雲南省の省都。人口 480 万人。最近はマラソンの野口みづきもここで高地トレーニングをしているとのこと。

街で行き交う人は中国人より日本人に似ているし、表情も明るい。雲南省にはなんと 25 の少数民族がいるらしい。もう一つ雲南省の特徴がラオス、ミャンマー、ベトナムと国境を接する交通の要所であるために、北京や上海とは違った活気がある。

翌早朝、一番機で標高 2,400m の麗江へ、この町はナシ(納西)族の町。この民族の文化程度は

高く、唯一、独自の文字、トンバ象形文字を保有し、世界記憶遺産に登録されていることでも知られている。



麗江、旧市街

街からは聖なる山、玉龍雪山が望める。美しいこの雪山は麗江のシンボル的存在となっており、標高は 5,596m。年間を通じ、山頂の雪は消えることなく、真っ白い龍が横たわっているように見えることからその名がついた。

そして雲南省唯一の世界遺産、旧市街「古城大研鎮」は 800 年以上の歴史をもつ。



玉 龍 雪 山

しかし、ここが世界に知られようになったきっかけは1996年の大地震。崩壊した町の写真を世界にアピールして援助を求めるところ、世界中からの訪問者がその町の歴史的景観に驚き、世界中へ紹介したらしい。水路が幾筋も流れ、石の橋は数えきれない。屋根は全て黒瓦で京都に似ている。中心の四方街では民族衣装を纏った地元ナシ族の女性たちが円になって踊っていた。おしゃれな民族雑貨や民芸品店が軒を連ね、それらを見て回るのも楽しい。ただ、かなり商売中心の商店街的なイメージも拭いきれない。



納西族の踊り



店先でバケツの水一杯で髪を洗う婦人



歩きながらきゅうりを食べる北部の人



市場から生きた鶏をぶらさげて持つて帰る少女

麗江郊外のモウギュウハイ(犛牛坪) 3,600mは眼前に玉龍雪山が見える大平原。リフトで25分。石楠花の林をぐんぐん登っていく。熟年組みにはありがたい交通機関だ。このあたりはチベット族の牧場でもあり、ミニハイキングで高山植物を楽しめる。桜草とブルーリンドウは判ったが後は不明。赤白黄色まさに高山植物の楽園。チベット仏教の寺院でチベット美人を発見。



虎跳峡



恥ずかしがるのを頼み込んで

麗江から虎跳峡へ。揚子江の支流、金沙江はここで川幅は極端に狭くなり、両岸にぶつかる轟音は迫力あり。両岸は1,000m以上の天をつくような断崖で、そこに車を見たときはまさに信じられない光景。河は5,000km蛇行して上海の海に流れ込むそうだ。駐車場から玉龍雪山の裏側の断崖を削り込んだ道を約1時間。人力車もあり。2人まで片道20元、そして往復50元。あれつと思う人のために、差額の10元は終点での待ち賃とか。しかし、その2人乗車の速度は空荷でも追いつけない。速い。

香格里拉(中甸)（シャングリラ）は迪慶チベット族自治州の州都で、昆明からは約700キロ、雲南省の北西部に位置する。標高は3,276メートル。アメリカの小説家ジェームス・ヒルトンの作品「失われた地平線(Lost Horizon)」の中で描かれた土地。この地域の風景が小説の中の記述とほぼ一致することや、中甸を表す古チベット語の意味がシャングリラの意味と同様なことなどがその由来とのこと。ヒマラヤ山脈の東の端にあたり、金沙江(長江)、瀾滄江(メコン川)、怒江(サル温川)というアジアを代表する3本の大河が山脈をはさんで南へと並行して流れている。三江並流のダイナミックな世界奇観を作り上げた。「雲南保護区群の三江並流(Three Parallel Rivers of Yunnan Protected Areas)」自然景観がユネスコの「世界遺産」に収録された。



金沙江大回湾

さてこのあたり(超 3,000m)になるとやはり高地。人により軽い高山病の様相となる。頭痛や吐き気に至らなくとも、階段の上りがつらい。ガイドも“走ってはいけません”を繰り返す。酸素ボンベはどこでも手に入るが、ガイドから買うと 50 元、スーパー(超市)では 25~30 元。ガイドは、量が違うとか質が違うとか言うけど、どうも同じくさい。試しに 1 本買ってみた。お寺の階段や坂道を登るとき、酸素一吸いで足の重さが断然軽くなった。効果抜群。



シャングリラ郊外にナバ海と称する大草原がある。実は 7,8 月の雨季には、周囲の山々から流れ込む雪解け水で湖水となる。もう一つは、碧塔海と言うほぼ富士山くらいの標高にある湖水。そこでは、ヤクや馬、羊がノンビリと草を食んでいる。時間が止まっているかのごとく、

ゆったり。



碧 塔 海

ちょうどつつじの季節。ピンク、薄紫色が多い。遊歩道の写真撮影ポイントには必ず、原住民の撮影補助隊がいる。民族衣装、それを着た子供、馬や羊など。点数によって値段が決まるが、通常は 5~10 元。安いけどわめてしつこい。撮らせるまでついてくる。子供には負ける。



チベット族の衣装を着て踊る子供達

チベット寺院

このあたりには多くのチベット仏教寺院がある。中でもシャングリラの郊外の松贊林寺は最大のもの。今でも 700 名あまりの僧侶がここで

暮らしている。家族から僧侶を出すことは名誉ではあるが、その生活費は全て家族負担という。寺院の本殿に赤色の四角い柱が立ち屋根は総金箔張りの豪華な建築。柱には各種の花模様飾りが彫刻されている。花模様飾りの色調は黄色と青を主としている。真正面にいろいろな仏像が祭られている。最も印象的だったのは、灯明は菜種油などの植物油ではなく、自家製のバターの油分を利用していている。そして多くの灯明が付けっぱなしで、かなりのバターを消費するとか話していた。



松贊林寺

佛教寺院

円通禅寺は1200年以上の歴史を誇る古刹、昆明市内唯一の佛教寺院である。

普通の寺院は南側に大門があり、そこから北へ向かって山を登るように建築が一直線に並んでいるが、円通寺は奥に進むにしたがって下つていき、一番重要な建築ものである「大雄宝殿」が最も低い位置に建っている。多くの信徒が長い線香を掲げ熱心に拝んでいる。床に頭をつけるためのマットも用意されていた。



円通禪寺

これはチベット仏教の、五体投地の影響だろうか。因みに、五体投地というのは、足と膝、肘、そして頭を大地につけた後、全身を伏せ手の平は上を向ける。手にお釈迦さを受けるということから、この祈り方があるらしい。

高山植物

雲南省全体が高山植物の宝庫といえそうだ。湖畔、高原、山地は言わずもがな、田んぼのあぜ道でさえ、お花畠となる。今回は時期が少し早すぎたが、6月からの雨季が見ごろとなるそうだ。ただ殆ど名を知らないのは残念至極。プリムラ、リンドウ、ケシ、百合、ツツジ、サクラソウ、エーデルヴェイスまで。



ツツジ



ブルーリンドウ



サクラソウ



? ? ?

梅里雪山

雲南省とチベット自治区の境界に位置し、長さ 30km の山群の総称である。最高峰・カワカブ（白い雪）は標高 6,740m。6,000 メートル以上の頂が 6 つ、一年中雪におおわれる頂が 20 以上ある。全て未踏峰。チベット族の心のふるさと、神聖な山として崇められてき靈峰である。その峰々全てが神である。



満月に浮かぶ梅里雪山

明永冰河は、カワカブの下部に端を発し、最も緯度の低い、最も標高の低い氷河である。末端は標高 2,600m、森林の中に落ちている。

また、この辺りはヒマラヤ山脈の東に位置し、金沙江（長江の上流）・瀾滄江（メコン川の上流）・怒江（サル温川の上流）の 3 つの大河が、わずか 70km から 100km の幅で並行して流れ、「三江併流」とよばれる大峡谷地帯を形成する地球歴史の激しいところである。

麗江から 4,292m の峠を越えて徳欽（とくきん）に入り、更に道はチベットのラサまで 1,800km。徳欽は梅里雪山への拠点となる町である。



梅里雪山主峰と明永冰河



白茫雪山峠(4,292m)



白茫雪山峠へのつづら折れ道

ここには梅里雪山を拝むためともいえる寺院、飛来寺がある。丁度メコン川を挟んだ対面に梅里雪山を遠望できる。

今回は4月の豪雨で道がかけ崩れ寸断されているとのことでいけなかつたが、徳欽から車で10分ほどチベット方面へ行き、Uターンをしてメコン川を渡り対岸の明永村へ、そこから馬又は徒步で氷河の見える展望台に行くことが出来る。

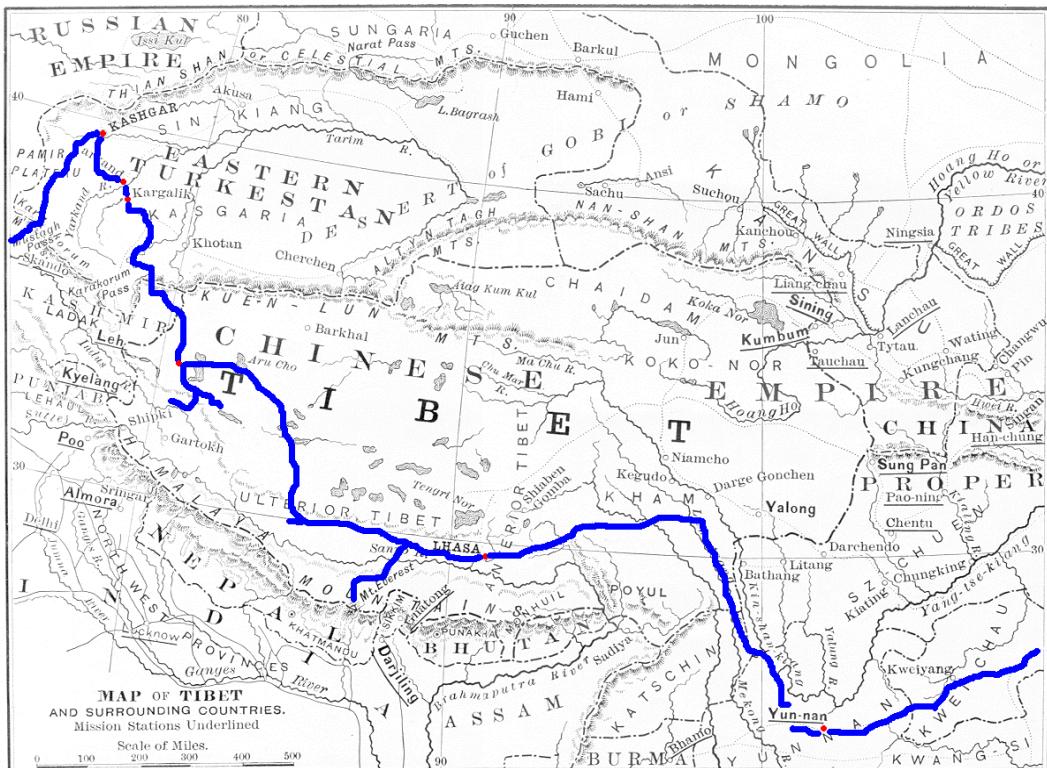
最後に述べておかねばならないことは、1991年1月の大惨事。日中合同の梅里雪山第2次学術登山隊の17人の登山隊員は、明永冰河源頭につくられた標高5,100mのキャンプ3で、2日前からの豪雪によるなだれに遭難、全員が帰らぬ人となつた。1998年7月、遺体や遺品が発見され始めた現場は、キャンプ3の下流に当たる明永冰河の標高3,700m付近である。遭難者は水平距離4,000m・高度差1,400mを、7年半かけて流下したことになる。この流下速度はヒマラヤ地域の氷河よりもはるかに大きいとのこと。最後にこの登山隊の日本隊長、井上治郎氏は小生の中高時代の4年後輩である。ご冥福を祈ります。



梅里雪山を正面に見る飛来寺境内にある慰靈碑

チベットヒッチハイク横断紀行

森本 寛之 (理工学部4年)



MISSIONARY MAP OF TIBET. (Dotted lines indicate trade routes.)
The Scandinavian Alliance Mission has also Tibetan Missionaries in Ghoom India, in Baksadnar, Bhutan, and in Guntak, Sikkim.

2006年の春、悩みに悩んでいた。それは自分で決める、人生で初めての大きな岐路に立たされていたから。夢を叶えるか、或いは就職活動をし、無難に卒業するのか。

大学入試の時でさえ、ここまで悩むことは無かった。そして、さほど、人生の岐路だとも思わなかった。みな“右へ倣え”で勉強し、自分もその群衆のうちのひとりでしかなかったから。

自分の夢とは、中国大陸を越え、チベットの高みを目指し、ユーラシアを横断してエジプト

へと至るルートを飛ぶ鳥のように自由奔放に巡ることだった。時間も気にせず、未知の国に飛び込み、現地の文化に密着する。そんな旅がしたかった。

出発を決定するまで、何時間家で悩み、大学の講義中に悩み、また、会社説明会の会場で悩んだか計り知れない。そして最後には、教務部の前で、休学届けに判を押した状態でも悩み、結局、最後は“えいやつ”と休学届けを投げ、2006年5月、夢であった空白の一年間を自

らの手で創ることに決まったのである。

今回は、2006年、大陸横断旅行のうちの中国、チベットについて書こうと思う。

休学が決まったのは良いが、自分には右も左もサッパリわからなかつた。何しろ、それまで国内しか旅したことが無かつたもので、パスポートはとつたものの、ビザをどこでどうやつて取り、国境はどう越えたら良いものだか、分からぬ事だらけだつた。

分からぬ、分からぬでは話が前に進まないから、とりあえず、最初の入国を決めていた在大阪中国領事館へ出向いてみることにした。書類を書いて提出窓口へ行くも、なんと窓口のお姉さんはあんまり日本語が通じず、ましてや英語が通じるはずも無く、四苦八苦した。大阪でビザを取るのにあたふたしてては、先が思いやられる。果たして自分は世界旅行などできる身分なのだろうか。

悩みや不安は星の数ほどあり、この星の数もある悩みを全て解決してから出発したのではらちが明かない。「もう、なんとでもなれ！」と決めたのが5月の15日。取つたチケットは大阪南港16日正午発、上海行きフェリーだった。

旅立ちを決めたのが出国の前日だったため、以前から見送りすると言われていた友達にも、結局連絡しなかつた。高々1年ほどの一人旅ごときで見送りされるのは性に合わない気がした。

出発の日、35リットルのリュックひとつ背負い、地下鉄中央線本町駅のホームで南港コスモスクエア行きに列車を待つた。左右をみれば、なんだか同乗人になりそうな人間がチラホライた。同じようなことを思いつく人間同士は、それとなく同じニオイを感じるものだ。やれやれ。

手書きで、ペラペラで、愛想の欠片もない上海行きチケットを中国人の係員に見せ、大阪港

の小さなパスポートコントロールに並ぶと、中央線で見た連中がいた。やっぱり。彼らはこれから40時間以上の船の生活を共にする仲間であることが明らかになつた。

船内で日本人らは専ら中国語を一生懸命勉強していた。中国語抜きに、中国を自由旅行することは事実上不可能だからだ。がしかし、自分はその時点で、そのことに全く気づいていなかつた。まだそのときは、外国語＝英語だと勘違ひしていた。

中国語講座や中国人との晚餐が終り、眠りから覚めたら、眼前には大きな大陸とどんよりとした靄が見えた。中国だ！上海だ！！船着場は外灘^{バンド}に面しており、テレビで見たことのある上海の光景そのものである。その日は上海駅で桂林行きのチケットを取つた。どうやら翌日発車分に空席があり、即時発券で運賃は二等寝台で330元（約5000円）だつた。

翌日、物価の高い上海を去るべく駅へ向かつた。列車番号ごとに、待合室が分かれていて、人間よりも大きな家財道具一式を包んだ麻袋を背負つた人が何百人といつた。列車は20両編成くらい、しかも一両が日本のそれよりも大きかつた。

自分の乗る二等寝台車は何故か雰囲気が違つていた。小奇麗なドレスを着た女人や、スーツを着たちょっとと小太りなビジネスマンが乗り込んできた。あれ？自分の車両には麻袋はひとつも無かつた。

車内で話をしていると、上海のビジネスホテルの経営者や貿易会社で働いている人など、高所得者の人たちだつた。なんだ、あの麻袋の人たちとは違う列車だつたのか。

コンパートメントでの話も一段落し、車内を散歩した。20両編成もあると、かなりの距離を散歩することになる。編成の中間あたりに食

堂車もあり、そこは乗客の憩いの場・・・・ではなく、乗務員たちの社交場と化していた。これも広い意味で中国文化である。食堂車を跨いで反対方向へ行こうとすると、談笑していた乗務員たちは一斉にこっちを向き、怪訝な顔をした。なぜだろう。止められはしなかったので、そのまま前に進むと、そこは、それまでの車両とは随分と雰囲気が違っていた。水浸しの洗面所には即席ラーメンのカスがつまり、ゴミ箱は溢れかえり、トイレは汚物があちこちに飛び散っていた。車両の奥まで目をやると、麻袋が通路に山積みにされ、その山積みにされた麻袋の上とベニヤ板に毛が生えたような座椅子にまたがって人が横になり、赤ちゃんが泣き叫び、向日葵の種が散乱する、それはまるで大震災直後の神戸のような光景だった。通路を塞ぐ麻袋に行く手を阻まれ、20両編成の全てを散歩することはできなかった。

食堂車を跨いだその瞬間、中国という広大な国の光と影を垣間見た気がした。



中国鉄道にて共にすごした仲間。別れのときは皆で涙した

6月に差しかかろうとするころ、雲南省独特の方言にも慣れた自分は、**徳鉄** というチベット自治区と云南省の境界線の街に居た。もう旅も慣れたもので、道端で売っている1個1元の

完熟マンゴーをかじりながら先を目指した。ここから先、チベット自治区に入るバスは、外国人とバレたらチケットを売ってくれないといううわさが立っていたが、中国語で注文したら何の疑いもなさそうに売ってくれた。

チベット から先の光景、それはもう未開の大自 然に囲まれた、それはもう言葉に表しがたい、想像を絶する世界であった。日本人はおろか、世界でもこの光景を見ることのできる外国人はほとんどいない。天を刺す剣のような山々。断崖絶壁を縫うように、標高をあげ、それはまるで天を目指すかのように続く道だった。



東チベット ラウォ、ポメ間にて

外国人がチベットの秘境を自由に旅するのは困難を極める。中国軍による検問は多いし、酸素も薄い、チベットを行くにあたって中国語は必須の能力である。横断路には毎朝3台ほど来るトラックが唯一の交通手段である。中国東風製トラックには荷物室も入れて最大5人くらい乗れる。そして、それに乗せてもらうのは、もう戦争のようなもの。チベット人ですら移動はきわめて困難というチベット世界で、片言の中国語しか話すことが出来ないひとりの外国人である自分がヒッチハイクでチベット横断するというのはとても骨が折れた。毎朝日の出の5時

には道路に出てヒッチハイクのため、国道に立った。日本にいると想像も出来ないことがある。チベットの道に車が通るということはとても貴重なことなのだ。チベットでのヒッチハイクはテレビで見る親指を挙げて“ヘーイ！”だなんて可愛いものではない。はるか遠くからトラックが巻き上げる土煙が見えてきたら決戦開始である。それをみすみす逃すとまた1日待つ羽目になる。運転するほうも必死だが、乗せてもらうほうもまた必死なのである。まずは車道を完全に塞ぎ、全身を乗り出して両手を大きく振りかざしでトラックの進行を妨害する。さすがに進路を塞がれたトラックはしょうがなく止まる。そして、しょうがなく止まってくれたトラックの運転手と交渉するという繰り返しだ。

運転手は窓から顔を出して中国語だかチベット語だかで自分に向かって怒鳴り散らした。なぜそんなに怒っているのだろうとおもったら、助手席や荷物室から合計6人くらいの人がこっちを見ていた。そう、トラックはもうすでに中国人やチベット人で超満員だったのだ。

乗ったら乗ったで、「やっとまともに走り出したか」と思った頃に必ずパンクする。“超”過剰積載、“超”悪路、“超”劣悪な中古タイヤ。チベットでパンクを誘発する3大要素だ。3日3晩、深夜も早朝でも構わず、2時間に1回パンクされるとさすがにウンザリする。

パンクすれば運転手もヒッチハイクの乗客も叩き起こされて修理の手伝いだ。金を払って乗っているのに、パンクしたら修理手伝いだなんて、日本の感覚ではおかしな話だとは思う。しかし、我が家で言つていられないのがチベットだ。こいつらとここで骨になるのだけは嫌だ。きっとみんな心のどこかでそんなこと思つていて、運転手も乗客も妙に連携して必死に手伝う。これまた大変な労働なのです。



パンクしたタイヤ、もうゴムが破断している。



パンク修理する運転手と手伝う同乗者たち



破断したタイヤはそのまま焼却処分

こんなヒッチハイク生活を送ること昆明から3週間。カイラスの麓、タルチェンの街まで着

いた。

腰も精神も見た目ももうズタボロになる。この極限状況で更に3日掛かりで歩いて拝んだカイラスはこの上ない思い出として残っている。このカイラス巡礼で訪れた標高5, 668 m ドルマラ峠は、自己最高到達点として心のなかで輝いている。

山を登る、旅をする。これらは別々のようにも見えるが、どちらも未知の世界への探求心のあらわれという意味では瓜二つである。自分は幸いにも若くして様々な宗教、文化、民族の人々とふれあう機会に恵まれた。百聞は一見にしかずというが、まさにその通りだとおもう。自分は今まで、理系であるということを隠れみのに、歴史認識などに関して不勉強だった。この旅を通して様々なことを学んだ。それはお金や時間では表すことのできない、かけがえのないものである。



カイラス北面、ディラ・ブク・ゴンパにて

* * * * *

日々の記録は森本君のホームページの過去ログを参考ください。

5月出発から12月帰国までの足取りは次の通りです。

(編集)

2006年

5月 16日	大阪南港発
5月 18日	上海
5月 21日	陽朔（桂林の隣）
6月 4日	マルカム（チベット自治区）
6月 9日	ラサ（拉萨）
6月 17日	サガ（薩夏）
6月 23日	阿里（チベット自治区）
7月 9日	カシュガル
7月 21日	フンザ
7月 27日	ペシャワール
8月 2日	シーラーズ（イラン）
8月 10日	テヘラン
8月 13日	カッパドキア（トルコ）
8月 22日	クシャダス（エーゲ海）
9月 6日	ハマ（シリア）
9月 15日	ダマスカス（シリア）
9月 21日	アンマン（ヨルダン）
9月 24日	エルサレム
10月 13日	カイロ
10月 17日	バンコク（カイロより空路）
11月 5日	ニャンシュエ（ミャンマー）
12月 5日	ビエンチャン（ラオス）
12月 19日	昆明（雲南省）
12月 21日	上海
12月 25日	神戸

森本君のホームページ

<http://blog.livedoor.jp/ss361092/>

— 論考 —

第二次大戦前後の山に関する「エピソード」

雨宮宏光（昭33経）

I 戦時の山・1934～1945

甲南山岳部

昭和4年春、香月慶太、伊藤憲、壇淳、西村格也、湯川孝夫の5名が穂高を目指したがこのとき上高地で早大山岳部と一緒に左翼思想の先駆をうけた。

マルクス思想に共鳴した甲南ボーイは昭和9年2月特高警察が9名を検挙(内山岳部6名)。同じ時期姫路高校の宮崎辰夫(元神戸市長)は放校処分されたが、甲南は時の校長平生鉢三郎の権力に屈せぬ精神から1年後全員復学する。もし復学がなかったら主力部員を失った山岳部はどうなっていたでしょうか。

昭和17年山岳部は剛健旅行班と名称変更され、軍部指導の徒歩行軍に参加せよとの学校方針であったが従わず山への情熱抑えがたく、大東亜戦争開戦をよそに冬の奥又白に8名入山。

軍部指導の奥穂高登攀

同時期(昭和17年)日本山岳連盟は軍部指導で組織されていた「大日本体育会・行軍登山部」として吸収され、藤木九三は岳人側の常務理事になる。この綱領には「我等は行軍登山を通じて戦力の増強を図る」、「ヨーロッパ起源のアルピニズムを以て、修驗道にかえれ」とうたわれており、昭和18年新雪の奥穂高で、機関銃を背にアイゼンつけての夜間岩壁登攀を行っています。

RCCの創設をもって登山界でのアジテータとしての役割をもった人として、単なる兵隊としての行軍登山参加でなく、指導者としての参

加を知ったとき縁浅からぬ甲南山岳部の先輩たちはどう思ったでしょうか。

だがおぼろげに戦時を知る私には、家族の生活を守るためにやむなき行動であったと思う。

戦争を知らない世代が藤木氏の行動を非難しているが、同じ状況におかれたとき、家族の生活を犠牲にしてまで、軍部の権力に抵抗できたか。アホらしい登山でしたが、軍部公認で世間をハバカル必要なく、藤木氏は涸沢でひさしぶりに穂高連峰を見上げたのです。

登山家と銃

インド・チベットでの12年間に及ぶ予期せぬ逃亡生活と歴史に翻弄されたハインリッヒ・ハラー、ナチの兵隊として銃をとったヘルマン・ブル、バルチザンだったリカルド・カシン等、これ等登山家の不本意な戦争参加は、そんな時代について運が悪かつただけです。

しかし彼らは登山によって、戦時のいやな体験をすべて洗い流したに違いない。アイガー北壁、ナンガ・パルバット、グランド・ジョラス北壁での初登頂の記録は永遠に不滅であり、不本意な戦時下体験によって汚されるものではありません。この3人のうちで最も多くの戦時、戦後体験をしたハラーについて記します。

ハインリッヒ・ハラー(1912～2006)

ハラーの著作「新編・白い蜘蛛」発刊に先立ちインターラーケン在住の翻訳者の長谷見敏氏がハラーとの会見から聞いた、隠されたアイガー北壁での秘話を長谷見氏がネットで公開して

いますので引用します。

オーストリアの貧乏学生だったハラーが友と2人でアイガー北壁に挑んだとき、アルプスに残された最後の壁で遭遇し、ザイルを共にして初登攀の栄光を共有した2人組はナチが国家威信をかけ、切り札としてエリート養成所で鍛え上げアイガー北壁に送り込んだ必殺の精銳クライマー、ヘック・マイヤーの2人組だったので。もし遭遇していなかつたら2人組は別行動で初登攀を争つたでしょう。

このことをハラーは長谷見氏に憂鬱そうな顔で語ったそうです。1938年のアイガー北壁初登頂ルートは、ヘック・マイヤールートとなっています。(オーストリアはすでにドイツに併合されていたのでアイガー北壁の栄誉はナチに帰しました)

アイガー登攀のときハラーは鉗靴(アイゼン無し)同行のフィリッツが10本爪アイゼン装着でこれは熟慮のすえハラーが決めたのです。

岩壁はハラー、氷壁はフィリッツがリードする計画でした。一方ドイツの精銳マイヤー、フェルク組は最新の12本爪アイゼンに加えて数種類のハーケン、アイスピック他、貧乏学生のハラー組とは雲泥の差の装備でした。

マイヤー達は今回の登攀にあたり後援者(ナチ)があり思うがままの装備をそろえられたとハラーに言ったそうで、ハラーは後援者と曖昧な表現をしています。

ヘック・マイヤー2人組との遭遇シーンの著述も不自然で、「新編・白い蜘蛛」執筆のときはさぞかしいやな想いだったでしょう。

ハラーはアイガー登攀での実績から、ナンガ・パルバットの遠征隊員に選ばれ以後12年間のインド、チベットでの生活と戦争に翻弄され

1952年に帰国した。

戦前、戦時にこれほどの体験をした登山家はハラーだけでしょう。

ハラーはヒマラヤにいけるのならドイツで結構、(当時のドイツはゲルマン民族の身体能力の優秀性を誇示するためすぐれた登山者に最新の装備を与え又、オーストリアはすでにドイツに併合されていたのです)

「私はそれにのつかつただけで非難されるのは筋違い」と憮然とした表情で語ったそうです。
..この内容も「新編・白い蜘蛛」には書かれていません。..

帰国後、その著作、「白い蜘蛛」・「チベットの7年」が国際的ベスト・セラーとなり、オーストリアの国民栄誉賞を受賞するなど戦時の苦労が報われた日々を過ごしていたのに、1997年、映画「チベットの7年」封切りを狙ったようにドイツの「シューピーゲル」誌でハラーとヒットラーが並んで写っている写真と、彼がナチの親衛隊員であった過去を暴露され、ナチ・アレルギーのオーストリア国民に追い詰められ窮地に立たされた彼は、やっと得た穏やかな暮らしが途絶え、戦後40年を経て再び戦時の悪夢に引きずり込まれた。

94歳の生涯を閉じたとき来し方を回顧した彼の胸に去來した思い、それは戦争という狂気に翻弄されあまりにも多すぎた出来事での人生でしたが、1936年グラーツ大学在学中のスキのオリンピック代表、1937年世界学生滑降競技優勝、47歳のときオーストリアオープンゴルフで優勝、探検家としてフンボルト金賞受賞、晩年のチベット解放運動そして、運命の分岐となつたアイガー北壁初登攀など—“やり残したことない”—という感慨だったでしょう。

アイガー北壁・冬季ディレッティシマ

1966 年の事で戦後の山の頃に書くべきですが、ハラーの話のついでにヨーロッパアルプスで行き場を失った奇形アルピニズムの終焉ともいえる出来事を書きます。

多くの登山家を輩出したアイガー北壁を一直線に攀じるこの計画の発案者はジョン・ハーリン(米)。ハラーは彼の印象を次のように述べています。

金髪の格好良い男。カンサスシティ出身のパイロット。宣伝効果を的確に嗅ぎ出す本能とスペクタルな演出をやる男。1962 年アイガーを間近に見たいと世界旅行のさなかやってきたテンジン・ノルゲイをこの計画に誘い、大演出効果を図った男。(テンジンはアイガーを見て断っています。北壁は彼の型ではなかった。彼の強みは高所の氷雪の中での持久にあったからです)

またジョン・ハーリンは更に効果を高めるため氷河パイロットにヘリで至近距離からの撮影を依頼。

一かくしてアイガー劇場の幕は開かれた—

1966 年 2 月、英、米、独の混成隊は 13 名という岩壁登攀にしては多すぎる人数で直登を試みた。ルートなど関係ない、スラブもオーバーハングもとにかく一直線に登らねばならない。人海戦術で埋め込みボルトや荷揚げ用ウインチや人工登攀器具をふんだんに使う山岳工事だから 13 名もの山岳工を必要とした。

その結果 8 週間という日数をかけ、頂上までハーケン、ボルトをべた打ちし、2,000m のフィックスロープを垂らした。13 名の隊員がいても岩壁登攀ではトップは 1 人しか要らない。それに 1 人の確保者がつきその 2 人で工事を続け、

あと 2、3 人がルート整備、荷揚げを行い、残りのメンバーはする事がないので麓で休養した。

工作隊も一日の工事が済むとフィックスロープを伝わって麓でゆっくり、翌日は別のメンバーがユマールを使ってトップの位置まで戻り又、一日の仕事開始。天気が悪い時は全員がホテルで休養と、トモ・チェセンが 12 時間で(一直線ではないが) すませた北壁で 8 週間も山岳遊戯をしていたのです。

計画発案者ジョン・ハーリンは冒頭したアイガーのシッペ返しか、蜘蛛の下部で滑落死亡し、残った 12 人のうち 5 人が 1966 年 3 月 25 日頂上に達した。

アイガーがアルプス岩壁初登攀の頂点に位置づけられてきた時代は去って久しい。アイガーはアルピニズムと関係ないアクロバティックな山岳遊戯の舞台で観客の前に登場させられた。なぜかこの登攀にハラーは批判的でない。

写真撮影で参加し頂上に立ったボニントン(英・登山家・著述家・写真家・冒険家)、ドゥーガル・ハストン(スコットランド・エヴェレスト、アンナプルナ登頂者)他の登山家の肩書きと山歴に遠慮したのか。初期の隊員同士の論争や競り合いの後に生まれた団結と友情に敬意を表したのか。

正統派のボナッティ他の登山家はこの登攀に顔をしかめています。

ただ 1 人墜落死したジョン・ハーリンの息子の新作「執念のアイガー」(未読です)に、12 人の隊員から 5 人の登頂者を選んだ経緯をどう述べているか又、この垂直の登攀をどのように評価しているか興味があります。

1941 年(昭和 16 年) 上ヶ原から剣岳への徒步登山

行程百十二里 背に八貫余 関学の剣岳行軍登山

戦時下、関学生が西宮から剣岳まで歩いて登頂したこの驚くべき事実は、関学OB南井英弘さんの執拗な調査によって見つけられた当時の新聞記事から詳細が判明しました。

年月日：1941年（昭和16年）

7月11日～8月1日

参加者：L井原潤達（法文4年生）

他 計4名

目的：ヒマラヤ遠征を想定

大阪毎日新聞1941年（昭和16年）8月10日と11日版に連載された井原潤達さんの投稿記事に行程の詳細があります。

『関学山岳会のH・Pを参照ください』

大阪毎日新聞の見出しあるまに戦時を彷彿させます。戦時下で世間の目をはばかっての出発でしたが、皮肉にも時を経ず行軍登山はむしろ軍部の奨励する（昭和16年末頃から）ところとなりました。

一切のパフォーマンスなく、当時のこととて、シェルパ・ポーター等に思い及ばず“担いで歩く”がヒマラヤへの道と、ただひたすらに歩き続け17日かけて遂に剣岳頂上に達した。井原潤達さんは1日半で剣岳頂上にいたる現在の人達が得る達成感とは較べるすべもない充実感を得たに違いない。

新聞記事から当時の歩行経路を紹介します。
徒步行程：112里（KGAC部報では140里）
歩行経路：西宮・上ヶ原・関学—大阪平野—笠置山脈—鈴鹿・愛知川（16日泊）—摺鉢峠—関が原—垂井—大垣—岐阜—山崎（20日）—飛騨川遡行—中麻生（22日）—木曽路—高山（26日）—船津—跡津川畔（28日）—大多和峠—有峰

（29日）—眞川増水により途中で引き返す—栗巣野—称名の滝—ブナ坂—弘法小屋（31日）—弥陀ヶ原—雷鳥沢—剣岳頂上（8月1日、午後4時）

II 戦後の山・1945～

平和な時代となり戦時体制で抑圧されていた各国の登山活動が一気に噴火しヒマラヤでの初登山競争の時代を迎える。

以下に 国威発揚の山、プロパガンダの山、民族主義発揚の山、個人の自己実現の山に分けて書きます。

国威発揚の山

戦争終結後、行き場を失った戦勝国の霸権争いは、山の世界での最高峰エヴェレストにその舞台を求めます。

エヴェレストの英國隊初登頂以後（1953）、イスラエル隊（1956）、中国隊（1960）、米国隊（1963）、インド隊（1965）、日本隊（1970）、イタリア隊（1973）とマンモス遠征隊がエヴェレストを目指し世界の最高峰は登山料の外貨獲得でも世界一とネパールに貴重な外貨をもたらしました。

ソ連の飽くなき領土拡張と個人権力誇示の山として旧ソ連以来の指導者名を冠した山として、キルギスの「カウフマン峰＝レーニン峰（7134m）」、タジキスタンの「旧スターリン峰＝コムニズム峰・（現イスモイル・ソモニー峰）（7,495m）」がありました。旧ソ連の体制崩壊後支援を失ったソ連の登山家が公募隊のガイドに転進するなど、国が支援し国威をかけた高峰登山もやがて終焉し、国威発揚は“山から宇宙へ”、高峰登山は個人の自己実現が主流となります。

プロパガンダの山

1975 年中国隊がチョモランマを登頂した当時のチベットでチョモランマを目指す中国隊の動きを、メスナーの著作「ガラスの地平線—チベットを通じてマウント・エヴェレストへ」から、彼の言を借りてその一部を紹介します。

1951 年チベットを占領した時エヴェレストの北側は中国の手に入り、世界最高峰を中国の国威発揚の場として利用することを実行したのです。メスナーの言を借りるなら・・・

毛沢東は「国民大衆のなかには、無限の創造力がひそんでいる。彼らは自ら組織し、どんな場所でもどんな分野でも、可能な限りその力を発揮して、前進を達成することができる」と言った。

1975 年に機は熟し党を賛えるため、最大規模の遠征隊がラサから長い山麓行進を開始する。トラック輸送のため山の麓にあるロンブクまで道路が建設され、更にロンブクから、標高 6,500 m の地点にあるベース・キャンプまで電話線を敷設した。

来る日も来る日もスピーカからは共産党の志氣を鼓舞する演説がなり響き、朝の体操が肉体を鍛え、イデオロギー的な討論が心を鍛えた。

—中略— 1975 年 5 月 27 日 200 名以上の隊員の支援の結果 9 名(内女性 1 名)が登頂する。

前回の疑問視された登頂(1960 年)にこりて、世間で誰ひとりその勝利を疑問視できない対策を講じた。つまり頂上には、毛沢東の旗を掲げた測量三脚を設置し、又計画のはじめから終わりまで映画に撮つたのである。

— チョモランマを舞台に演じられたこのプロパガンダをメスナーは、冷ややかな文章で紹介しています。

民族主義発揚の山・3人の登山家

I イエジ・ククチカ(ポーランド・1948~1989)

メスナーに挑戦

メスナーが 16 年かかった 14 座を 1979 年ローツエに始まり 1987 年シシャパンマと最短 8 年間で登頂。そのうち 9 座は新ルート、2 座は冬季。1989 年ローツエ南壁 8,200m で転落死。

II ヴォイテク・クルティカ(ポーランド)

超速攻登攀を標榜(注)

1989 年チョー・オユ(8,201m)。シシャパンマ(8,013m)を 3 人パーティで、いずれもベースから頂上まで標高差 3,000m を一昼夜で往復するという離れ技を演じています。

(注) 1 日獲得高度 3,000m、往復なら、前進テントなし、高所衰退なし、天候持続 2 日でよしで登頂確率高い。

III トモ・チェセン(スロヴェニア・1959~)

虚像?に挑戦

1985 年ヤルン・カン(8,505m)登頂。1986 年 3 月の 1 週間でアルプスの三大北壁を連続ソロ。アイガーを 12 時間、グランド・ジョラスを 4 時間、マッターホルンを 10 時間で完登。

1990 年ローツエ南壁ソロ。3 回のビバークを含め登り 45 時間下り 17 時間。その信じがたい登頂成功が疑惑を招く。

最強・ヴォイテク・クルティカとイエジ・ククチカのポーランド 2 人組

ガッシャブルム II 峰南東稜(8,035m)、ヒドンピーク北峰初登攀(8,068m)。

ブロード・ピーク北峰—中央峰—主峰までの完全縦走(1984 年・期間 6 日)

高所での縦走をたった 2 人(酸素無し、ハイ・ポータ無し)で成功させたのです。1979 年日本

のカモシカ同人隊のダウラギリⅡ峰—Ⅲ峰—V峰のヒマラヤ初縦走は隊員 20 名、シェルバ 30 名、期間 60 日と、対象が違うといえポーランドの 2 人組は山岳史上最強のチームでした。この縦走以後 2 人はコンビを解消し、ククチカは 14 座に、クルティカは超速攻登山を標榜する。

この 3 人の登山家にはトモ・チェセンの「孤独の山」（近藤等訳）以外ほとんど著作がありません。「孤独の山」の内容も、トモ・チェセンの著述部は少なく一冊のハード・カバーの体裁を整えるため、彼に向けられた疑惑と反論、小西正継のヒマラヤクライミングの進展を編集してページを埋めています。

クルティカは 1 日で 3,000m の高度を獲得しその日に下降という極限の登攀に、なぜそんな苦しい登攀をするのかと問われ「登山とは身心を過酷な状況に追い込みそれに耐え、それを克服したいため」と答えています。（この辺まではわかります。しかし以下からはよくわかりません）

そして「登山とはそのように山を舞台として自らに強大な負荷を課し、それを超克すること—“も”—目的とする行為」と規定しています。

（クルティカ論文「山の道」）

クルティカの山は苦行の修験道場だったのか、登山費用は国の支援があったが、その負荷に一切言及せず哲学問答のような答え、—“も”—には、山の世界で自分を誇示する気持ち—“も”—あつたが、それよりも身体能力の極限に耐えて、そこに自分の存在を確かめることの方が満足度が高いという意味か、税金使用の気兼ねへの答えは費用対効果を最大とする超速攻登山（修験登山）か。

ヤヤコシク言わず「高峰登山では超速攻がもっとも安全、安上がり、登頂確率よし」ならわ

かります。

（但し 1 日で 1 合目から頂上まで富士山を 2 往復する位の馬力あっての話で小屋代不要、天気の心配なし、高度、距離あいませんが、酸素希薄を勘案したマンガの計算です）

ククチカは難しく言いません。メスナーを超えた「登攀内容」で 14 座を目的とした。更にメスナーを超えると、メスナーが敗退した、ローツエ南壁を選び転落死亡した。

ポーランドとスロヴェニアはソ連、ドイツの大国にはされ長く国が分割されていたが困難な歴史の中で育まれた 3 人の 1980 年代のデビュ一は衝撃的でした。

150 年に及ぶソ連とドイツの圧迫、悲しい国家分割が解決に向かったとき、この両国に民族主義発揚がわきあがる。1990 年頃までの共産圏の国は優秀な登山家に費用と休暇の心配無しに生活を保障し山に専念させたのです。

（1985 年、K2 のベースキャンプで知り合った山田昇（9 座登頂者）とクルティカが 1986 年トランゴ・タワー（6,231m）に行つたとき、山田たちの登山費用捻出の苦労話を聞いて、「自分の金できているのか、驚いたね、オレたちは国や企業の援助で金の苦労は一切ない」といっています。

国内に 2,500m 未満の山しかないこの両国の登山家は、国家と国民の支援を得てアルプスや海外で充分なトレーニングを積み難易度の高い高峰のバリエーションに挑み山の世界では大国を凌駕したのです。

真偽不明ですが 8,000m 登頂で別途ボーナス支給、不成功のときは支給無しと成果主義をとったのです。（登頂確率を高める為、天候安定を狙つて一気に速攻登山がほとんど）

トモ・チェセンはローツエ南壁登攀後、希代のフィクション？かとその成功に疑惑をもたれ、論

争の末に山の世界から去り、イエジ・ククチカは、ローツエ南壁8,200m付近で転落死亡。

クルティカは1992年のK2西壁(敗退)以後1998年、来日し山野井康史と「自由への挑戦」と題される対談をしています。

クルティカはこの対談で「ヤマノイ、あなたの登攀歴を見ていると、私の登り方と似ていてうれしくなります」と語っています。(「凍」・沢木耕太郎)

それから〔2001~2003〕の3年、クルティカと山野井は、ネパールの無名峰、K2東壁、ラトックI峰北壁…いずれも悪天候で敗退したが、クルティカは登山を継続しています。

ポーランドとスロヴェニアの輝ける星は民族期待のプレッシャーにつぶされたのか。

ククチカはこの世になく、チェセンは山に関して一切語らず、その真意聞くすべはありません。

自己実現の山・3人の登山家

ブルー・メスナー・山野井

最高の自己実現は単独極限の登攀にあるとして3人の登山家を選んだ。

1 ヘルマン・ブルー

(オーストリア・1924~1957)

ヘルマン・ブルーは単独行者ではないが、ナンガ・パルバット北東稜の長大な稜線を最後に1人となって無酸素で突撃して初登頂し、8,000mで一夜のビバークに耐えて下山、これがその後のヒマラヤでの単独登頂の端緒となった。

エヴレスト初登頂の同じ年1953年7月3日から4日にかけて最終キャンプから頂上まで17時間、下り一夜のビバークを入れて23時間の苦闘の末討ち取ったゲルマン民族宿願のナンガ・

パルバット初登頂は、華やかなエヴェレストの報道の陰に隠れて、山好き以外には特に注目されませんでした。

隊長命令無視の突撃に、ブルーは8,000mの上では個人を拘束するチーム事情など知らない、ただ己の全力を尽くすのみ—言い切っています。

エヴェレストが国家事業ならナンガ・パルバットは古くヨーロッパアルプスに発したアルペニズムの発露の山であり、1950年までに7度挑み31名の犠牲者をだしたこの山の頂点に、ブルーは感傷の一切を排し、全能力、生命を賭けて前へ、前へと進んだのです。その登攀の様子、彼の心理などは彼の著作「8,000mの上と下」(三笠書房)「単独登攀」(瓜生卓造・二見書房)に詳細あります。

本を読んだくらいで、彼の心の奥底を知るのは不可能ですが、”登るか死ぬか”だという命と引き換えて得る充足感をどう説明すればよいのか。

ヘルマン・ブルーは、1957年6月9日 オーストリア隊 M・シュミック隊の4人登頂の1人としてブロード・ピーク(8,047m)に初登頂し、余勢を駆ってチョゴリザの登頂を試みたが、6月27日7,500m付近から天候悪く引き返す途中で雪庇を踏み抜いて死亡した。

”超人チョゴリザに墜つ“ あまりにもあつけない死でした。

滑落し、薄れゆく意識のなかでブルーは何を思ったでしょうか。ナンガ・パルバットの稜線が脳裏をよぎったでしょうか。

余談ですがそのチョゴリザに初登頂したACK隊はブルー死亡の1年後の7月22日6,700

m付近で、遭難したヘルマン・ブールのテントを発見しています。（「初登頂・花嫁の峰から天帝の峰へ」平井一正著・ナカニシヤ出版）

ブールがナンガ・パルバットにおいてきたピッケルも池田莊彦さんがみつけブールの未亡人に渡されています。又、長く疑問であったヘルマン・ブールのあまりにもあっけない遭難は甲南山岳会・越田和男が翻訳した「最後の足跡」

（甲南H・P参照）で遭難時ブールと一緒にいたクルト・ディームベルガーの手記を読んで、高所衰退からくる思考欠如・歩いてはいけない雪庇の上を歩いた・先行するクルト・ディームベルガーのトレースから離れて歩いたブールの不注意、と知りました。（「プロード・ピーク」M・シュミック著）に、チョゴリザでブールと一緒にいた、ディーム・ベルガーの遭難時の記述があるが「最後の足跡」ほど具体的でなく、ブールの死を美化した表現になっています）

II ラインホルト・メスナー (イタリア・1944~)

ヒマラヤのジャイアント 14 座を無酸素で登頂したラインホルト・メスナーは、一“なりふり”一かまわずの高峰登山に、無酸素、のルールを課し見事に 14 座を登頂した。

（無酸素、ソロはナンガパルバット（1978 年）、エヴェレスト（1980 年）の 2 峰）

南チロルで彼ほど多くの著作の発表、講演会を開催した登山家はなく、（費用支援のない資本主義国ゆえ自ら稼がねばならなかつたのです）「バイ・フェアー・ミーンズ」、酸素、ヘリ、過剰な登攀器具の使用は、人間が元来持っていた力と能力を最大限に發揮できる自由な自然や、山との対決から得られる喜びを妨害するから、アン・フェアーな登山をやめようと挑戦的言辞でメディアに叫び続けたのです。

1978 年オーストリア隊に参加したメスナーは無酸素でエヴェレストに登頂したにもかかわらず、再度 1980 年、エヴェレストに登頂したのは、1978 年の登頂は、P・ハーベラーも一緒にあり彼がソロで最高の能力を発揮したかったのか、または、14 座のすべてに、「バイ・フェアー・ミーンズ」を実践することに、別の意図があつたのかもしれません。

彼はその言のとおり以後 1986 年のローツエ登頂で 1970 年ナンガ・パルバットに始まった 14 座登頂を完結させました。また、メスナーは七大陸の山も登頂したがこれは商売上手なメスナーのマスコミ向けの営業政策でしょう。

先輩、田口二郎さんがその著書「山の生涯—來し方行く末」(上巻)で、登山史上の希有の人、ラインホルト・メスナーについて書かれた興味ある文章を紹介します。

・・長いですが原文のまま..

宇宙に飛びだすために不可欠なロケット技術は、アメリカとソ連が敗戦国ドイツからまっさきに持ち去ったものです。

米ソの人工衛星が宇宙で出会ったときに、ドイツ語で再会の挨拶をかわしたという笑い話がありますが、この最も貴重な財産を奪われたドイツ人は、無限の宇宙に向かう争覇戦を指をくわえてみているしかない。

しかしドイツ帝国主義が 100 年にわたって培ってきた心情、戦闘精神というものは敗戦国という制約のなかでも残っているし、宇宙からは締め出されても無限の対象に命がけで挑むという、ドイツ人の身に染みついた気質は消えることなく燃えづけている。

そして、勝利した帝国主義がやっているように無限の宇宙に飛びだしたいという心情が、登山においては無限の高みに、死と隣りあわせ

の世界に、無限の困難を克服して登っていこう、と言う姿勢となってあらわれる。

ヒマラヤの8,000mの高峰にたった一人で酸素なしに挑戦するという、前代見聞のメスナーの激しい登山は、これまで話してきたような歴史がつくりだした社会的精神バックグラウンドから生まれたもので、メスナーはいわば擬似的なアストロナウト、地上の宇宙飛行士ではないか。

ロシアには最初の宇宙飛行士ガガーリンが、アメリカには最初の月面歩行者アーム・ストロングがいるならばドイツにはメスナーがいる。
—中略—

この僕（田口二郎）の妄想に対して皆さんのお忌憚のないご意見をお聞かせください。

—————

田口さんの文を読んで、メスナーの著作に・・(多いのでさっと目を通しただけですが)・・この妄想を連想させる著述があるかと探しましたが見つかりません。

メスナーはいわば擬似的なアストロナウト、地上の宇宙飛行士ではないか・・に加えて！

—————

更に妄想をたくましくするなら、19世紀に英国のブルジョワによって、総ナメにされたヨーロッパアルプス登山に遅れて、19世紀末、独・仏・伊にできた勤労者山岳会、そしてその血を引く南チロル人と称するメスナーは、無酸素、ソロをルールとしたエヴェレスト登頂（1980）で、1953年の英國隊に比して装備の進歩はありましたが、帝国主義のエヴェレスト登頂に南チロル魂・《精神・身体能力の極限的登攀行為》のパフォーマンスを演じたのです。

戦争（火事）終わってなおつづく戦勝国優位は当然でしたが、山の世界で彼はくすぶりつづ

ける火事の余燼（帝国主義）に水をぶっ掛けた。

さらにメスナーの14座が【初】であった事に、最大の意味ありで、高峰登山の【偉大な遺産】なら、近代科学のすべて【酸素、食料、衣服、医療、登攀器具】を使った次なる【遺産】が、8000mのソロでの縦走なら、いつ、誰が、登山界でその主張をするでしょうか。

III 山野井 康史（1965～）

その著書「垂直の記憶」はクライマーが書いたものでは登山史に残る傑出した作品です。

山に寡黙な彼は、自らの登攀についてあまり語りませんが、プロ作家沢木耕太郎の著作「凍」には、生と死の分岐をかけて壁を攀じるときが最高の自己実現という山野井康史の思考が見事に描かれています。

講演会で見た彼は、Tシャツに綿パンとラフな格好で講演の終わりに来場者の質問に応えていましたが「来年はもうお会いできぬかもしれませんので質問は今どうぞ」と、少年のような笑顔で話していました。K2に行く前の年でした。

2002年ギャチュン・カン登頂の後、凍傷による手足の指を失っての壮絶な生還を「垂直の記憶」で読んだとき、彼は山では死がないと思いました。すさまじい下降中の冷静な判断には経験に加えて、技術、体力がつき果てての死なら甘受するが、～今はまだそうではないと～、不屈の精神で下降をつづけ奇跡のような生還をしたのです。

彼は語ります。（名を残すクライミングを求めた時もあったが現在は内に秘められたものがどれだけ發揮でき、満足できたかである。）

登山が、^{はため}傍目を気にして本来自分が志向した道を外れ、希少度、話題性のある方向に向かうときそれは外圧に墮した登山だ。危険だ。

(植村 直己の冬のマッキンリー遭難死は

傍目に負けたのです)

山野井は心に武装し「外圧を無視し、内なる満足を求める」一山を選ぶ。

寡黙な彼がメスナーの傍目を気にする登山に^{はため}胡散くささを感じた、ともした一言は、自分はそうなってはならぬと自らに鳴らした警鐘です。

凍傷の手術で指を切断した病院のベッドで、過去を回想し、「もう満足したかもしれない、諦めるかもしれない、ゆっくり暮らしていいのかかもしれない」—そんな彼は再起して、2005年7月中国四川省の大岩壁、ポタラ峰北壁に初登頂した。

最近の14座、七大陸、無酸素、最高齢、スピード等が、売りの登山には一切無縁、自己顕示とメディアへの露出などにはまったく無関心に、奥多摩で質素に暮らし、極限の闘争スポーツ登山を追いつづける彼は戦後が生んだ最高の登山家です。

日本での戦後の山

食料目当ての殺人事件

汽車の切符、山での食料調達が難しかった戦後、年月忘れましたが初冬の遠見？小屋で、登山者の食料目当ての殺人事件がありました。

食べ物ほしさに山など関係ない人が初冬の山に登る？？、飢餓から逃れるため人さえ殺す悲しい時代でした。

この話は確かに誰かに聞いたのですが、それが誰で場所が遠見小屋だったのか記憶がはつき

りしません。当時の信濃版新聞を（昭和22年～23年頃）を閲覧すればわかるでしょうがその気になれません。

甲南 1947年3月

死と隣り合わせ、前穂高北尾根登攀

小川守正（25歳）奥田泰三（18歳）

中村忠雄（18歳）福井亨（18歳）

積雪期北尾根は現在でもかなりの山の経験者のルートです。それを小川さんを別としても、前進テントなし、徳沢からラッシュで、当時の貧弱な装備、最少の食料で18歳の3人が挑んだのです。

この遭難寸前の登攀の様子を小川守正さんの著書「青春の山・熟年の山」から引用します。

「山など論外、麦飯が食えれば幸福な時代でした。そんな時代に地下足袋やマッチとの交換で食料を調達して山に行くという今では信じられぬ状況下での登山でした。」

しかし、食料調達はうまくいかず「握り飯4ヶとテルモス1本」の行動食で徳沢からラッシュで北尾根をアタックした昭和22年3月の甲南パーティの行動は、小川さんも言うように無謀でした。

食料不足のままに、それでも北尾根へと小川さんを駆り立てるのは、臆せずいえば、敗戦虚脱感からの脱出、更に戦時に抑圧されていた自由な登山への願望だったのでしょう。

そのアタックの状況は、雪崩の恐怖、空腹、口渴、下降中での滑落とまさに遭難寸前でした。その状況での小川さんの悲壮な気持ちは、

～以下原文のまま～

この山行の後半は常に死と隣りあわせという厳しいものだった。私だけなら死んでも仕方な

いが、7歳も若い人達3人を道づれにするのかと思うと自責に念にさいなまれ続けた。

そんな気持ちをかくして平気な顔でいなければならぬ。

生きていることが苦しいような気分を味あわされた山行だった。

—————

41時間の苦闘のすえ、ふらふらになって徳沢に下山も食べ物なく、小屋主、中畠政太郎に甘える遠慮から、更に坂巻温泉へ、同宿の早稻田のエッセンをくすねた奥田先輩の神業など、戦後もの不足時代の登山でしたが、後半部は小川さん一流の明るい文章ではっとします。

(甲南隊は3月25日午前1時徳沢小屋発、北尾根を登攀し、一夜のビヴァークで26日18時徳沢小屋着)

戦後の山から得たもの・・・と題した一節には小川先輩の山への思いがこめられています。

～以下原文のまま～

—————

小さな町工場を転々とし、3回も倒産の体験をさせられ人生の希望を失いかけたことも度々だった。その中で時々雪の山に挑んで生気と体力を取り戻し生きのびてきたようにいま振り返って思うのである。

私は山がなかったならこの戦後の10年間はもっと別な奈落に落ち込んでいたかもしれないと思う。

—————

エヴェレストに関するエピソード

I. モーリス・ウイルソン(英・1898~1943)

エヴェレストに永眠す

エヴェレストをソロで登ってみようと思った最初の男はイギリス人のモーリス・ウイルソン

でした。信仰と断食によって浄化された人間はこの世で何でも達成できるという確信に基づきエヴェレスト登頂を試みた彼の計画は、まず飛行機でロンブク氷河付近に不時着を敢行し頂に向かって前進するという奇想天外な案でした。

そのためまず無蓋の複葉機を購入しロンドンのエアロ・クラブで操縦を学び、インドのダージリンまで8,000キロを飛行することをはじめに考えたのです。

1933年5月21日報道陣に見送られ飛びたつ彼の愛機(エヴァー・レスト号)は7日後カイロに着陸、さらに飛行を続けたがネパール上空の飛行許可がとれずロンブク不時着計画はインドのプルネアで頓挫した。

仕方なく彼は愛機を売り払いダージリンに向けて出発、確実にチベットにつれていってくれる3人のシェルパを見つけ1934年3月21日チベットに向かう。ウイルソンのイギリス出発の日からほぼ1年が過ぎていました。

4月14日ついに4人はロンブクに到着する。ウイルソンがこの付近の土地について読んでいた印象と違い氷塔、亀裂岩塊の迷路に出会った彼は愕然とする。

アイゼンも持たず亀裂に落ちなかつたのはまさに奇跡といえた。

4月16日6,030m付近にたどり着き、さらに2日後6,250m付近で吹雪にまかれとうとう動けなくなる。

やむなく撤退しロンブクの僧院で休養し5月12日出発、3日後東ロンブク氷河6,400mに達し、近くでラトレッジ遠征隊の残していく食料貯蔵庫を見つけ、シェルパが調理している間に、ウイルソンはさらに前進ノース・コルへのルートを偵察した。

その夜のウイルソンの日記には次のようにかかれています。

(頂上とルートははつきり分かった。あと2,100m登るだけである) !!

5月16日雪嵐で動けず。5月21日烈風収まり、ウイルソンはさらにアイスフォールに向かって前進する。

6,920m付近の高度で垂直の壁につきあたり、ここでの絶望的な闘いのたび滑り落ちたウイルソンは生きている人間というより死んだ状態で下で待つシェルパの腕の中に倒れこんだ。

— “それでもまだウイルソンはやめようとしない” —

8日間の休養後ウイルソンはさらに前進を主張するがシェルパ達はそんな計画はまったく狂っていると同行せず、5月29日再び彼は単身出発、31日テントの中で死亡する。

残された5月28日の日記には（これが最後の努力となるだろう。今度はうまくいきそうな気がする）とかかれていました。

それから1年後、エリック・シptonがノース・コルに登っていく途中で風雨にさらされたウイルソンの遺体を見つけた。不屈のドン・キホーテの信仰もエヴェレストには勝てなかったのです。

II. ヤン・デンマンと 登山者テンジン・ノルゲイ

テンジンは生涯に7度エヴェレストに挑んでいるが、4度目のエヴェレストにはシェルパとしてではなく登山者として参加した。

1947年3月、カナダ生れイギリス育ちのヤン・デンマンはたった1人でダージリンにやつ

てきた。ほとんど登山経験もなく、資金もないデンマンはもっとも質素な手段で世界一の高峰登頂を狙うとダージリンで公言する。

持参した装備は軍用テント2張、寝袋、手製のアイゼン、手袋、雪眼鏡、ザイル、乾燥肉、それと現金250ポンドだけでした。

当時のチベットは禁断の国、抜け道を通って不法入国するしかないが、外国人のデンマンはもちろんそんなルートを知らない。ロンブクからの登頂ルートも本で読んだだけで、シェルパ、ガイドを必要としたが、資金不足の彼には無理な話で、ダージリンをうろついて遠征仲間を募った。

このときなにを思ったかテンジンが手下のアン・ダワを連れてこの遠征に乗ったのです。

隊長デンマン、登攀隊長テンジン、隊員ダワの3人は1947年3月21日、ダージリン（バス）-シッキム（ロバ）-シッキムの最後の部落でデンマンは持ち金を勘定したら思ったより減っていてロンブクに着くことさえ怪しくなった。

彼はテンジンにありのまま述べて「行くか、引き返すか」とたずねた。テンジンは「行きましょう」と答えた。

3人は更に前進、コングラ・ラー（徒步）-チベット-ロンブクに達し、ノース・コルを目指すも装備貧弱で寒さに耐えかね疲労困憊して6,800mで撤退、さながら乞食巡礼の姿で5週間後にダージリンに戻ったのです。

“金にもならぬ”登山にテンジンがのつたのは、シェルパとしてではなく“登山者”としてエヴェレストに挑んでみたかったのでしょう。

又、ドン・キホーテ的隊長デンマンの魅力に惹かれヒョットして！登頂できるかも知れぬと

夢想したのでしょうか。

(経験豊富な彼はデンマンに会ったときからそんな夢はみていなかつたでしょうが)

主従の立場でなく平等の立場で参加すれば、出生がチベットのツア・チエといわれている(ネパールは認めていません。テンジンも出生については口をつぐんだままです) テンジンは念願のチベットの道中で自由に巡礼を果たせると思ったのでしょうか。

テンジンがデンマンにエヴェレスト行きを誘われたときの回想記には次のように書かれています。

「まるで常識はずれの計画だった。第一におそらく自分達はチベットへの入国さえ果せないだろう。第二にもし入国できたとしても捕らえられるだろう。そうなれば自分は案内人として深刻な事態に巻きこまれるだろう。

第三にもしロンブクまでいけたとしてもこの隊があの山には登れるはずが無い、第四にこの登山は危険だ、第五にデンマンには金が無い」…他いろいろ…でもテンジンはノーと言えなかつたのです。

エヴェレストの吸引力は地上の何よりも強い、テンジンの登山者としての血が騒いだのか。

アン・ダワと私は数分間話し合って、それで結論を出した。デンマンに伝えた。

～(やってみましょう)～

この遠征がお気にいりだったテンジンが6年後の登頂のとき被っていた帽子はデンマンからの形見でした。デンマンの一部も最高点に達したのです。

デンマンは1948年、再びダージリンに来て、テンジンに会いエヴェレスト行きを提案したがテンジンは断っています。彼等

は前年の件でチベットではお尋ね者になっていたのです。デンマンは英国の1953年遠征隊に参加希望したが相手にされませんでした。

(「Alone To Everest」デンマン)

III. 3人目現れる

R・B・ラルセン (デンマーク)

1951年ウイルソン、デンマンに次ぐ3人目が現れる。1951年3月30日ダージリン発、7人のシェルパを連れ、4月22日にナムチェ・バザール着、5,800mの峠(ナンパ・ラ)(注)を越えて4月28日、ロンブク着。僧院で休養後5月7日、ノース・コルを目指す。

ここでシェルパ達が逃亡し、ラルセンの夢は消える。復路も往路と同じ道をたどり、ダージリンで、ラルセンがクレネク教授に話した内容からの報道とあるが詳細不明。

(注)チベットとネパールを結ぶ世界で一番高い交易路で白人ではラルセンが始めて(「ヒマラヤ山と人」深田久弥・中央公論)

ウイルソン、デンマン、ラルセンの3人ともろくに登山も知らず、最初から望みないと知っていたらこんな行動はおこさなかつたでしょう。それでも彼らは技術や知識に煩わされることなく自らの決意にしたがって、これだけの成果を成し遂げました。

IV. 英国隊のエヴェレスト高度到達の歴史

1921年	6,885m	ハワード・バリー隊の 7人
1922年	8,320m	フィンチ
1924年	8,570m	ノートン
1924年	登頂?	マロリー。アーヴィン 1999年遺体発見
1933年	8,570m	スマイス

1935年	8,400m	シプトン隊の7人
1938年	8,400m	シプトン。スマイス
1953年	8,848m	エドモンド・ヒラリー テンジン・ノルゲイ
大英帝国の面子をかけた登頂でしたが、ヒラリーはニュージーランド人、テンジンはネパール人で、英國隊とは微妙です。しかしジョン・ハント隊長は冰雪技術でヒラリー、高所持久力でテンジンを選択せざるを得なかったのです。		
登頂前年(1952年)スイス隊は8,600mで(R・ランベールとテンジン・ノルゲイ)敗退しましたが、英國は冷や汗かいたでしょう。		

V. マロリー (英・1886~1924)

エヴェレストで75年前の遺体発見

1999年5月受信した一通の電子メールは衝撃的でした。1999年5月1日エヴェレスト北面8,160mの地点で75年前とおもえぬ保存状態でマロリーの遺体が発見されたというのです。世間の関心は1924年の登頂の謎の証拠発見(フィルム、日記等)に期待高まりましたが、何も見つかりませんでした。

1999年マロリー／アーヴィン調査遠征隊は少なくともその一部に「2人は登頂したか」という疑問に答える目的をもって出発した。遠征隊は70年以上も前の登頂の試みに関する情報を収集し、現地で実際に70年以上前の推定ルートを丹念にトレースしマロリーの遺体を発見した。1999年5月1日発見された遺体は着衣等からマロリーと確認。

登頂の謎など75年間の長きにわたり8,000m以上の高所で凍結遺体で眠っていた彼に聞くすべもない。

登頂したのかとの質問に対する回答としては、

もう一つの質問を重ねるしかない。「それが貴いことか?」—何より貴いことは—二人が与えられた諸条件の中であれだけのことを為し遂げたことであり、この先に何があるか目で確かめたいという抑えきれない情熱と登頂達成衝動に駆られて、前へ前へと進んだ結果、常人が敗北を認めて一本能的自衛のために—引きかえす限界点を越えたのです。

遺体発見者、デイブ・ハーンは——

自分達が見ている男は75年間もこの山にかかりついていたのだ。衣服を吹き飛ばされて、体はほぼ剥き出しになり、その肌は色が抜けて真っ白だった。まるでギリシャかローマの大大理石の彫像を見ている気がした。クライマー達は無言のまま古代彫刻の周囲に、あるいは立ち、あるいはひざまずいた。

VI. Because it is there

—そこに山があるから—という大誤訳—

「ソレがあるから」といった彼の言葉は「山があるから」という大誤訳で知られている。「ソレ」は処女峰チョモランマを指すのであって、一般的普通名詞の「山」を言うのではない。

当時優秀な登山家であったマロリーはエヴェレスト委員会の指名で繰り返しエヴェレスト遠征に参加させられた。問題の「ソレがあるから」は遠征の都度理解させるのに手間のかかる質問にうんざりして答えたマロリーの言葉である。

(本多勝一)

Because it is there—とマロリーが短く言い切ったのは何十回も質問された挙句、記者に亦も同じ質問された時に発したのです。度重なる愚間に切れてマロリーが、吐き捨てた与太が、Because it is thereだったのか。

更に「では何故それほどまでにエヴェレストに行きたいのか」と聞かれていたら、マロリーはなんと答えたでしょうか。正直マロリーにも確かな答えなく、逃げ口上で Because it is there と答えた、のかもしれません。

家庭生活と立身とエヴェレスト熱に身を裂かれていた彼も盛りを過ぎた38歳、家族か山かの選択の苦渋の決断に、Because it is there で踏ん切りをつけたのでしょう。

(余談ですが、マロリー発見を題材とした夢枕 猛の「神々の山嶺」は山岳フィクションの傑作です)

VII. 人類の最高到達高度とエヴェレスト ～その意訳と笑論～

・くらべるのがおかしいのを承知の上で以下・

英国のエヴェレスト登頂8年後の1962年大空に放たれたソ連の宇宙飛行士ガガーリンはカプセルの中で高度 30,000mに達し、“地球は青かった”的感想で一躍世界の有名人になりました。科学の世界でのパイオニア・ワークといえますが、人間、ガガーリンにはパイオニア精神などなく、宇宙服の中で身をすくめていたでしょう。

標高差 30,000m の飛行往復でしたが、打ち上げから 1 時間 49 分で地上に降り立ったのです。

では大戦終結後各国が目指していたエヴェレストにソ連は無関心だったのか。

1952 年秋に計画された(?) ソ連の北側からのエヴェレスト遠征隊はベース・キャンプから登頂ルートの偵察を試みています。又、別の記録(?) では 8,230m 付近から頂上攻撃にでた隊員が行方不明になってしまったともいわれています。

しかしこの遠征の公式報告はなく、旧ソ連山

岳連盟は 1952 年の遠征を公式に否定している。遠征があったのか、無かったのか、あったのになんらかの理由でもみ消されたのか、興味深い謎です。注 1. 2.

注 1. (1952 年秋、ソビエトの登山隊が北面からエヴェレストに向かった。36 人のそれぞれの専門家を含む一行は、5 台の飛行機でラサに到着し、そこから山麓に達した。6 人の頂上アタック隊は、8,230 メートルまで大した困難もなく登ったが、それ以後消息を絶った、と伝えられている。しかしこれについてソビエトは何も発表していないので、確実なことはわからない。(「ヒマラヤの高峰」第一巻・深田久弥)

注 2. チベット側からのチョモランマへの遠征隊は、1921 年～1980 年までの間に 15 隊の記録あるが、旧ソ連の 1952 年の記録はなく、1958 年春、中国、旧ソ連合同隊【許 競。ペレスキー】の記録のみあり。([中国の高峰]・中国体育出版社)

エヴェレストのベース・キャンプから頂上への標高差は歩いて約 2,500m、この登頂可能性をめぐって、1892 年「エヴェレストは登頂可能か」という表題で「19 世紀」という英國の雑誌に掲載された論文で、著者クリントン・デントは可能と述べ以後多くの英國人がチベットに入りエヴェレストに接近を試みています。

エヴェレストが注目されてから 60 年を経て人類はネパール名称サガルマータ(エヴェレスト)に達した。

サガルマータの意味は“大空の頭”“宇宙の頂点”だそうで、意訳・笑論承知で強引に言うなら、ヒラリー、テンジンは人類最初の“宇宙の頂点”的着地者!、ガガーリンは高度 30,000 m での浮遊者! です。

信仰の念をこめてエヴェレストを見上げていた現地の人々が、ヒラリーとテンジンの登頂をどう感じたのかわかりませんが、この山に登頂

を試みた英國以外の国の登山家は、「第三の極地陥つ」の報に受けた羨望と畏敬をソ連の宇宙飛行には感じなかつたでしょう。

機械や技術によって得られる感動は、人間が全力を尽くして得た感動には及ばないです。

VII. 有償の山ゆえの悲劇

1996年エヴェレスト公募隊

英國隊のエヴェレスト登頂以後世界には大きな紛争もなくエヴェレストには多くの人が登頂しましたがそのうちには実力の伴わない登山者も多くいた。

J・クラカワの著作「^{くう}空へ」…(原題「Into Thin Air」)で逐一紹介された1996年のエヴェレストの悲劇は、日本では難波康子さんの遭難で有名になりました。

'96年アメリカのアウトドア誌「アウトサイド」からレポータとして派遣されたJ・クラカワはロブ・ホールのひきいる遠征隊の8人の顧客の1人として加わり5月10日頂上に達したが、頂上に達したチームメイト5人のうち4名が死亡した。

出発から登頂、下山迄のこのレポートは営業登山の最新の実態に迫っています。

ちなみに'96年南北両面から取り付いた遠征隊は30隊、そのうち10隊は営利事業として組織していました。そしてサウス・コルから登頂した20人の登山者のうち12名が死亡した。

この年ネパールの登山料は1隊\$70,000(7名)、追加1名で\$10,000、季節制限、入山隊数制限なし、参考までに中国側からのチョモランマは1隊\$15,000の国際競争価格でした。

ロブ・ホール隊の筆頭ガイドA・ブクレーエフ(カザフスタン出身旧ソ連の登山家)のギャラ

は\$25,000、彼は遭難現場で超人的活躍をしましたが下山後顧客を置き去りにしたと非難されました。(注)

彼はエヴェレストから下山後ベースで2日休養した後5月17日ロブ・ホール追悼と称してソロでローツエ(8,511m)を登頂、更に9月にはチベットに入り、チョー・オユ(8,153m)、シシヤ・パンマ(8,013m)を連続登頂と信じられぬ超人的体力を立証しています。

11月中旬故郷のカザフスタンで交通事故で頭部に重症を負い、片目失明に近い重傷を負いましたが復帰して、'97年12月登山者としてアンナプルナ南壁に挑み氷雪崩に直撃されて死亡、39歳でした。

(注) A・ブクレーエフの著作「デス・ゾーン」にはクラカワのレポートに対する反論が書かれています。クラカワのレポートは悲劇的一面しか見ておらず、彼が二度までも不明の仲間を探しにでて3名の仲間を助けたのは事実であり、「いかに顧客といえども8,000mは道徳うんぬんといえる場所ではない」…との彼の言は正しい。

IX. 最初の難所は有料ルート

エヴェレストの頂上につづくクンブ冰河のアイスフォール帶は最も危険な場所であり、この状態を見たら初心者はまず自分の力に及ばぬことを知って登頂など大それた夢とあきらめる。にもかかわらず'90年以降多数の登頂者がでたのは営利事業登山隊の知恵か?

シーズン前の冬季に、アイスフォール帶のルート工作とルート維持はどこかの一隊が責任を持ち、その見返りとして他の登山隊から通行料\$2,200を受け取る。

'96年はマル・ダフ隊が請負い、彼の雇ったシ

エルバがセラックをさけジグザグに道を切り拓き 2,000mほどのロープを張りめぐらし、クレヴァスの部分には 60 本以上のアルミ梯子を渡していた。このアルミ梯子は山麓のシェルバの貸し出で彼等もまた、お得意様「営業公募隊」の恩恵を受けていた。

この固定ロープを使っての登山では、登山者（客）同士がロープで繋がれることは無く、各登山者（客）が、固定ロープと確保器具を使用して、一人、ひとりで登る。古典手法（？）のコンテニュアス、ビレーなどは無く、ツレが滑落しても一連托生などは起きません。これは頂上まで同じです。

この春エヴェレストには、

- 国際公募隊アドベンチャー・コンサルタンツ登山隊 《隊長ロブ・ホール・N・Z》
- マウンテン・マッドネス登山隊
《隊長スコット・フィッシャー・米》
- マル・ダフ国際営業遠征隊
《隊長マル・ダフ・英》
- 他 7 隊の営利事業隊があつたのです。

難波康子さんが参加したのは N・Z のロブ・ホール隊長の国際公募隊アドベンチャー・コンサルタンツ登山隊でした。

1990 年—1995 年の間に、ロブ・ホールが引率してエヴェレストの頂上に立った人数は 39 人と彼の隊は顧客の夢をかなえる実績を誇っていました。

ガイドとシェルバが初心者同然の登山者をアルミ製の梯子、固定ロープ、ユマールと手とり足とり登らせる、電子機器完備、隊員、シェルバ合わせて 300 名の大人数で推し進める一大事業で、もちろん酸素もたっぷり準備して費用一

切込み \$65,000 でした。

(ネパールまでの交通費と個人装備は除く)

N・Z で余生を過ごすヒラリーはまさに時代の流れを感じたでしょう。

‘93 年 N・Z の人間国宝的存在のヒラリーは公の席で、「エヴェレストの営利事業化促進に、ロブ・ホールが大きな役割を果たしている。料金を払い護送してもらって頂上へ行くような初心者グループは山に対する蔑視を生み出す」と酷評しています。

ロブ・ホールは登頂後サウス・コルまで下降中疲労困憊で死亡しました。死ぬ前、自宅にいる彼の妻に衛星通信で最後の会話をしたときの彼はほとんど死に体でしたが、妻は暖房のきいた居間で紅茶を飲んでいました。

マウンテン・マッドネス隊の隊長スコット・フィッシャー（プロ登山家・エヴェレスト無酸素登頂 2 回）も救援活動で疲労困憊して凍死しました。

この 2 人の隊長は顧客へのサービス過剰で死んだのです。\$65,000 も払った顧客に頂上寸前で引き返しを言えなかったのです。

第 4 キャンプ (7,900m) 出発のとき、2 人の隊長は顧客に頂上到着時間は午後 2 時まで、それまでに登頂できぬときは、どこにいようと引き返しを厳命していたが、遅れた顧客を待って、ロブ・ホールは午後 3 時過ぎ、フィッシャーは午後 4 時過ぎの下山となり、酸素不足と午後 5 時過ぎからの降雪とブリザード、風速 80 km の嵐、暗闇で第 4 キャンプを見失いマイナス 50 度の雪原で疲労凍死はまだしも顧客までも死亡した。

この悲劇の一因にヒラリーステップでの渋滞

で時間が狂い酸素切れがおきたといわれています。

J・クラカワはそのレポートで下山中にヒラリーステップをつぎつぎと登ってくるロープ伝いの蟻の行列のような登山者を待つ時間（約1時間）は耐えがたい時間だったと書いています。

登頂、即下降して高所衰退から逃れるのが鉄則の高所で渋滞で身動き取れぬとは、43年前、ヒラリーとテンシンたった2人だけで通ったルートが大金支払った登山者（顧客）で混雑するとは、ヒラリーの酷評は正論だったのです。

もしメスナーの唱えたバイ・フェアー・ミンズを実行していたら公募隊応募ゼロで犠牲者はなかったのです。

それが無理ならせめて J・クラカワが提唱した医療用を除いて酸素の使用を禁止すればいいのですが、中高年の高峰登山は有酸素で（就寝中も）実際には難しいでしょう。

（8,000mの営業登山費用は‘05年で¥600万以上）

ネパール当局は営業登山を歓迎しています。大掛かりな事業だけにシェルパ、ポーターの雇用促進、登山料収入他地元に落ちる外貨の魅力には勝てません。

クンブ氷河アイスフォール帶の有料ルート工事は地元のシェルパ組合が請け負うケースが増えています。

付記。難波康子は七大陸全山登頂者です。1996年5月11日付け夕刊には「47歳OLエヴェレスト登頂」とありこれは事実です。しかし翌日の朝刊には一転「難波さん行方不明」と報じられたのです。

（‘96年5月10日13時25分。ロブ・ホール、難波康子、マイク・グルーム登頂）

X. 幸運の人・ヒラリー

不運の人・シャクルトン(1874~1922)

エヴェレストが生んだ幸運の人ヒラリーはその実績をかわれ1956年N・Zの南極探検隊隊長に選ばれて、雪上車を駆り南極点に達しています。又、空路ではあるが北極点にもと、三つの極地にいった幸運の人です。

シャクルトンがなしえなかつた南極大陸横断から50年後、エドモンド・ヒラリーは南極横断に成功し彼は二つの栄誉を手にしました。

山にまつわる話の最後に山ならぬシャクルトンの話がでたのは、戦前、戦後を通じて最高の遠征は何かときかれれば（リーダ・シップ）でためらいなく、シャクルトンの南極遠征をあげたい。

多くのヒマラヤでの遠征隊の記録を読みましたが、登頂の成否でなく隊長の統率力については綺麗事で書かれていることが多く、もはや大遠征など過去の遺物となったとき、本でしか知り得ぬ貴重な事実だからです。

エヴェレストも南極もその根底にあったのは、人間だけが持つ冒険心と未知への期待であり、これは垂直（頂点）も水平（極点）も同じです。

シャクルトン隊は大英帝国南極大陸横断探検の約2年間の漂流の末全員奇跡の生還をしたのです。

— (1914.12出発~1916.9.3全員生還) —

エンデュアランス号の隊員はその後多くが第一次世界大戦の戦場へ、戦死した人もあります。

1922年シャクルトンは再び南極探検に出発したが、またも南極にはたどり着けませんでした。

探検船クエスト号が寄港していたサウスジョージア島で心臓発作のため死亡したのです。

2年の漂流の末帰還し、その力量を買われて

資金提供者が現れたのに、準備万端で出航したのに。— 不運でした。

シプトンに、認められてエヴェレストに誘われ、N・Z から参加したヒラリー、遠征直前の隊長交代（シプトンからハント）でも、シプトンお墨つきのヒラリーのクライマーの地位は不動でした。— 幸運でした。

エヴェレストの頂上から通信可能な現在と比べて粗末な装備で2年近く生き抜いた「不屈の精神」、エンデュアランス（忍耐 我慢 不屈持久）は、登山者にも同じです。

—ある探検家は語っています—

「科学的な発見という点ではスコットに、旅のすばやさと効率のよさについてはアムゼンに、しかし、危険がおそいかかり希望を失ったその瞬間には、シャクルトン、わたしはあなたの前にひざまずき、祈りをささげます」

「Ice Story Shakleton's lost Expedition」
E・C・キメル著

あとがき

ブルジョワの山から國家の山、勤労者の山、そして青蔵高原鉄道の開通他ネパール、パキスタンでの山を目玉とした観光産業の発達で、近づくことさえ難しかったアルプス、ヒマラヤ、南米の山々が眺めるだけなら、広く大衆の山となりました。

これら外国の山は戦後（1980年頃まで）は特定の山愛好者だけの世界だったのです。

戦時体制に抵抗した甲南の先輩、不本意ながら体制に参加した登山家、\$=¥360と費用調達が難しかった時代の山好きが現在の大衆の山への参加を知ったとき、窮屈だった山が自由となった現在の変貌、日々の記録をその日のうち

に電子媒体に流す現地とのやり取り、公募営業登山など到底想像できなかつたでしょう。

しかし未踏の山岳が多くあった時代の幸福な登山家は未知探検と初登頂で、現在の登山者が最先端の装備、技術、情報を駆使して得られる以上の感動を得られたと思います。

大戦終結後、貧困と飢餓から解放された人々は「初」と名がつく登山、登攀を目指し、いまや「初」の対象など地球上になく、それぞれの登山者が自分なりの志向のうちに山に行き、ある人はそこにパイオニア・ワーク（自分なり）を求め、一握りのヒトは極限の登攀達成に充実感を求め、百名山に日常からの解放感を求めるなど、信仰とスポーツ（この言葉が適當か否かよくわかりませんが）から始まった山が広く自由な大衆の山になったのです。

死語となったアルピニズム、パイオニア・ワークが、生命を賭して挑むひとにぎりの極限行者だけで成り立ってきた現在、今風登山に苦言を呈するアルピニズムという概念があった半世紀前の生き証人が消えたとき、次代の登山史には昔はアルピニズムとパイオニア・ワークと言う言葉が、登山によく使われていましたと書かれているでしょう。

ヒマラヤに未踏峰がなくなったあとも、時期、ルート、日数、装備、人数などさまざまな条件をもちだして人間は競争し続ける。（山川草木を愛で花鳥風月にもののあわれを感じる登山者は確かに多いが、頂点に感傷の一切を排し、全能力、全財産、そして生命を賭けたひとにぎりの競争者がいてはじめて登山界は成り立っている）（江本嘉伸）。

死に体のアルピニズムに延命措置をした、ひ

とにぎりの競争者、山田昇・森田勝・加藤保男・長谷川恒夫・小西正継、他の山に消えた登山家達も忘れられ、多くの登山者がヒマラヤの高峰を見上げ、先人の登山に思いを巡らせたとして

も、～人はいき、山はのこる～ という感傷のうちに、山が語つてくる、アルピニズムが、ハイオニア・ワークが、聞こえるでしょうか。

引 用・参 考 文 献

(本文中にあげたものは除く)

- [ヒマラヤ-山と人-]
「チョモランマ単独行」
「そして謎は残った」
「エリック・シpton」
「アルプスの三つの壁」
「永遠の未踏峰」
「山書散策」
「高い山 はるかな海」探検家ティルマンの生涯
「ヒマラヤその探検登山の歴史」
「ヒマラヤ巨峰初登頂記 8000m 14座」
「キャンプ・シックス」
「エヴェレスト登頂」
「ナンガ・パルバット」
「狼は還らず」
「ヒマラヤを駆け抜けた男」山田 昇・青春譜
「青春譜」
「長谷川 恒夫・虚空の登攀者」
「山は晴天」
「精銳たちの挽歌」
- 深田 久弥 中央公論社
R・メスナー 山と渓谷社
ヨッヘン・ヘムレブ他 文芸春秋
ピーター・スティール 山と渓谷社
A・ヘックマイヤー 朋文堂
渡部由輝 山と渓谷社
河村 正之 東京新聞出版局
J・R アンダーソン 山と渓谷社
ケニス・メイスン 白水社
マリオ・ファンティン編 牧野訳
F・S スマイス 朋文堂
ジョン・ハント 朝日新聞社
K・M ヘルリヒコツツファー 朋文堂
佐瀬 稔 山と渓谷社
佐瀬 稔 中央文庫
佐瀬 稔 中央文庫
佐瀬 稔 中央文庫
小西 政継 中央文庫
長尾 三郎 山と渓谷社

他に雑誌 「岩と雪」 「山と渓谷」 「岳人」 JAC会報 「山」 等も参考とする。

のじぎく兵庫国体 山岳競技

2006年10月に開催された のじぎく兵庫国体 の山岳競技に、
福田信三会員、山本恵昭会員が大会役員として参加されました。

準備から運営まで長期にわたりお疲れ様でした。

—図書紹介—

エヴェレスト・1935年

越田和男（昭36理）

70年も昔のエリック・シpton(1907~1977)率いる英國隊第5次エヴェレスト遠征記が一昨年英國で編纂出版された（著者トニー・アスティル 私家版）。日本山岳会の図書室に贈られてきたので、今頃何だ、と思いながら360頁にも及ぶ大冊を紐解いたのだが、当時の写真、隊員（全て故人）の手記たっぷりの興味ある内容に魅せられ、日本山岳会会報「山」への図書紹介記事を引き受けた次第（「山」2006年6月号掲載）。今回ついでにといつては失礼だが、甲南の岳友諸氏にも紹介しておきたく、本誌用に若干解説的に書き直してみた。

* * * * *

未踏の世界最高峰への挑戦は、英國がその威信をかけ、王立地理学協会（The Royal Geographic Society）と山岳会（The Alpine Club）の総力を挙げて臨んだ一大事業であった。第1次隊（1921年）、第2次隊（1922年）、そして有名なマロリーとアーヴィンの悲劇で終った第3次隊（1924年）のあと、政治情勢が許さず9年間の空白期間をおくことになる。

チベット政府が英國の圧力にしぶしぶ妥協して入国許可を出し、久々に実現したヒュー・ラトレッジ率いる第4次隊（1933年）も登頂には至らなかった。この大遠征隊にスマイス（1900~1949、名著『Camp Six』の著者）らとともに参加し実力を発揮した新進気鋭のシptonだったが、隊の運営などに大いに不満だった。そもそも大遠征隊というのが彼の性に合わなかつた。

次の入山許可は何時になるやらも知れず、流石の英國も手をこまねいていた1935年の春、4月にもなって突然チベット政府からの登山許可が届き、急遽偵察を目的に編成されたのがシプ

トン率いる第5次隊だった。第4次と第6次（1936年）の二つの大遠征隊の間に派遣されたこの小遠征隊については、これまでまとまったく報告書がなく、本書副題にも「忘れられた冒険行」（The Forgotten Adventure）とある。この隊の記録はシptonの報告会での講演録の形で『Alpine Journal』や『Geographical Journal』などに掲載されたり、シpton自身のいくつかの著書のなかで概略が見られるものの、遠征隊の全行動が詳述されたことはなかった。

この隊は、登山家6名と測量技師1名からなるまさにシpton好みの少数精銳、機動力に富んだ小遠征隊で、5月末ダージリンを発ち、遠路シッキム経由でチベットに入り、9月末までの4ヶ月間、エヴェレスト東面、北面、西面を少人数パーティに分散して駆け巡り、偵察・測量するとともに、近辺の20,000ft（6,090m）超の峰々を26座（内24座初登頂）も登頂している。

また、ネパールとの国境稜線リントレンとブモリの間のコルに至った彼らは、後々の初登頂のルートとなるウェスター・クウム氷河を見し、その登攀が不可能とは思えない、いずれ機会があれば入ってみたい、と感想を述べている。シptonは16年後の1951年にこの氷河に人類初めての足跡を残し、翌々年の初登頂への貴重な足がかりをつけることになる。

隊員構成：

Eric Shipton (28) 隊長

Harold W. (Bill) Tilman (37)

前年 Shipton とナンダ・デヴィ内院へ
入った

L. Y. (Dan) Bryant (30)

ニュージーランド人クライマー

Edwin Kempson (33)
ケンブリッジ大学山岳会
Dr. Charles Warren (29)
同上 (隊医)
E. H. L. Wigram (24)
同上(医学部生)
Michael Spender (28)
測量技師

この年は偶々モンスーンの到来が異常に遅かった。例年ならモンスーンの最中の登山ということになるのだが、モンスーン中の7千メートル超の高地の積雪の状況、登山の可能性を探ることもこの隊に課せられた目的の一つだった。任務は偵察が主だったが、あわよくば登頂を狙うという野心も当然あった。しかし、シプトンはBCへのアプローチであちこち未知の山域への寄り道を楽しんだ。皮肉にも6月中は好天に恵まれ、寄り道なしでBCへ向かっていたなら、このメンバーならひょっとして頂上アタックが可能だったかも知れない。

それでも7月に入ってから、北面のロンブックのBCを出発後わずか6日間でノース・コルにキャンプ設営、登頂に必要と思われる十分な物資の荷揚げを完了している。さらに上部をうかがったところで結局本格的なモンスーンの到来となり、撤退を余儀なくされた。ノース・コルからの撤退路では、おそらく大きな雪崩の発生跡に遭遇したが、逃げ足早く、好判断で危険を回避して無傷で撤退するなど、小規模隊の機動性を実証している。

この間、前年に消息を絶った狂信的な単独行者モーリス・ウィルソンの遺体と日記を発見するなどのハプニングがあった。凶兆だといって、それ以上の荷揚げを拒否したシェルパ達にシプトンは、イヤなら帰れ、俺達は自分で担ぐ、といって従わせた。こんな場面は他でもあったが、隊員達の体力にはシェルパも一目置かざるを得なかつたようである。なにしろタフとケチではシプトンの上をいくティルマンも睨みを利かせ

ていた。ティルマンは後々シェルパ仲間の間でもっとも嫌がられ恐れられたバラ・サーブとして勇名を馳せた。

エヴェレスト撤退後のモンスーンの最中、シプトンたちは全員がエヴェレストの東側の美しい山域の探検と登山をエネルギーに存分に楽しんだ。Khartaphu(7230m), Kellas Rock Peak(7070m), Kharta Changri(7032m)など7千メートル級の秀峰も含め、まさに登りまくった感有りである。

とんでもないエピソードもある。食料はもっぱら現地調達だったのは良かったが、ある村で手に入った140個の卵を4人の隊員が一日で食ってしまったというのである。小遠征隊の利点のひとつに沿道の部落にかける迷惑を減らすというのもシプトンの言い分だったはずだが。

ニュージーランド人として始めて英國隊に参加し、その優れた氷雪技術を発揮したダン・ブライアントの活躍は、16年後の1951年に始めてネパール側に入ったシプトン隊へのNZ人エドマンド・ヒラリーの参加につながり、1953年にヒラリーが世界最高峰の初登者となるきっかけとなった。さらに、ヒラリーとともに初登頂者となったシェルパのテンジン・ノルゲイがこの隊にまったくの新人として（当時19歳）参加している。それも、当初決まっていたポーターの内2名をシプトンが気に入らず、出発間際にその穴埋めにテンジンが採用された。白い歯を見せてにっこり笑うその笑顔で彼を選んだとシプトンは述懐している。有名なヒラリー/テンジンのコンビの発端やここにありである。

* * * * *

さて、シプトンのその後のエヴェレストとの関わりだが、せっかく彼の提唱する機動力をもった小規模遠征隊の利点が実証されたかに見えたのに、翌年の第6次隊はまたしてもラトレッジの率いる大遠征隊となった。不本意ながら参

加したシプトンは第1次登頂隊の有力候補にはなっていたものの、悪天候に阻まれた上、雪崩に巻き込まれて遭難寸前の目に遭うなどした。1938年、北面からの最後の挑戦となつた第7次隊にも参加した。今度はティルマンが隊長で時節柄もあって極端に切り詰めた予算の下、医者もなしの7名の少數精銳隊でのぞんだが、またもや悪天候に阻まれ敗退した。

そして第二次大戦後、チベットの鎖国とネパールの開国で、初めてエヴェレストの南西面からのチャンスを掴んだ英国は、1951年、14年振り5度目のエヴェレスト行となるシプトンを隊長とする小規模偵察隊（NZ人ヒラリーも参加）を派遣し、この方面からの登頂の可能性を掴んだ。52年はスイス隊が挑戦しているのを横目に翌年に備えたチョー・オユーでの訓練に励んだ。翌1953年、ヒラリーとテンジンによる初登頂となつた第9次エヴェレスト遠征隊に、おおかたの人々が隊長と予想したシプトンは直前にはずされ、陸軍大佐ジョン・ハントが抜擢された。今、登山や探検に興味のある人達に抜群の人気があるのは、ロマンチストで、運の悪い、女好きでも勇名を馳せたエリック・シプトンである。

* * * * *

隊医であったチャールス・ウォーレン（1999年没）が60年後の1995年に、当時の日記の一部を『Alpine Journal』に公開したのをきっかけに、著者アスタイルが今や故人となった参加隊員全員の手記を遺族などから次々と入手し本著にまとめた。面白いことに、ティルマン関係の資料は、米国はロッキー山脈の麓にあるワイオミング大学に保存されていた。

個性あふれるインテリ猛者達のダージリン出発から帰還までの数ヶ月の生き生きとした日々が、日記の原文と120葉にもおよぶ当時の写真の掲載によりみごとに描写されている。隊員個々の紹介文はノーマン・ハーディ、マイケル・ウォード、ピーター・スティールなど錚々たる

メンバーによる。J.ハントとE.ヒラリーの序文もある。

英國在住の山岳書愛好家で古書のディーラーでもある著者は、シプトンが何故書かなかつたのかの疑問が今も解けないと述べている。私家版ながら、或いは私家版ならこそその貴重な出版であり、英國の古典的な探検・登山文化の残影を伝える好著である。

Tony Astill・著

Mount Everest : The Reconnaissance 1935
—The Forgotten Adventure

2005年 私家版

25.5 x 17.5cm pp359

£30（またはEuro 48）

参考：

E. E. Shipton

“The Mount Everest Reconnaissance, 1935”

Alpine Journal, 1936 & “The Mount Everest Reconnaissance”, Geographical Journal, 1936

Charles Warren

“Everest 1935: The Forgotten Adventure”, Alpine Journal, 1995.

シプトン自叙伝「未踏の山河」

大賀二郎、倉知敬訳 昭和47年 茗渓堂
ピーター・スティール

「エリック・シプトン—山岳探検家波瀾の生涯」倉地敬訳 2000年 山と渓谷社

— 追 悼 —

茂木光隆先輩のこと

越田和男（昭36理）

茂木さんに初めてお会いしたのは、昭和48年の春、甲南山岳会東京支部の第1回懇親会を銀座の中華料理屋でやった時、30名程の出席者のほとんどが旧制の錚々たる先輩方だったが、茂木さんはわざわざ我々新制の若手の卓を選んで着席された。長かったデュッセルドルフの駐在から帰られて間もない頃だった。ご多忙だった在欧中に、寸暇を利用してツェルマットに行かれた時の事を会報にお書き頂いたのを私が覚えており、茂木さんも会報の編集をやっていた小生の名前を覚えていて下さり、直ぐに打ち解けて山の話になったのだった。

茂木さんは昭和18年旧制甲南高校卒。阪大工学部応用化学科を経て三菱化成に入られた。山岳部のOBではなかったが、勤め先の山岳部で活躍されていた。同じ会社に大先輩の松野茂雄さん（昭和9年理）や同期の国府三郎さんが居られ、松野さんの推薦で甲南山岳会に入会されたと聞く。甲南山岳会の集まりにはよく出て来られ、会報への近況報告もほとんど欠かされたことがなかったのではないかと思う。

とにかくお元気な方で、関東の山、特に丹沢には精通されていた。昭和50年の秋、甲南の集まりで初めて丹沢へ出かけた時は、事前打ち合わせに飯田と一緒に夜遅くに田園調布のお宅に押しかけた。この時選んで頂いたのは、表丹沢の新茅ノ沢という初級沢登りコースで、茂木さんご自身は、小生の十幾つも年上の方とは思えぬ身のこなしの良さを發揮されたのだが、万が一に備えて三菱化成山岳部の屈強な若手を誘つてこられたので我々は安心して初めての丹沢の

沢登りを楽しみ、茂木さんの気配りに大いに感謝した。

丹沢へはその後も何回かご一緒させていただいたし、ずっと後になって、芦屋のロックガーデンでの慰靈祭にも国府三郎さんとともに東京から参加されたこともあった。この時（10年位前）は案内の村上與利一君が道を間違えて大変な回り道をしたのだが、茂木さんはまだまだお元気だった。

その茂木さんが5年前の『山嶽寮』に「最後の冬山」と題した一文を寄せられた。70台後半に差し掛かった茂木さんは会社の山仲間の誘いで、冬の北ハッに入って雪中幕営を楽しまれたようだったが、この時体調の不調を覚えて、下山後ホームドクターに相談された。何とその医師は前回の健診で既に異常を認めながら、自身が躁鬱症の鬱の状態だったらしく、患者に知らせなかつたとのこと。その後の病状でとても冬山への復帰は無理と自覚された結果のご執筆で、「もし3ヶ月早く病気であることが判つていれば、冬山に誘われ同行はしなかつたに違ひない。・中略・医者が異常の連絡を忘れたのは、私が山好きだから、この年になつてもなお冬山の感動を体験させてくれようとする大自然の意志によるものと思う」と結ばれた。

山登りをされなくなつてからは、もっぱら東京甲南会の月例会や、甲南山岳会の大閑宅での花見会などでお目にかかるが、だんだんと足腰が弱られ、「君ら行ける時にあちこち行つとかんとあかんで。じきにこないなるで」と笑つて忠告された。この2月享年83歳で逝去された

との報に接し、元気な先輩を失った寂しさ一入
です。謹んでご冥福をお祈り申上げます。

2007年7月 横浜にて

茂木光隆氏ご寄稿一覧：

「アルプスの麓にて」

甲南山岳会通信21号 1972年5月

「富士山」 山嶽寮45号 1991年4月

「山日記」 山嶽寮48号 1993年10月

「最後の冬山」 山嶽寮57号 2002年9月

ホームページに寄せられたメッセージ

茂木先輩の思い出

廣瀬健三

'07/03/23

太平洋戦争終戦後余り年月が経っていない頃、西独のLOCAL BUSの車中での出来事を楽しそうにお話されていました。

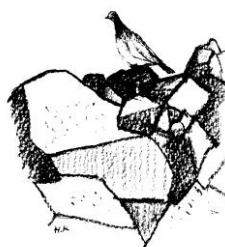
車中では日本人は茂木さんお一人だった由で、乗客の一人のドイツ人が、やおら”ここに日本人が居る”と言い出し、乗客がいっせいに、氏に注目、ドット歓声があがつた、との事でした。お互い敗戦の同盟国としての親近感をひしひしと感じたとの印象を語って居られました。

氏は昭和40年代三菱化成西独出張所長として御活躍されたようです。

また、数年前、日本経済新聞の文化欄に、同紙よりの依頼にて「田園調布の町会関連の事」を寄稿されていました。

謹んでご冥福をお祈り致します。

合掌



追悼 福永健治兄

廣瀬健三 (昭36経)

親しい知人、肉親との死別は辛い。

今回の福永健治兄（コプク）とのそれも例外でない。彼の場合、今年一月二日、9ヶ月間癌と戦闘の末、黄泉に旅立った。

彼をよく知るKAC会員はコプクと呼んでいたが、甲南高校の同級生達は年を重ねると共に交遊を深めていた様で、フクチンと呼び慕っていたらしい。此の拙文を記し乍ら、特に後半の過酷な闘病生活の事、亡くなる10日前に交わした山岳部時代のエピソードを思い出している。

“もう駄目、年内で終わりや”と苦痛に耐えながら言っていた。終焉を意識していたに違いない。あの時、彼がフト顔を背けた、一瞬涙ぐんでいたように見えたが、本当のところは判らない。

甲南高校ラグビー部OBがやっている三宮のバーで一杯やり乍らの語らい、そして、偶（たま）にはハイキングを楽しもうとも言っていたのに。（此のバーには一昨年十月末、コプク、越田コッシンと行った。元気そのものだった。斯様な運命が待ち受けているとは、夢想だにしなかった。）

甲南大学では体育会ホッケー部に所属し、山岳部との接点は途切れていた。小生も何十年をおいての付き合いの再会はつい最近の事である。

彼は甲南中学山岳部員の時代、子供にとっては相当厳しい登山に参加している。

これらの山には、小生と同期の平井センキチ、

牧野ドングリが一番多く行動を共にしたと思う。又、お互い少年時代を須磨で過ごした事で、須磨の裏山でのキャンプ、海岸での遊びなども懐かしい。（須磨での海と山での、コプク、同期の塩田エンタとの忘れぬ少年の頃のエピソードが脳裏に浮かぶ。）

印象に残る山は、彼が中学二年の時の白馬杓子岳小日向コルの春山合宿であり、同中学三年の時の春山合宿である。（中学二年で不帰一峰のアッタクメンバーに加わり、どんな気持ちだったろう）田邊ガチャ先輩以外は皆子供だった。合宿に出発する前に部室前で撮った写真を見ると、子供たちが大きなルックを背負い、果たして積雪期の北アルプスに登れるのか、全く覚束ない。

一番年下の彼が、別段大事にされた記憶が無い。それでも何時も、ニコニコしていた印象が残っている。何か余裕すら感じさせた。既に自然と身に付いた大人（たいじん）の風格があつたのだろうか。奥様と御一緒の中国政府最高幹部との懇談の際も、此の雰囲気が醸し出されていたに相違ない。思い出は尽きない。甲南高校時代の親友が「故人追悼ハイキング」を計画しているようだ。是非参加し、故人を偲びたい。

終わりに、俳人 稲畑汀子の名句を付して、御冥福を祈る次第である。

「苦しみを 解かれたる 野に遊ばれよ」

平成19年6月5日 記

ホームページに寄せられたメッセージ

訃報に接して—福永兄弟のこと

越田和男 '07/01/04

謹んで健治君のご冥福をお祈り申上げます。

昨秋の「山嶽寮」に平井センキチが書いてくれていますが、兄の隆一さんが剣岳西面の小窓尾根で遭難されたのが昭和32年の3月でした。

50周年を期して昔の山仲間が馬場島の甲南の追悼レリーフ前に集った一昨年の秋には、弟健治君も元気に顔を出し、その翌日には馬場島の裏山の中山へのハイキングにも元気に同行してくれました。迫力のある新雪の小窓尾根をともに感無量で眺めたことでした。

その一週間後に小生は偶々神戸に行く機会があり、彼と廣瀬ポンの三人で一夕を楽しんだのが最後になってしまいました。2軒まわった後、もう一軒今度はカラオケに誘ってくれるぐらい元気でした。

訃報に接し、奥様の母上、愛新覚羅浩さまの御著「流転の王妃の昭和史」(新潮文庫)を取り出し、福永家との関わりについて書かれた部分を再読して、ご兄弟のご冥福をお祈りいたしました。

コブクの死に驚きと悲しみ

田邊 '07/01/05

ええっ!

今1/5の13時50分「掲示板」を開いて、コッシンのメッセージに愕然、もう少し戻って牧野のお知らせに呆然と言うのが正直のところ。もう一年ほど前にコブクから小生と同じ胃癌で胃を全摘した、とメールしてきたので、病気でも先輩の小生が注意やアドバイスや慰めなどなど返信したきりで忘れていたのですが……

今丁度葬式がはじまってるやろ。ご冥福を祈ります。

そんなこと知らなんだんで、岐阜から朝一番の新幹線で大阪へ行き本社で新年の挨拶をして、銀行へ年始の挨拶回りして、午後から名古屋でもた挨拶と戻ってきたらこのニュースや。ほんとにびっくりです。ドングリ、コッシン有難う、よく知らせてくれました。

冥福を祈って合掌



福永隆一氏慰靈碑の前で 2005年10月

—会員短信—

名誉会員・顧問

山本 三郎（名誉会員）

秋の集会ご盛会をお祈りします。老いの身を鞭打って神戸市の代表として、ねんりんピック静岡大会に参加します。潤愁期で選手全員で稽古会を予定していますので欠席させてください。皆様によろしく。

老いの身の悲しさ、物忘れがひどくなり年はとりたくないものと、しみじみ思うこの頃です。皆様とお会いして元気をもらいたいと参加しある変わりない元気な姿を拝見に出かけたいと思っています。

平井 一正（名誉会員）

ご案内ありがとうございます。家内の調子が悪いため、現在足どめ状態です。諸兄よろしく。

4月21日(土)は神戸大学山岳部の総会と重なり誠に申し訳ありませんが、前会長として神戸大学の方に出席しなくてはなりません。皆様にどうかよろしくお伝え下さい。武田・雨宮さん家内の葬儀に御出席いただきありがとうございました。

神戸 謙司（中高山岳部顧問）

いつも大変お世話になりますてありがとうございます。2006年度は高校1年生6名・中学1年生1名で活動しています。8月の立山・剣合宿は高校生5名が初めて立山と剣御前(剣岳登頂ならず)に遊びました。雪渓で雪合戦をしたり、初めての夏山を堪能したように思います。

いつもお世話になり感謝しています。現在高校生6名中学生1名が中高山岳部員。夏山合宿・春山合宿とともに、合宿以外での活動も活

発となるよう頑張っています。今後ともよろしくご指導下さい。

鈴木 敬吾（特別会員）

調整がつかず、今回も出席できずすみません。

旧制高校

関 集三（昭10旧制理）

本年5月に、満91才になりました。昨年6月、日本学士院から満90才の祝賀帖をいただきましたが、21年続いた毎月上京の学士院例会出席もどうとう欠席しております。月1回の通院と週1回のリハビリで何とか体調保持に努めています。日本も変わったとつくづく思うこの頃です。

体調不十分の為、残念ながら欠席、御ゆる下さい。月1回の通院、週1回のリハビリに勤めております。一昨年、街で転倒以来毎月上京の日本学士院例会出席(21年間)も、とうとう欠席しています会員短信春秋通し。昨秋、大阪大学博物館入りを果たしました。来る5月には満92才の老人となります。皆さんによろしくお伝え下さい。

佐野 源一（昭10旧制文）

6月満91才になりました。腰痛・肩痛で週3回リハビリに通っていますが老化現象で直らないそうですが、リハビリ治療を受けるとその後しばらく少しばらは楽になるので通っています。スキーは勿論ゴルフもアウトになっているので。膀胱がんの方は昨年1月手術以来、何とか無事に過ごしています。そんな訳で残念ながら集会へも行けません。ご盛会を祈ります。

腰痛が少し悪くなつたようで余り続けて歩くと痛んでくるのでリハビリに 400m 位の所の医院に行くのがせいぜいと言つた所です。膀胱癌の方は 05 年の正月に手術して以来無事ですが小生の場合余り動くと再発の恐れがありますので散歩なども上記程度にしています。従つて山は勿論スキーもゴルフもアウトですので詰まりません。暇つぶしにパソコンでトランプゲームなどをやっています。

山岡 静三郎（昭 11 旧制理）

秋の集会のご案内有難うございます。今年も引き続き入院中で欠席させて頂きます。有名な田口二郎岳兄の弟、三郎君は私と甲南同期ですが山岳部には関心なく「数学」の天才といわれ、東大(理学部) 数学科を卒業後、中央官庁及び学会で活躍しましたが今春永眠されました。

ご案内戴きまして厚く御礼申し上げます。現在 90 歳を超える高齢ですが左胸部に変形性脊髄症がありまして、医師は転倒防止のため車椅子の使用を厳しく求めていまして、この会合には欠席させて戴きます。甲南在学中の頃、神戸市東灘区御影町郡家の自宅は平生記念館の西南約 100m にありまして、毎朝当時の平生先生のお宅の北側の細い道路を西から東へ歩いて甲南へ通学していました。当時平生先生は神戸の川崎工業の再建の社長の重任尽力されていました。この度のご会合のご盛会をお祈りいたします。

奥山 正雄（昭 12 旧制文）

元気です。他の約束があり残念ながら秋の集会は出席出来ません。皆様によろしくお伝えください。

満 89 才になりました。元気です。

國府 雄次郎（昭 12 旧制理）

兎も角 生きております。知事と市長さんから老人賞を貰いました。

未だ生きております。ボケはあまり進んでいないらしい。そのためか何かと云うと最長老の役を押付けられ勝ちになるのは「良し悪し」です。

武田 六郎（昭 13 旧制理）

腰痛のため歩行困難です。

赤松 二郎（昭 14 旧制理）

1919 年生れ今年は 2006 年であるから 87 才になる。山岳会の古い諸兄も年々減つてゆくのも仕方がないことである。身体は支障なく生活しております。

私も 88 才となり体力・気力が年々衰えるばかり、家の中でも杖をつかねば不安定で階段が特に危険になりました。身近な人の訃音に接すること多く淋しき限りです。皆様のご多幸を願うや切なり。

鷲尾 順（昭 15 旧制文）

ご案内有難うございました。遠出が難しくなり参加できないのが残念です。皆さんに宜しくお伝え下さい。

ご案内有難うございました。ロックガーデン慰靈祭に参加できないのが残念です。住まいの周辺を散歩するのが精一杯の日課です。

伊藤 文三（昭 15 旧制文）

緑の高原で若い?諸兄と馬鹿話でもするのは、老人にとってボケ防止になつていゝのですがね。木曽駒高原まで行く元気なく涙をのんで欠席。

日常生活にさしつかえない程度に動き回っていますが、関西までの遠出自信なく残念ながら

欠席させて頂きます。

小川 守正（昭17 旧制理）

秋の集会、行きたいのは山々なれど行かない方が無難との思い。いよいよ終わりが近づいた感あり。外見と声だけは元気らしいです。小著「昭和前史に見る武士道(続平生伝)」割に面白いです。甲南生必読の書。進呈します。Tel・Letter可

年のせいか年一回の総会、少数の先輩・同級生と多くの若い人たちの顔を見るのが待ち遠しいです。口数と酒量だけはなんとか保っていますが、心房細動で慰靈祭・秋の駒ヶ根集会に参加できず残念。「山嶽寮」楽しみにしております。
幹事の方々ご苦労様

国府 三郎（昭18 旧制理）

ご連絡有難うございます。但しバタバタしています。転居しました関西です。お会いする機会も増えるでしょう。お元気で。

お世話になるのに失礼します。皆さんお元気で。

茂木 光隆（昭18 旧制理）

こちらからお報せしなければなりませんのに遅くなりましたが、主人 光隆 本年2月2日他界いたしました。(享年83歳) 甲南山岳会のホームページはいつも楽しみに見ておりました。

色々お世話になり有難うございました。

妻 佐緒子

津田 昌男（昭18 旧制理）

ここ数年パーキンソン病で足がもつれ一人では外出も出来ない状態です。山岳会の集まりに

は出席したい思いで一杯です。体の自由がきかないのが残念です。盛会を祈ります。出席の皆様によろしく。

岡橋 節三（昭19 旧制文）

日頃より、父・岡橋節三がお世話になっております。本日、秋の集会ご案内を転送にていたきましたが、昨年の11月26日より入院生活に陥り、先の7月7日、腎癌のため82歳にて永眠いたしました。

8月20日に七七忌法要を営み、納骨も済ませました。生前のご厚情に感謝申し上げます。

長男 岡橋弘道

伊藤 長次郎（昭21 旧制理）

毎々御案内有難く存じます。

徳末 省三（昭21 旧制理）

お世話様にご通知頂きまして有難う存じます。約7年ばかりの入院生活で、早速「お知らせを持参」「くれぐれも皆様によろしく」と申し出でおります。お蔭様で現在は安定した状態でございますので、他事乍らご休心下さいませ（悦子）

丸山 照夫（昭25 旧制文）

いつも欠席で申し訳ありません。とりわけ旧制の方々のご健康を祈ります。来月は数十年ぶりに上高地にまいります。といっても妻とホテルの周辺を散策するだけです。

2006（平成18）年秋「木曾福島集会出欠」と2007（平成19）年春「総会出欠」に併せてお知らせいただいた近況です。文字のスタイル、秋は明朝、春はゴシックで区別しています。

新 制 高 校

中井 久夫 (昭 27 新高)

脚を痛めだんだん引きこもりに近くなりました。読書・家事・翻訳・まれに執筆。

北方 龍一 (昭 30 新高)

相変わらず毎年ミヤンマーに行ってます。

平井 吉夫 (昭 32 新高)

日本山岳会支部懇談会(福井)と重なるため残念ながら出席できません。9月1日から越田たちとスロヴァキアのタトラ山脈に遊びに行きます。

返事が遅れて申し訳ありません。元気に暮らしております。7月にバブさんリーダーでモンゴルに行きます。アルタイ山脈を北側からじっくり眺めたいと思っています。

竹原 祐爾 (昭 33 新高)

ご案内有難うございます。小生いたって元気しております。皆様に宜しくお伝え下さい。

丸山 霽茂 (昭 37 新高)

70才を超ましたが思ったより元気にはいます。登山は年1回位夏の信州へ、あとは地元の低山へ時々、結婚が遅かったので今年やっと孫が出来そうです。毎回欠席で申し訳ありませんが皆様によろしくお伝え下さい。

川村 静治 (昭 40 新高)

海外出張のため欠席します。

福田 裕久 (昭 45 新高)

最近はもっぱら犬たちの散歩を楽しむ程度で、丹波近辺の山にも登らなくなりました。相変わらず達者な南里先輩が又新しく生まれた国を訪問されているそうです。

犬を飼ってから近所の散歩に行く程度で山へは行っていません。

白川 浩平 (平 2 新高)

今年の夏は、家族で北海道へサーフィン+キャンプ旅行に行ってきました。ニセコでは有名な五色温泉のそばのキャンプ場に泊まり、ガスの中でのキャンプに子供たちは大喜びしていました。

私の趣味の WEBSITE です。

<http://shirakawatax.com/KOHEI-SAN-SURF/kohieisansurf.htm>

4月より、高知の足摺岬近くの土佐清水市に引越します。冬には、近くの大堂海岸という海沿いの大岸壁でリゾートクライミング(?)を楽しみたいと思います。皆様どうぞ遊びに来てください！(高知での新住所は高知県土佐清水市栄町3-9ですが、又市内で引越しする可能性が大なので元町に郵送物はお願い致します。)それから冬にサーフィン&家族旅行で行ったミクロネシア・ポンパイ島で未登のビッグウォールを発見しました。詳しくは KOHEI-SAN-SURF で探してください。

2006(平成18)年秋「木曽福島集会出欠」と2007(平成19)年春「総会出欠」に併せてお知らせいただいた近況です。文字のスタイル、秋は明朝、春はゴシックで区別しています。

大 学

小原 耕治 (昭 31 経)

諸兄に逢えるのを楽しみにしております。お

世話をかけます。

先ずは、元気で居ります。会員諸氏に逢えるのを楽しみにしております。世話役御苦労様です。

阿部 純一 (昭 31 経)

返事が遅れて申し訳ありません。体調不良のため本年の集会には残念ながら欠席します。

いつも御世話になります。残念ながら所用のため、21・22日の会合欠席させていただきます。皆様によろしく。

砂川 彰雄 (昭 32 経)

いつもながらお世話をかけ有難うございます。もう木曾集会の時期になったかと何か一年が早くなつたような気がします。何の変わりもなくこの1年も巡って行きます。権兵衛トンネルが開通して便利になりました。

3月初め富士山麓・河口湖・西湖・山中湖を巡ってきました。高3の11月火山礫を交えた突風とアイスバーンに悩まされながら登ったのが遠い昔となりました。夕焼けにテラーッと光る大斜面・朝焼けの赤富士とやはり富士山は登る山より眺める富士を実感しました。

柳澤 正 (昭 32 経)

いつも幹事役をしてくださり感謝しております。秋の集会は、以前から10月8~9日と聞いておりましたが、本年は他に顔を出す処あり誠に残念ながら欠席いたします。来年は是非と思っておりますのでよろしくお願ひ致します。ご盛会を祈ります。

変り映えしませんが、日々元気に過ごして居ます。この5~6年旧制高校寮歌祭に凝って居り4/21は姫路行きを約束して居りますので総会は

欠席します。尚、4/22の慰靈祭は、まだなんかレリーフの所まで行けると思いますので参りました。よろしく。

宮本 侑 (昭 32 経)

7月15日から本日まで六甲山におりました。今年は7月中は雨ばかり、8月に入ると暑さがひどく、毎年のような快適な日々は少なかったです。このため野草の花も少なく、地球温暖化のためにかだんだん住みにくくなつて来ました。当日は3連休に東京から来客があるため欠席いたします。

0.72世紀のうちには色々あるものです。

行友 利安 (昭 32 経)

種々お世話になり感謝致しております。他の用と重なり失礼致します。

鈴木 賴正 (昭 33 経)

8月5日(土)家族で立山に登りました。頂上で神様のお払いを受けるのに列が出来るほど満員でした。ゴルフは月2回ほどでハイキングはサボっています。今回は車で行く予定です。同乗される方がありましたらお知らせ下さい。いつもお世話かけます山の話を聞かせて下さい。

時には京都北山をぶらぶら散策しています。ゴルフは月に一回仲間とスコアーを気にせずに頑張っています。総会・慰靈祭出席します。お世話かけます。

田辺 潤 (昭 34 経)

幹事の皆さんご苦労さまです。いつもお世話有難く感謝しております。昨年の後半以来、能力以上の受注量で多忙 多忙、やっと何とか年内には解決できそうな目途がたつたところです。従つて鮎釣りにも行かず、行ける土日は高遠へかよっている今日此の頃です。

いつもいつも大変なご苦労をおかけします。今年こそは出席しようと考えおりましたが、そのために返信が遅れたのですが矢張り駄目でした。来年はもっと早くから、予定してみようかと思っています。諸兄に宜しくお伝え下さい。

美田 靖夫（昭35 経）

一度元気になり、①塩屋—長田②追谷再度摩耶山—新神戸駅③海より六甲山を遡行し摩耶山—新神戸④油コブシ—石切道—白鶴美術館—阪急御影。チョット頑張りすぎた為、現在真夏の夢と雑草抜きどくだみ(十葉)茶作り。

芦田 匠平（昭35 理）

この季節、墓参りで動き難い。皆様によろしく。

昨年春より、七十の手習いとして英語の塾に通い始め、単語に3種類あることに気付きました。知ってる単語・忘れた単語・今一つが忘れてない単語です。この3番目が厄介で壊れかけの記憶装置にメモリー領を探すことから始めなあかんようです。「少年老い易く」とか「光陰矢の如し」とは偉い人の残した言葉だと思ってきましたが、昔にも小生のように悔しがった人が居たのかなとの実感を深めている昨今です。6月にお会いすることを楽しみに See you!

鳥居 威男（昭35 経）

体力の衰えをカバーするため、自宅から山に向かって往復 1 時間 30 分の早朝トレッキングを！何時まで続くか。毎日元気で過しています。

元気に過ごしております。近郊の山に！孫の世話・スケッチと好きな事をして時間を潰しています。当日皆様にお会いすることを楽しみに。

伊丹 弘忠（昭35 年経）

元気ですが腰と膝の調子が悪く乗用車に長時間乗るところえます。又 10月 10日より白神山地に行きたいと思っていますので今回は欠席します。

元気にしております。一昨年より膝の調子が悪く下山には苦労しております。早く直し里山ぐらいは歩けるようになりたいと思っています。

牧野 宏（昭36 経）

いまだに会社・家族にこき使われています。「駒王」 参加できず誠に残念です。目覚めが早くなりました。朝のウォーキングには持って来いですが。盛会を願っております。

毎年、恒例の健康診断の結果今年もO.K.でした。発車オーライですが私は相変わらずスロースターターです。

藤安 賢一（昭36 経）

胃ガンの手術後 8ヶ月が経ちましたが 7ヶ月過ぎた頃からほぼ毎日甲南裏山の仏舎利塔まで登っています。往復約 1 時間 15 分ばかりです。皆様お元気で何よりの事です。

胃ガンの手術後 60kg まで落ちた体重も今年は 2kg 増し現在 62kg、ほとんど毎日、仏舎利塔まで山登り、気分爽快であとは読書又は用いてお出かけ。

越田 和男（昭36 理）

9月に、平井センキチの発案でスロヴァキアのハイタトラ山脈の麓をトレッキングします。その後チロルで 1 週間程のんびりしてから帰国の予定です。

山歩きと山関係の交遊を楽しんでおります。5月にペルーに行きますが、これはド観光ツアーパートicipantです。チベット・ラサへの鉄道にも乗

ってみたいものです。

廣瀬 健三（昭36 経）

何時もお世話様です。9月30日～10月迄「マナスル三山展望トレッキング」に行きます。40数年前 田辺賀茶先輩に御供して訪れたカトマソズがどんなに変わっているかが楽しみです。7月・8月と2回四国の剣山系に行き久しぶりに山登りました。

昨年は二度四国の山に登り、一度はシュラフ持参で、又二度目は剣山荘出発4：30AM。懐中電灯頼りに出発し11時間程度歩きました。何十年振りに登山に行った感じでした。

大関 和夫（昭37 経）

8月25日インターハイ登山大会50周年の祝賀会(奈良)へ行つきました。360名の参加した第一回選手は13名だけの出席でした。やはり年はとったものです。190名が参加した大パーティーで、山と酒はつきものという感じでした。JACの知り合いが岩手県・神奈川県代表に参加していました。山は生涯の楽しみになります。高校総体(インターハイ)も50年もたつと500名を越す大イベントになりびっくりしました。

スキーにがんばっています。少しは上達したのではないかと思っています。昔登った鹿島槍や杓子岳・白馬岳を見ながら滑る幸せを感じています。冬の山は一番です。

柏木 宏文（昭37 経）

7月17日に大腸癌から腸閉塞を引き起し大手術を行い危険な状態になりましたが、現在肺炎を起こしてはいますが状態は落ち着いております。一時うわ言で“山”的事を話しておりました。時々山岳部の歌を唱って聞かせております。皆様の御健勝を。内

昨年7月に腸の大手術を致しまして、過日(3月9日)退院をすることが出来ました。今は自宅でリハビリに頑張っております。週2回のディサービスにお世話に成っております。皆様のご健康と盛会をお祈りします。柏木 内

飯田 進（昭38 経）

昨年暮ノロウィルスにやられまして、そのままスキーシーズンに入りトレーニング不足で太腿が張り、スタミナ不足もあって早々にスキーは打切り。渓流釣りに切替です。

二谷 和成（昭38 経）

お世話になります。今年は梅雨明けが遅く、計画していた7月の山行は中止。8月末に上高地から焼岳に登りましたが、28段の垂直のはしごもあり厳しかったです。中の湯温泉は最高でした。皆様に会えるのを楽しみにしています。

月1～2回は近郊の山へハイキングに行っていますが、体力の低下を実感。年1回位は信州方面の山へ出掛けたいと思っています。

福田 信三（昭39 理）

毎度幹事役、御苦労様です。あいにく旅行中のため欠席いたします。会の成功をお祈りいたします。皆様によろしくお伝え下さい。

山すそでウロウロしています。水戸の茨城近代美術館で加山又造展で桜島をいろんなタッチで描いていました。山は南岳1,117m、多分富士山に次いで画家をひきつける山のようです。

武田 雄三（昭39 経）

お世話役の諸兄に多謝。今年も宜しくお願ひします。

幹事役の諸兄にはいつもお手数を掛けます。

森本 全彦（昭39 法）

事務局の皆様、OB会の運営ありがとうございます。65歳の年令になり、一度に山に行く機会少なくなりました。体力自体が山行自体を変えているのであります。仕事・山行き出来るのも健康のパロメーターと思い頑張っています。今回も欠席ですが楽しい懇談会でありますように。

返事遅れて申し訳ありません。今年も有志でヒマラヤ(ランタン方面)トレッキングを計画しています。10月から1ヶ月程参加御希望の方はどうぞ、月1回ぐらい集まり計画中です。

鵜木 洋 (昭40文)

元気でやっています。

水渡 清夫 (昭40営)

この夏、柏君・竹中君ほかのメンバーと蓼科山行ったくらいで、あまり山へは登っていません。毎春、大関先輩宅の花見会で旨い酒を飲むのが楽しいです。

竹中 統一 (昭40経)

恒例の夏登山は、柏・水渡氏一行6名で北八ヶ岳・蓼科山へ行きました本年のスキーシーズンは安比をベースに奥志賀・梅池など2週間強滑ることが出来ました。また、4月末よりはツエルマットで3,800mの北点より1,800m迄高低差2,000mのヘルスキーを楽しみました。健康を祝して感謝！

奥山 正紀 (昭40法)

10月10日に(左)17日に(右)に白内障の手術の予約が入っております、残念ですが欠席いたします。

21日には、5年振りの高校の同窓会の為に欠席します。22日ロックガーデンは体力的に自信がなく申し訳ないが欠席です。皆様によろしく。

伊丹 徳行 (昭40法)

幹事さんご苦労さまです。久しぶりに山に行きました。出羽三山奥参りです。8/14 直径1m以上の木が生い茂る杉並木を左に国宝の五重塔を見ながら2,446段の階段を登る。翌日は月山八合目から後に鳥海山を見ながら月山→湯殿山神社へと約6時間半歩きました。へとへとでした。ストックを馬鹿にしていましたが次回からは使用することにしました。くれぐれも湯殿山→月山→月山八合目とは行かない方がいいと思います。

幹事さんご苦労さんです。足の関節痛がひどく山行は昨年の出羽三山が最後ではないかと思っています。誰か良い整形外科医を知りませんか。

塩路 晃二郎 (昭40営)

残念ながら出席できませんが山岳会の盛会と発展を祈っております。

井本 洋 (昭40理)

残念ながら欠席です。皆様によろしくお伝え下さい。

柏 敏明 (昭41経)

返事が遅れて申し訳ありません。ダウラギリトレッキングに向けて準備を進めていますが、負荷の心電図に引っかかりました。ヒマラヤで迷惑をかけてもいけませんので、念の為9/末か10/初に2~3日入院して心臓のカテーテルの検査を受けることにしました。丁度ややこしい時期ですので欠席します。前日の遡行に備えてウェットスーツを購入したのに残念です。ご盛会をお祈りいたします。

幹事様いつもお世話頂き有難うございます。すっかりスキーが面白くなり3月末には雨宮さん・小西君達とニセコに行って来ます。スノウパ

ウダーが樂しみです。総会・慰靈祭共、生憎と先約が入っている為残念ながら出席できません。盛会をお祈りすると共に皆様に宜しくお伝え願います。

井上 徹（昭41 営）

あいかわらずゴルフと釣りの仙人生活です。HPは樂しみにのぞかせていただいておりますが、皆様方の行動力及びエネルギーにはただ敬服の一言につきます。ブログに仙人生活をのせておりますので、遊びに来て下さい。

伊豆山中の庵で、毎日忙しく(?)しております。と言うのは、昨秋から請われて伊豆温泉の某温泉旅館の女将のパートナー兼茶飲み相手とし新しい世界で毎日楽しんで(?)おります。71才の女将のガンバリには頭が下がるおもいです。

森岡 宏光（昭43 理）

いつも欠席ですいません。今年も百名山 妻と2人で登ってきました。6/24～25【くもり】雨飾山 1,963m 7/15～16【雨】鳥海山 2,236m 8/17～19【晴】木曽駒ヶ岳 2,956m・空木岳 2,863m 今回もスリルと変化のある「厳しい山行」でした。

國分 廣昭（昭43 経）

今年も参加する予定です。よろしくお願ひ致します。

頼富 信輔（昭43 法）

今年も出席できず残念です。小生今のところ何とか健康にも恵まれ四国の山々を楽しんでいます。四国にお越しの節は是非声をかけて下さい。会員の皆様のご多幸をお祈りいたします。

石原 浩二（昭44 理）

今年は出席できます。いつも関係者の方々に感謝しております。

今年定年ですが引き続き勤務となり有難く思っております。

赤田 友則（昭44 理）

今年定年になりましたが続けて勤務しています。仕事の内容は変わらず求人・社有林管理等です。先週は九州日田の山に登りハチに刺されました。当日熊野の山に行く予定で参加できません。ホームページに写真等送っておきます。皆さんによろしくお伝え下さい。

岸田 昌雄（昭44 文）

9月16日・17日は岸和田だんじり祭。私も3年前200代目年番長を受け、今年も相談役として現役の最後の年になりました。来年からは妻とハイキングから始め様と思っています。宜しくご指導下さい。（年番長→最高責任者）

矢吹 操（昭45 理）

ご案内いつもも有難うございます。元気で仕事に励んでおります。健康維持のためのジョギングも継続しています。

特に変わったことは無く、元気で過ごしております。健康維持の為ジョギングしていますが、タイムより完走すれば満足。これでストレス解消になっています。

南里 章二（昭45 理）

毎年のご案内ありがとうございます。この時期はいつも学校行事と重なり出席できず申し訳ありません。今夏は、今年6月に独立したモンテネグロを中心に、旧ユーゴ4ヶ国を回ってきました。前回(30年前)駆け足旅行しか出来なかったところを改めて旅すると、これらの国の歴史、文化の奥深さをより深く感じます。これで私の既訪国は193ヶ国となりました。皆様方に宜しくお伝え下さい。

今年も総会・慰靈祭共に参加致したく存じます。いつも御丁寧な御案内ありがとうございます。明日(3月19日)より4月から開講されるカルチャーセンターでの講義のネタ探しに、2週間の予定で20年ぶりにギリシャを旅する予定です。

平井 幹男 (昭50文)

山には全然行けませんが、仕事柄ドロミテやスイスアルプスのニュースに接してリタイヤ後の楽しみにと夢を見ていますが子供たちがまだ高校生なので、まだまだ先の話になりそうです。しかし週3・4日はトレーニングジムに通って体調を整えています

P.S 残念ですが、総会・慰靈祭参加できません。

高橋 けい子 (昭50文)

いつもお世話になりありがとうございます。お花見・天神祭 etc と、ここ1-2年同期と会うことが多くなり、学生時代に戻ったような気分です。(?!)

いつもありがとうございます。この一年は、天神祭り・ヒナコ(故平井由美子さん)の墓参り・梅見の会・・・と同期や先輩諸氏、今も可愛い(?)後輩たちと旧交を温める機会が多くあり、自転車操業のような会社を営みながらも、結構楽しく忙しく過ごしております!当日は親戚の結婚式で横浜に行っており参加できませんが、盛会をお祈りしております。

大柳 香代子 (昭51法)

元気であります。いつもご案内ありがとうございます。

ぼちぼちと又、山歩きを始めたいと思っています。

大森 雅宏 (昭53文)

今年もご案内ありがとうございます。この時期の短信はもう例年おんなじ「山嶽祭出来ました。原稿お寄せいただいた皆さんありがとうございます」です。しんどいことも多いのですが、皆さんより先にじっくり読めるのが役得です。

この冬は身辺雑事多くて一度も山に行けませんでした。子供が大学生になって、気兼ねなく「すべる」ことが出来ると思ったのも束の間。両親の健康問題など、いろいろあります。できるだけ都合をつけて、木曽福島前夜祭の沢登りには出かけたいと思っています。

要 裕晶 (昭55営)

毎年ご案内をいただきながら、出席できず申し訳ありません。本年も先約のため欠席させていただきます。

4月より下記の住所に転居しました。

:

山本 恵昭 (昭56理)

いろいろな雑務に日々追われていますが、何とか月一回は山に入るようになっています。いつもギリギリにならないと日程が決まりませんが、御都合があえば御同行下さい。

今シーズンはあまり山スキーに行けませんでした。その分雪解け後の新緑の森へいろいろ行きたいと思っています。

今井 啓介 (昭56経)

九州に赴任して1年余り阿蘇の火口には驚愕しましたが、やはり雪山の景色がなつかしいです。

八木 健 (昭58経)

毎回ご案内ありがとうございます。久しぶり

に渋谷さん・大森さん要さん・住友さん・川野さんにお会いでき楽しい時を過ごしました。卒業してもう25年、年々一年が早く感じるようになってきました。盛会を祈念申し上げます。

皆様のご活躍をご祈念申し上げます。

西名 俊英（昭60理）

いつも案内をいただきありがとうございます。
3月にリフレッシュ休暇をとり、家族4人で八重山諸島の黒島に行ってきました。山でなく海ですが久々に真っ黒に日焼けしました。

宮崎 哲（平2理）

ご無沙汰しております。昨年、下記住所に引っ越しました。

吉川 寛（平5経）

近年めっきり山行きをしていなかったのですが、昨年末思い出した事があり六甲山へ・・・。足元のアイスに気付かず不細工に転倒、左足首を折り、鞄帯まで切ってしまいました。メタボリックシンドロームに怯えながらリハビリをしています。今回は仕事と重なり欠席させて頂きます。皆様によろしくお伝え下さい。

松成 健（平8文）

九重の山々を中心に登っております。最近はお盆を利用して屋久島へ行き宮之浦岳(1,935m)を登って参りました。直径5m以上ある杉の中を

歩いているとジェラシックパークのような雰囲気です。人気の無い所を歩いていると恐竜が出てきそうな感じでした。

体重80kgを間近に控え、メタボリックシンドロームそのものの身体を維持しつつ過ごしております。昨年夏は屋久島の宮之浦岳に参りました。次回は永田岳やモッチョムを目指したいと考えております。九重の山々や由布岳は何回も行ったので、宮崎の山を狙っています。

大野 彰夫（平9経）

毎回ご案内頂きありがとうございます。10/8法事のため欠席いたします。ここ数年現役山岳部が復活し、大変嬉しく思っています。

三倉 康裕（平11法）

転居しました。お手数ですが住所の変更をお願い致します。

転居しました。住所の変更をお願い致します。

池内 友宏

毎年ながらこの会の日は休みにくくて。また何かで参加させて頂きます。

2006（平成18）年秋「木曾福島集会出欠」と2007（平成19）年春「総会出欠」に併せてお知らせいただいた近況です。文字のスタイル、秋は明朝、春はゴシックで区別しています。

— 報告 —

秋 の 集 会 木 曽 福 島

平成18年10月8日（日）～9日（月）

恒例となりました秋の集会が木曽駒文化公園施設「駒王」にて開催されました。

今回は19名のメンバーが集い、旧交を温め夜の更けるのを忘れました。



飯田 石原 伊丹 山本（真） 山本（恵） 安井 塩崎 雨宮 越田
武田 井上
米山 砂川 小原 田辺 鈴木 村上 二谷 大関

定 時 総 会

日 時 平成19年4月21日（土）

場 所 平生記念セミナーハウス

出席者 山本三郎 神戸謙司 （名誉会員・顧問）
鷺尾 頸 小川守正 （旧制高校）
小原耕治 宮本 侑 木全 実 鈴木頼正 雨宮宏光 鳥居威男
伊丹弘忠 牧野 宏 廣瀬健三 藤安賢一 二谷和成 飯田 進

武田雄三	村上與利一	福田信三	安井 正	鵜木 洋	伊丹徳行
浪川純吉	國分廣昭	石原浩二	南里章二	井上知三	大森雅宏
要 浩晶	山本恵昭	(大学)			
森本寛之	谷 勇輝	奥田剛史	(大学部員)		

議 事 1 会長挨拶

2 18年度事業報告

慰靈祭 ／ 山嶽寮 ／ 秋の集会（木曽福島）／ 中高活動報告

3 18年度会計報告（別記）

4 19年度事業計画

慰靈祭 ／ 山嶽寮 ／ 秋の集会（木曽福島）

5 その他

遭難対策基金について

遭難対策金は大学サイド・学生個人も保険付保でカバーする時代、この際遭難事故を未然に防ぐ観点から、講習会の参加経費を使途に加えてはどうかとの提案があり検討。文部科学省主催の研修会のうち学校当局より援助のないものについて山岳会が参加経費を援助することとした。

現役遠征援助基金について

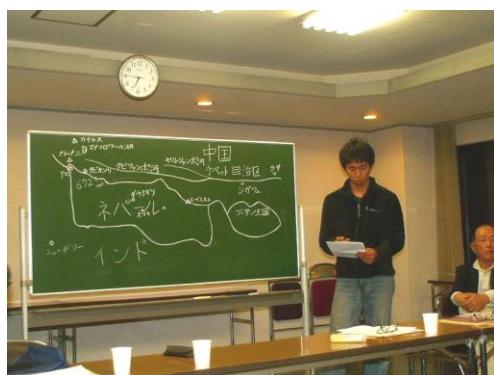
過去のヒマラヤ登山時の有志による募金の残金 338,945 円を現役遠征援助基金として管理、今後の現役学生の海外登山の援助に活用することとした。

現役のヒマラヤ登山について

同志社大学山岳会・日本山岳会関西支部共催「クビ・ツアンボ源流域学術調査隊 2007」に日本山岳会関西支部学生部のメンバーとして参加予定の大学山岳部主将谷勇輝君から計画概要の説明。

併せて、今回の登山に要する費用について「現役海外遠征支援金」の募金を行うこととした。

議事に続いて懇親会



「クビ・ツアンボ源流域学術調査隊 2007」の説明

会計報告

平成18年度

会計 山本 恵昭

平成19年3月31日 単位 円

慰靈祭

日 時 平成19年4月22日(日)

銘板取付 故 茂木光隆氏

参 加 者 神戸謙司 (中高顧問)
柳澤 正 廣瀬健三 飯田 進 村上與利一 武田雄三 安井 正
鵜木 洋 塩崎将美 浪川純吉 國分廣昭 石原浩二 南里章二
山本真博 井上知三 大森雅宏 (大学)
谷 勇輝 奥田剛史 (大学部員)
若宮(中1) 森井(高1) 西野(高1) (中高部員) (下のスナップは左からこの順)

お 客 様 乾恵美子様 横山加壽子様 横山紀子様

今年は生憎の雨天で集合写真
がありません。代わりに中高
生をご紹介します。



－ ホームページから －

ダウラギリトレッキング

小 西 啓 右 (関西学院大学山岳会)

森本さんから共同報告をしてくれとのご依頼がありましたので、関学のHPに投稿した分を貴会の掲示板に転載させて頂きます。

10月26日から11月15日までのダウラギリトレッキングの報告です。参加者は森川先輩を隊長として、関学から青木、小西、甲南山岳会の森本氏を含む15名。関空からバンコック経由カトマンズ入り、そのまま国内便に乗り換えポカラへ、滑走路に降り立って北を見るとブーゲンビリアや真っ赤な花をつけたねむの木の上に、あのマチャプチャレ、アンナプルナ山が…！

これまで幾度となく見慣れた写真を見るのと違って首をあげ目線をあげなければ実物は見れない。その場に立って距離感を感じて、やっと念願のヒマラヤと対面できたんだと感動がこみ上げてきます。

翌日ポカラから30分弱カリガンダキ川沿いに飛んでジョムソンへ、小型機を降りると対岸に三角錐のティリチヨ(7,134m)が圧倒的な高さで聳えています。荷を担いで6日間歩いてきたシェルパ、ポーター達と合流しトレッキング開始。総勢73人、今回はテント泊のためポーターの人数も多くなっています。

広いカリガンダキ川の川原を1時間半下ってマルハ村でキャンプ。

この村はかつて仏教の原典を求めてチベットへ旅した河口慧海が長期滞在した所で小さな寺院に使ったといわれる粗末な木のベッドや行李が置かれています。2,670mのマルハ村からカリガンガキ川へ切れ落ちる急傾斜の斜面へ取り付きます。砂礫のジグザグ道を約4時間、3,650mの灌木帯を切り開いたヤクの放牧小屋の広場にキャンプ。3日目は灌木帯をぬけた4,100mの草

地の斜面。カリガンダキ川を挟んで左から、ティリチヨ、ニルギリ(7,061m)上流を見れば荒涼としたカリガンガキの奥にチベットの山々が連なって、まさにヒマラヤのど真ん中にいる気分です。

ダウラギリトレッキングは時計回りのコースであれば徐々に高度を上げるために高度順化が比較的楽であるが、途中雪崩の危険箇所があるため今回は急に高度をかせぐことになる反対コースでした。このため4,100mのキャンプで3日間滞在し高度順化を計ったが6名が体調を崩しこでリタイア。

高度順化の日 4,300mの尾根を越えたところで突然、盾のように立ちはだかるツクェ(6,920m)が現れ、そのすぐ後ろに、真っ白で、遙に高く重々しく聳えるダウラギリ(8,167m)が天を圧していました。まさに神々の座がそこにあると感じました。

4,500mぐらいからは雪の尾根を次々横切って5,200mのタバ峰へと接近したが、この日の行動は約7時間、途中から雪が降り始め4,900m弱でテント。隊員もかなり疲労し、ポーターにも多数の高度障害者がいました。このためサークルはこれ以上進めないと言い出し、本来はダウラギリベースキャンプまでの予定であったが行程半ばでの撤退となりました。その後3日間ほど山は荒れ、アンナプルナに入っていた日本隊が雪崩にあいサークルが亡くなつたというから正しい判断だったと思います。

マルハ村に下山後ヒンズー教の聖地ムクチナートまで往復のトレッキングに切り替えカリガンダキ川を遡行、途中マオイストに通行料を徴収されるトラブルもありましたが、神々の山の

懐で人と動物たちが共同生活をしているような、ゆったりとしたおおらかなヒマラヤの自然に魅せられました。

カトマンズに戻って遊覧飛行で大ヒマラヤの

パノラマを楽しみ、現地で頑張っている高田OB甲南の西濱OB、エベレストトレッキングからアンナプルナトレッキングに向かう途中の甲南の塩崎OBら甲南、関学6人で楽しい一夜をすごしました。

ネパールトレッキング事情

塩崎 將美 (昭41経)

帰国して1週間、ボツボツ記憶を整理しないと思い出せなくなりそうです。まずは行動記録。

アンナプルナベースキャンプ (11月13日～25日)

- 13日 カトマンズ → ポカラ (飛行機)
ポカラ → フェディ (タクシー)
フェディ(1,130m)発 13:30 ダンプス(1650m)着 15:30 (2時間)
- 14日 出発 7:50 ランドルン(1,565m)着 14:00 (6時間10分)
- 15日 出発 8:20 チョムロン(2,170m)着 14:15 (5時間55分)
- 16日 出発 8:00 ドヴァン(2,600m)着 14:40 (6時間40分)
- 17日 出発 7:00 マチャプチャレBC(3,700m)着 12:15 (5時間15分)
- 18日 出発 6:00 アンナプルナBC(4,130m)着 8:00 (2時間)
- 19日 出発 7:45 バンブー(2,310m)着 14:15 (6時間30分)
- 20日 出発 8:00 チョムロン(2170m)着 12:00 (4時間)
- 21日 出発 8:00 タダパニ(2,630m)着 12:50 (4時間50分)
- 22日 出発 8:00 ゴレパニ(2,860m)着 13:30 (5時間30分)
- 23日 午前5時からプーンヒル(3,193m)へ登り1時間
出発 8:30 ティルケドゥンガ(1,540m)着 13:00 (4時間30分)
- 24日 出発 7:40 ナヤブル(1,070m)着 9:50 (2時間10分)
→ ポカラ (タクシー)
- 25日 ポカラ → カトマンズ (飛行機)

地図 <http://www.green-lotus-trekking.com/engels/treklod-anna-sanct.html#map>

ゴーキヨピーク (11月27日～12月6日)

- 27日 カトマンズ → ルクラ (飛行機)
ルクラ(2,840m)発 10:15 パクディン(2,610m)着 13:55 (3時間40分)
- 28日 出発 7:15 ナネムチェバザール(3,440m)着 14:25 (7時間10分)

29日 高度順化の為停滯 シャンボチエ(3,720m)のホテル・エヴェレスト・ビューまで
出発 8:15 帰着 12:30 (4時間5分)
30日 出発 7:30 ポルツェ・テンガ(3,680m)着 12:50 (5時間20分)
31日 出発 7:50 マッチャエルモ(4,410m)着 15:20 (7時間30分)
1日 出発 7:50 ゴーキョ(4,790m)着 11:50 (4時間)
2日 出発 7:40 ゴーキョピーク(5,360m)着 10:45 (3時間5分)
出発 13:00 マッチャエルモ(4,410m)着 16:00 (3時間)
3日 出発 7:30 ナムチエバザール着 15:15 (7時間45分)
4日 出発 8:15 パクディン着 13:50 (5時間35分)
5日 出発 8:00 ルクラ着 11:00 (3時間)
6日 ルクラ → カトマンズ 飛行機

地図 <http://www.green-lotus-trekking.com/engels/treklod-everest-gokyo.html#map>

1日に7時間歩いている日もありますが、昼に少なくとも1時間は食事を取りながら休憩しています。

ともかくユックリを心がけて歩きました。

ネパールのトレッキング事情

2006年10月27日より、新しいトレッキング許可証T R C ((Trekking Registration Certificate : トレッキング登録証明書 (仮訳))が必要となっています。T R Cは、TA A N (Trekking Agencies Association of Nepal:ネパールトレッキングエージェント協会)に所属しているトレッキング会社に申し込まないと発行されない、新しい許可証です。トレッキングには、TAAN加盟トレッキング会社所属のガイドまたはポーターのいずれか1名を雇う必要があります。

個人でトレッキングを計画されている方も多いと思いますが、結果からいいますと、個人トレッキングはできなくなります。T R Cを所持していないと、トレッキングルート上有る検問所にて締め出される恐れや、違法トレッキングとして罰則が課せられる場合もありますので、十分にご注意ください。と言う様な事になっています。

私が歩いた範囲では地図だけでガイドいな

くても迷う事無く歩けると思いますがガイド/ポーターでは歩けなくなつたようです。安いトレッキングができなくなつたと言う事です。実際に私がカトマンズで合った日本人夫婦はアンナプルナで追い返されカトマンズに戻りポーターを雇いやり直しとの事でした。

若いバックパッカーの中には高くつくからトレッキングはやめたと言っている人もいました。

たしかに国にお金は落ちますがこのシステムに対する不満も出ている様です。地方の人達の雇用が侵されていると言う事です。カトマンズでT R Cを申請する時にガイド/ポーターが決まってしまいルクラのガイド/ポーターに仕事が回ってこないと言う事になっているようです。

ネパールの様な国ですから先の事は分かりませんがしばらくはこのシステムでいくと思われます。



ロッジのトイレ

福田信三 ’06/12/08

塩崎君

ヒマラヤを垣間見た同志として質問。

道中のホテルか旅籠か判らんとこの便所。これ何とかならんと思わなかつた？あの匂いとてんこ盛り、未だに頭を離れません。

こんな微々たることを超えて、ヒマラヤは素晴らしい。だから王様に言いたい、スイスを見習ってください。そうすれば裕福な国になりますよ。無限大の商材がありながら放っておくなんて。成功すれば、さすが王とあがめられますよ。と思いました、塩崎君はこのあたりどう感じましたか？

トイレについてはどこかで書こうと思っていました。

私が歩いたのが比較的整備されていると思われるエヴェレスト街道とアンナプルナでしたから福田さんとは違う感想を持ちました。

行く前にはトイレが汚なかつたら嫌だなと思っていたがこの国にしてはそこそこ清潔でした。ロッジのトイレは別棟のものと同じ建物の中にあるものがありました。部屋が2階で2階にもトイレがあるロッジもありました。別棟のは粗末小屋の扉を開けるまでは

行きたくないなと思いますが中はまあまあ。

福田さんの言われるトラディショナルなトイレは1-2回ありましたがそれほど不潔に感じませんでした。ほとんどのトイレはコンクリートの床に和式便器の金隠しが無い白い平べったい便器がはめ込まれていました。トイレの床が水浸しなのには昔のベトナムやマレーシアで慣れていましたから問題無し。

使用後の紙は流せません。トイレの中の箱とかカンカンにほり込みます。後はバケツの水で流してブラシで便器を擦りお終い。中には水洗のものありました。さすがにウォシュレットはありません。気になる時は濡れティッシュで尻の穴の周りを拭けば気持ち良し。

ネパール滞在中一度だけ腹を壊しました。マッチャエルモからゴーキョへ登る途中、岩陰に3度駆け込みました。ロッジに着いてガイドが心配しトイレ付き個室の特別室がus\$20であるがどうすると言うので頼みました。洋式便器を見た途端腹痛は治まり無駄な出費になりました。トレッキング中同じ宿で食事をしたガイドが腹をこわしても私は大丈夫でした。私の胃腸は特別強いのでしょうか。

ロッジ

エヴェレスト街道もアンナプルナも1時間も歩けばロッジがあります。基本的にはベッド2個の個室です。私は1人ですから宿につくと荷物を全て空いたベッドの上にほり出し翌朝パッキング、を繰り返しました。ベッドは長さは充分ですが横幅は少し狭いです。2人で1部屋の場合荷物を広げる場所が無く苦労するかもしれません。マットがありますから寝心地はそこそこ良かったです。

エヴェレスト街道は最後まで電気がありましたがアンナプルナは途中から電気がありません。ダイニングは明かりを付けてくれますが部屋は真っ暗でした。勿論部屋には暖房はありません。エヴェレスト街道ではダイニングのストーブで薪や乾燥させたヤクの糞を焚

いてくれます。ただ5時か5時半頃にやつと火を入れてくれますから其れまでは寒いです。寒さ対策に宿に着くと直ぐ重ね着をしダウンを着込みました。一番こたえたのは足元の寒さでした。靴下を2枚履いても足先が冷たく苦労しました。宿泊者が少ないロッジでは朝ストーブを焚いてくれない宿もありました。そんな時や夕方ストーブに火が入る前、キッチンに入り込み暖を取りました。ガイド達はキッチンで酒を飲んだりしていましたが宿泊者でキッチンでへたり込んでるのは私だけでした。私が1人だから出来たのかも。それでも寒いときはシュラフにもぐり込みました。シュラフは夏用でも問題無しです。宿で毛布等を貸してくれます。私は標高が高くなり寒さが厳しい時だけ借りました。アンナプルナではストーブは無くテーブルの周りに毛布をたらし中で石油ストーブを焚いてくれました。但し有料、50R-100R。

ロッジではミネラルウォーター、トイレの紙、タバコ、クッキー等が買えます。勿論標高が高くなるほど値段が上がります。カトマンズで15Rで買える水が50R-100R、最後は200Rになりました。

カリガンドキ

飯田 進 , 06/12/13

塩さんよ。

以前ポカラに着いてホテルのベッドに寝ころんで疲れを取っているとき、ふと窓外を見ると、お空にチカチカと光るもののが見えました。飛行機かいなとよく見ると、それがマチャプチャレでした。明くる朝5時に起きて、サラシコットの丘へ行って、セティ川から見事に天空にせり上がっているマチャプチャレをそこへ覆い被さっている、アンナプルナサウスを堪能したのを思い出しました。

ところで、カリガンドキ川は世界一の峡谷（川底から天辺までの高さ）と聞いております。小生二番目のラキオ

ト峡谷へ行って来ましたが、それはそれは恐ろしい谷でした。世界一となるとどんな谷か、興味あります。写真あつたら見せてくませんか。

私もカリガンドキを見たいとプーンヒルに上がった後ゴレパニからタトパニに下り温泉に浸かりカリガンドキをベニまで下る計画でした。ところがガイドが「奥さんの里がティルケドゥンガにあり奥さんの母親が病気なので寄りたいと」言う事でナヤブルに下りました。そんな訳でカリガンドキは見ていません。

カンさんが JOMSON からカリガンドキに沿って KAGBENI まで歩き MUKTINATH へ行かれています。

何時かネパール再訪できるのならムスタンに行きたいものだと考えていますがムスタンは1人では許可されないとの事です。その時はアンナプルナを東から回り途中から TILicho LAKE へ上がり JOMSOM にぬけカリガンドキを下るルートを歩くのも面白いのではと思っています。

トレッキングの食事

毎日5時頃にガイドが今晚は何時ごろ、何を食べますか、明日の朝はと聞いてくる。これが頭痛の種。メニューは毎日ほぼ同じ内容、代わり映えしない。値段だけが標高とともに高くなってくるだけ。食欲が沸く物が無い。ダルバート、焼き飯、焼きソバ、カレー、モモ、スープ、ピザ、スパゲティー等々。モモもカトマンズで食べるような美味しいものには当りませんでした。エヴェレスト街道ではシェルパシチューがあまあま食ましたがアンナプルナではありませんでした。シチューにプレーンライスを注文してシチューの中にご飯を混ぜ込んで食べたりしました。シチューが無い時はチキンスープにライス。圧力釜を使っているのですがソバが生煮えの感じ、米

も勿論パラパラ。いざれにしても飯の良し悪しはロッジの女将さんの腕次第、今日美味かったものも明日のロッジではどうか分からぬ。ダルバートも美味しいロッジと食べるのがしんどいロッジ、まるで当て物、美味しい飯に当った時はヤッタと言う感じ。朝はブラックティーにチャパティーを良く食べました。トーストもありましたがあまり美味く無かったです。卵は朝に夜によく食べました、ゆで卵、目玉焼き、プレーンオムレツ。昼はヌードルスープをよく食べました、何も具の無いインスタントラーメンです。勿論夜と同じメニューですから焼き飯/焼きソバも食いますが夜の為に他のメニューを考え時には湯搔いたジャガイモ、これはまあまあ食えます。ヨーロッパの人達はよく食べていました。彼ら曰く此処のポテトは形は小さいがミネラル一杯で美味しい。

ともかくこんな物だと割り切れば耐えられます。私は体調崩したら食べようと日本食、温めるだけのお粥、カップラーメン、ふりかけ等をもって行きましたが結局何も食べませんでした。

水

ネパールではミネラルウォーターを買って飲んでいました。カトマンズで15R、高所では200Rでした。歯を磨く時も最初は口を漱ぐのにミネラル使っていましたが途中からは蛇口の水を使いました。アンナプルナでは公害(ゴミ)の問題で途中からミネラルを売っていました。寝る前水筒に沸騰したお湯を貰い湯たんぽとしてシュラフの足元に置いて寝ました。これはなかなか良かったです。あくる日はその湯冷ましの水を飲みました。腹を壊す事も無く問題無し。西洋人たちは水に何やら錠剤を放り込み飲んでいました。この錠剤はカトマンズで買えるらしいのですがどのていど信頼できるのかどなたか教えてください。

休憩のたびにお茶(ブラックティーかミルクティー)を飲み宿に着くとポットでお茶を貰いひたすら水分補給につとめました。コーヒー、ホットレモン、ココア、コーラ、ビールと飲み物は何でも揃っています。時々このブラックティーは色付いてるだけやんと言うものもありました。コーヒーも美味しいものはカトマンズでもほとんどありませんでした。

行く前から水と油に気を付けようとかなり神経質になっていましたが問題なく旅を終えました。

禁酒禁煙

トレッキングに行くに当り色々アドバイスを頂きましたがその中に1ヶ月前から禁酒禁煙と言うのがありました。結局こちらに来るまで実行できずルクラへ飛ぶ日にタバコは吸うまいと決めたのですがカトマンズの空港で朝の6時から3時間待たされ朝食、やっぱり一服、歩き始めて宿に着き晩飯、一服、何と意思の弱い事か。それでもこれを最後に禁酒禁煙。外国人は晩飯にビールやワインを飲んでるやつがいる。ガイドやポーターも宿に着くと何処かへ消えて毎日飲んでいる。チクショウ！酒が飲みたい！タバコは吸いたいとあまり思いませんでしたが酒は飲みたかったです。ただゴキョウに上がり宿に戻り休んでいるとヘリが飛んできて女性が一人レスキューされました。昨晩飲み過ぎた人の事。確かに前日4,700mのレストランで飲んでるグループを見ています。これ以外でもしょっちゅうヘリが飛んでいましたがガイドはレスキューのヘリだと言っていました。やはり禁酒禁煙が正解なのでしょうか？

下りてきてルクラの手前パクデインで泊まった時、キッチンを覗くとガイドが何やらストローで飲んでいる、何だと聞くと、飲んでみるかと言うので頬むと、プラスチックの容器に入れた怪しげな物にお湯を注ぎしばらく待てとの事。ブクブクといってる感じ。OKが出たので飲むとこれが美味しい。トウンバといって発酵した固形のチ

ヤンにお湯を注いだ物です。9日ぶりの酒は実によく回りました。ルクラでガイドとポーターとビールとロクシーで乾杯。それからは元の飲んだくれの毎日に逆戻り。今は150 ルピーの現地のウイスキーを飲んでます。実に安い。いくらでも気兼ねなく飲める。

すぐ次のトレッキング出発するのにこんな事で良いのでしょうか?

ネパールの食事（都市滞在）

毎日の食事はこんな感じです。

昨日の昼飯は現地人に混じりモモ（こちらのギョウザ）を二皿、一皿 20R（1ルピー約 1.7 円）。夜は 150R でカツカレー、サラダ/コーヒー付、ご飯お代わり自由を食いました。これは旅行者向けレストランです。

今朝は夜 9 時から半額になるパン屋を見つけ昨晚買ったパンを食いました。3 個で 40R。

飲み物はコイルヒーターとでも言うのでしょうか、電気のコンセントに差込、コップに水を入れ突っ込むと 1 分ぐらいで沸騰しますから日本から持ち込んだ粉末のココアやコーヒーをホットで飲んでます。

夜は水割りを飲んでます。水は 1 リッター 20R、現地ウイスキーはハーフボトル 150R。こんな生活です。

ようやく次のアンナプルナ BC のトレッキングを旅行会社と契約しました。13 日出発で 12 泊 13 日で値段はすべて込みで US \$ 650。通常 9 日間ぐらいの行程を 13 日かけますから天気悪ければ天気待ちできます。しっかりと山を見てきます。

雪見会 御世話になりました

柏 敏明（昭41 経）

飯田先輩はじめ雪見会参加の皆様、色々と御世話になり有難うございました。近来まれなる好天に恵まれたなか、スキーを堪能して、昨日、帰宅しました。

1月19日、関学の小西氏、ドン吉君と大阪発。同じく関学の青木氏や雨さん、塩崎君、石原君達と途中、合流して夕刻に前田館着。梅池祭りの割引リフト券を利用して、一滑りを済ませていた山本（薰）氏、鍋を囲んで出来上がっていったバブさん、大閑さん、飯田さん。関学の岡氏、武田会長。仕事を終え夜遅く到着された賀茶さんや、山本（眞）君、今年は15名が雪見会に参加しました。

20日。一年のプランクを取り戻すべく梅池ス

キー学校の初級コースに入校、午前の基礎、午後の応用編を受ける。

小西氏、青木氏、山本（薰）氏、ドン吉君は、白馬乗鞍にアタック。素晴らしいシュプールは、後日送られてくるであろう写真をご参照下さい。古希を越えられたのに、馬の背のあの急斜面を何回滑ったと報告されあう先輩を見て、恐ろしささえ感じました。夜は恒例の大宴会。

4~50 年経過して、今だから話せる秘話が次々と飛び出し、驚きの連続。やはり同じ人間だったと安心した話もありました。

21日、名誉の前走指名を受け、梅の森最上部をスタート、皆さんが学校の成果はと興味津々、

注目される中、格好などは何処へやら、必死の思いで滑り降りました。その後、雨宮スクールに入校、みっちりと指導をして頂きました。例年の雪見会のハプニングを今年も起こしながら、仕事や都合で順次抜けて帰宅されていきました。

打上げ会では関学と甲南の酒乱文化比較論や、折から放映されているカワセミ、ヤマセミの生態を教材に生態写真の難しさの講義を受けるなど、前日とは違った盛り上がりでした。

22日、遠見47スキー場で白馬連峰、五龍、鹿島を間近に見ながら滑降を楽しんで解散。小西氏、ドン吉君、小生の3人は蓼科の湯で汗を流したあと、八が岳蓼科ビレッジにある青木氏の別荘にお邪魔し、青木ご夫婦の心の籠もった歓待を受けました。ご近所の井上ご夫妻も参加され、ワインにあつた少し高尚な話題で盛り上がりました。

23日 門脇ペンションの門脇氏のガイドで青木夫妻、井上夫妻、そして我々の7人は富士見から入笠山へスキーハイクを楽しみました。連日の好天、富士山もバッチリと見えました。井上夫人はドン吉君のあとをスイスイ追いかける足前。小生はクラストした急斜面を足をくませながら滑り降ります。

望岳の湯に入って、再び青木氏の別荘にお邪魔する。

24日、車山からプラッシュ鷹山へ縦走する小西君、ドン吉君を車で送って、プラッシュ鷹山で両夫妻と最後のスキーを楽しむ。昼頃、二人と合流。少しバテ気味なので、怪我をしないように慎重に滑る。今日は縄文の湯に入り、昨年お邪魔した門脇ペンションに着く。八が岳は温泉が多く、日替わりで温泉を楽しめました。

25日、快晴でしたが、スキーを堪能したので、門脇氏にみぞ蔵を案内して貰って、一路帰途へ。快晴続き、雪質最高、人は少なく、これぞ定年後の楽しみ方といった、素晴らしい一週間でした。

御世話になりました皆様に、改めて御礼申し上げます。有難うございました。

ありがとうございました

関学 小西啓右 '07/01/26

飯田様 甲南の元気なシニアの皆様、大変お世話になりありがとうございました。

異常な好天続きで浪川氏に引っ張られて休みなく行動したため疲れ果てて帰っていました。昨年手も足もでなかった天狗原も何度か回転でき、ゲレンデでもうまくなつたとお褒めの言葉を頂き喜んでおります。またよろしくお願ひいたします。

関学山岳会 青木宏安 '07/01/27

妙高、梅池と色々有り難う御座いました。今後も宜しくお願い致します。壱万円札を落とさないように、頑張ります。

大阪ぽっぽ会 山本 薫 '07/01/23

今年も勝手に参加させて頂いたのに、色々ご配慮頂き有難うございました。お天氣にも恵まれ楽しい3日間でした。それでも皆さんお元気ですね、今年は再認識いたしました。



バテバテの鹿島槍ヶ岳

川野幸彦（昭56理）

2006年4月29日—4月30日の記録

先程、鹿島槍ヶ岳から帰ってきました。二日間で16時間行動。バテバテで疲れました。以下、報告です。

4/29（土）晴れ

扇沢7:40⇒爺ヶ岳南峰13:10⇒冷池山荘15:10（泊）

登山口にクルマを停め、柏原新道を辿った。下部はほぼ夏道通りで途中から尾根沿いの冬ルートになった。樹林帯から雪稜になりバテバテで爺ヶ岳南峰。ここまで先行パーティのトレースがあり助かった。途中、スキーやボードを担いだ兄ちゃんに抜かれた。彼らは、爺ヶ岳から信州側に滑って行った。凄い！！！爺ヶ岳中央峰から夏道をトラバース。凍っていて緊張した。落ちたら黒部側に一直線。止まらない。アイゼンを付け慎重に行った。途中から樹林帶に変わりやつとこさ冷池山荘に着いた。それにしても寒い山小屋だ。部屋の中にいても吐く息が白かった。ここから鹿島を眺めると薮内さんの事と、大学3年の3月の後立縦走が思い出された。また、剣岳が遠くに見えた。展望は良い。小屋は新しくて快適。

4/30（日）曇り

冷池山荘7:10⇒鹿島槍ヶ岳南峰9:00⇒冷池山荘10:30／11:00⇒爺ヶ岳南峰
13:10⇒登山口15:30

山荘からアイゼンを利かして行く。信州側に大きな雪庇が出ている。ガスで視界は50m位。風も強い。布引岳を越えやつとこさ南峰に到着。頂上直下に30m位の雪壁があるくらいで問題なかった。頂上は相変わらず強い風とガスで最悪。黒部側に向かって「薮内さん！！！」と大

声で何度も叫び黙祷した。21年前が思い出された。冷池に戻りバテバテで爺ヶ岳を越え登山口に戻った。南尾根の下部はボコボコ。雪に足を取られた。また稜線では風が強く参った。疲れた！

①爺ヶ岳南尾根～鹿島槍ヶ岳のルート説明

爺ヶ岳南尾根は冬期（積雪期）のみのルートで、夏は尾根の南側にトラバース気味に付けられた柏原新道を辿ります。柏原新道は種池を経由しますが、このルートは直接爺ヶ岳南峰に突き上げています。従って、取り付きからひたすらの登りとなります。この尾根はJP（ジャンクションピーク）を境に下部と上部に分けられます。下部が樹林帶の藪尾根。3時間ほど登ると右から延びている支尾根と合流します。ここにJPと呼ばれるコブがあります。ここまで樹林帶ですが、この先是右に雪庇の出た雪稜となります。最初はなだらかな雪稜ですが、その後、爺ヶ岳南峰頂上までは広い尾根の急登となります。ルートは左のガラ場の踏み跡か、右の雪稜です。私は登り易い雪稜を登りました。なお、下部には赤布や“標識”が要所にあり迷うことはありません。南峰から中央峰へはリッジ通し。北峰は黒部側から夏道をトラバースします。26年前の3月に縦走したときは爺ヶ岳の3つのピークは全て黒部側を巻きました。しかし今回このトラバースは急で結構緊張しました。特に斜めの下りは腰が引け最悪。アイゼンワーク不足です。

“大学生の頃は凄い技術を持っていた。”と改めて知ることが出来ました。赤岩尾根の頭までが悪いですが、その後は冷池までしんどいだけで問題なしです。冷池から鹿島槍までは布引岳の急な登りが少ししんどいだけです。悪い所は頂上直下の20m程。やや急です。下りは注意し

たいです。

②動物

雷鳥のつがいを爺ヶ岳中央峰の直下で見ました。行きも帰りも見かけましたので直ぐ近くに巣があるのかも知れません。熊は爺ヶ岳下部で“足跡があった。”と他の登山者が言っていました。熊は3月頃に冬眠が終わるそうです。

③その他

相変わらず中高年登山者が多いです。私もそ

の一昧ですが。帰りにガイドに連れられた大パーティとすれ違いました。動きのぎこちない無い方が結構いました。「ガイドも大変だな。」と思いました。一方、相変わらずアルパインクライマーは少なくて見たのは1パーティのみでした。

薬師岳 薬師沢右俣 黒部川 山スキー

山本 恵 昭 (昭56理)

2006年5月3日 - 5月6日

メンバー 大森雅宏 (S53年卒)
山本恵昭 (S56年卒)

薬師岳から金作谷を滑り降りて、黒部川を横断、薬師見平から赤牛岳へ登って、雲の平へ、という5月の山の魅力を詰込んだ計画で出発。しかし、時間的に赤牛は諦め、黒部川にデンして帰ってきました。

5月3日、車ではいる予定の飛越トンネルへの林道が雪のため和佐府で通行止め。どうせ歩くなら帰りにとことん滑れる神岡新道をと、打保へ。この林道も落石と雪で通行不能、村の道端に駐車し7:30発。林道から谷をつめて急な小尾根を登り、少し下ると広々した気持ちのよい雪原1534mに出る11:30。樹林帯を登ると1842mピークで飛越トンネルからのトレースと合流13:00。寺地山はトラバースして、北ノ俣避難小屋へ15:45。本日は6名利用。狭いが、トイレもあって快適。夕食は途中で

見つけた天然エノキダケ雑炊。

5月4日、避難小屋6:00発。北の俣への斜面を2300mまで登り、太郎山手前へトラバース。雪もしまっており、地形を読みながら森に谷にルートを取り、結構楽しい。太郎平小屋9:50着。薬師峠からひたすら登って薬師岳山頂14:30。快晴の中、360度の展望。足元には金作カールとそれに続く金作谷の急斜面が魅惑的。すぐ目の前には薬師見平から赤牛岳の重厚な山並が聳えている。行ってみたい衝動に駆られるが、冷静に考えて時間的に無理と判断し、赤牛岳は諦めた。

ちょっと悔しいが、コース変更。薬師沢右俣を黒部川まで滑り、イワナに遊んでもらうこと。避難小屋15:00から東南尾根に少し下って薬師沢右俣へ。広々した中斜面が延々と続き、豪快な滑降ができた。2350mからは傾斜が落ちるが谷底は広く、周辺の景色を楽しみながらリラックスして滑る。このあたりクマの足跡だらけである。2123m付近から、谷が割れ始め緊張するが、無事左俣出合

～16:00。何度もスノーブリッジを利用しながら薬師沢を下り、最後は右岸の段丘を経て黒部川着17:00。薬師沢小屋より少し上流の明るい雪原でツエルト泊。黒部川の水が美味しい。20～25cmのイワナを8尾釣り上げる。焚き火は出来ないので、ガスで焼いて食べた。



5月5日、早朝からイワナに遊んでもらう。さすがに水温が低いためか食いは悪いが数尾追加。朝からイワナスープ。食べきれない分はペットボトルに入れて持ち帰ることに。食料が減って幾分軽くなったザックが再び重荷に。釣りをする脳と後先考える脳は別みたい。そんなこんなで黒部川8:30発。

一面真白で広々した奥黒部展望台、赤木平へ

11:00 着。昨日滑った薬師沢右俣がよく見える。赤牛がはるか遠い。もう一頑張りで、北ノ俣岳12:40。登り返しを避けて、北ノ俣直ぐ北のコルより急なレンゼを滑り、トラバースして神岡新道へ、あとは広い斜面をひたすら滑り、避難小屋付近13:40。シールをはいて、寺地山周辺の登ったり下ったりがめんどうくさい。1918m付近からシールをはずして歩き、1842mからトレースを外れて、樹林内の快適な滑降。1534m雪原15:50から少し登り、藪の急斜面を木にぶら下がったりしながら、強引に斜めに滑り道に出る。沢の左岸を滑り林道へ17:00。所々、スキーを脱ぐが、もうしばらく林道を滑ることができた。打保谷出合手前からは、ひたすら歩いて、打保へ18:30着。

神岡のガソリンスタンドは7時には閉まるようでガソリン求めて富山へ、風呂に入ってスーパーで買出し、北陸道のサービスエリアで遅い夕食と仮眠。6日朝、渋滞にもあわず帰ってきました。

5連休、しかも例年ない大雪ということで、黒部源流部の2つの重厚な山をスノーブリッジで黒部川横断して繋ぐチャンスでした。しかし、思いがけず入山で手間取り、実行できませんでした。天候に恵まれて、それなりにスキーも自然の恵みも楽しみましたが、体力の低下、軽量化の甘さなど反省点も。ここ数年のうち一番魅力を感じる計画だっただけに残念。この計画を実行できるチャンスは、まためぐって来るでしょうか

甲南山岳部のホームページ

<http://homepage2.nifty.com/konan-alpin/>

何やら長いし面倒な、と言う方は「甲南山岳部」「甲南大学山岳部」で検索して下さい。

— 山行とつどい —

海老名大関邸花見会

越田和男

'06/04/09

4月8日の参加者は伊藤文三、福井実、南井(関学OB)、田村俊介(大阪外大OB)、国見ゆみこ(JA C)、鈴木敬吾(特別会員)、飯田、大関、武田、越田の10名。

85歳の御ふた方の他は、紅一点の国見さんを除いて、70~60台と高齢者の集まりでしたが、昼の2時から夜9時まではじめは野外、寒くなつてからは部屋に入り、元気に飲んで食つて、孫、病気の話、昔話しに偏らず、ひたすら明るい知的会話！！！でした。

有り難いことです。大関大兄に多謝。神戸からの武田会長にも感謝。



日本一低い分水嶺

柏 敏明

'06/04/18

今日、同期の数人で日本一低い分水嶺に行って来ました。

途中、氷上町の清住で急斜面を登つて、カタクリの花の群生を見ました。この細い茎で7~8年堪え忍んで、やつと二葉になって花を咲かせること。可憐な花のたくましい生命力に感心しました。日本一低い分水嶺(?)は丹波篠山の谷中中央分水界という所です。高谷川という小川と言つていゝ小さな川の標高が僅か100mの分岐点から、由良川となって日

本海へ70km、又、加古川となって瀬戸内海へ70km、流れいくそうです。

こんなに簡単に行ける分水嶺はないでしょう。駐車場から50mもあるけば、もう分水嶺です。

水分れ公園の少し散り始めた桜の下で食べた、地元婦人会の手作りの鯖寿司がボリュウムもあり、拾いものでした。

遍路に行ってきました

Kannroku

'06/05/08

遍路旅 愛媛編。

4月27日昨年終了した高知宿毛駅より愛媛40番札所観自在寺に向かつて歩き出す。今回は愛媛最終65番三角寺を交通の便の関係で香川編としてはぶく事に。

徳島“発心の道場”高知“修行の道場”愛媛“菩提の道場”香川“涅槃(ねはん)の道場”と言われているが、菩提どころか修行の道場であった。65歳の歳には勝てず歩き慣れるのに一週間かかった。2回目の遍路で荷物も少しう軽くなったがやはり滑り出しはしんどいものである。64番前神寺迄晴天続きで5月6日にて打ち切り、10日間の遍路旅であった。歩行距離300k、7日から天候荒れるとことで石鎚山への計画も止め松山に戻つて道後温泉に。山と違つて自然より人ととのふれ合いが楽しい。今回も沢山の人達の善意に感謝。

伯耆大山

越田和男

'06/05/14

大山山麓の快適なログハウス塩崎山荘に3泊、東京から大関シェフの同行を得て、まことに結構な旅が出来ました。初日は岡山から鵜木君、2日目は倉吉から八島君も顔を出してくれて旧交を温める機会にも恵まれました。

壊滅的な天気予報が見事にはずれ、3日目、快晴の下念願の大山のも登頂出来、筋肉痛の太ももを引きずりながらも、新緑と残雪の山を楽しんで帰つてきたところです。

先年山本恵昭君がスキーで降りたという北壁の沢を教えられびっくり。良き仲間大関、塩崎、鵜木、八島の諸兄に先づは感謝。

榛名山

越田和男 '06/05/23

山歩きの対象としては、関西の方には関心の薄いところだろうとは思いますが、年をとるとこんな山も結構楽しめ、山歩きを趣味にしていて良かったとしみじみ思つたしだいです。

掃部ヶ岳(かもんがだけ 1,449m)、杏ヶ岳(すもんがたけ 1,292m)など山名にも惹かれました。こんな山でも、平日にも拘らずチラリホラリと熟年パーティが登ってました。

大雪の妙高の春

大関 和夫'06/05/27

大雪のため、屋根が壊れた平井山荘へ平井、大関で行きました。中は、被害無く無事でした。山は、杉野沢スキー場の上は、まだ雪がありました。火打の方は、雪が多そうでした。温泉を楽しみ、酒をたしなみ帰つて来ました。

sigeaki さんへ

kannroku '06/05/31

先日丹波の山に鈴木オトミさん廣瀬ポンさんとで黒頭峰(くろづぼう)三尾山(みつおやま)に行って来ましたが 500mの里山もいいものでした。私の性格にあってるみたいで これから私の山登りかと。

この秋は柏さん等とネパールダウラギリ山郡のトレッキングに行くことになり 又新しい山登りを探してきます。

今回一緒に行けず残念無念 来年は同伴できるようにならんばつてみます。

猫又山

DONNKICHI'06/06/04

今シーズンの滑り納めに大森、山本君に猫又山に連れて行ってもらいました。3日南又発電所 6:00～猫又山頂上 12:00 去年の毛勝岳に比べると、傾斜も距離も短いのにばてばで頂上着。久しぶりに緊張し

た急斜面を今シーズン最後の快適な滑り納めが出来ました。



猫又山 山本恵昭 '06/06/04

シーズン最終山スキーは、昨年の毛勝山に続いて、猫又山へ行つきました。

6月3日、今年の大雪で通行を心配していた南又谷林道は、発電所まで何とか車ではいることが出来た。準備をして6:00発。所々雪の残る林道を標高1050m付近までたどり、谷に降りた7:30。この付近は所々雪割れしているが、釜谷出合下から上部は雪が続いている。猫又谷は不思議なくらい真直ぐ突き上げている。スキーは担ぎ、アイゼンを履いてひたすら登る。二俣9:00着、右股をつめる。毛勝谷ほどではないが、上部は次第に傾斜を増し一歩一歩が重い。稜線の2190m付近に登りつめると11:30、目の前に剣岳が大きく聳え、疲れた顔も思わずにっこり、ゆっくり休憩。大日～立山川もはっきり見える。スキーをデポし、少し藪を漕いで東面の雪面をつなぎ、山頂へ12:30。昨年の毛勝山が直ぐ前に、また、朝日から白馬、五竜、鹿島槍、爺といった後立山の山々が遠くに続いている。デポ地点に戻り、滑降準備をしてスタート13:30。所々転がっている石を避けながらあつという間に下るが、下部はデブリの残骸で乱れていて疲れる。林道手前14:30でスキーを洗い、後はひたすら林道歩き。コゴミとタラノメを少々手に、駐車場所15:30着。

いったん、魚津の大谷温泉という名の家族風呂?で汗を流した。再び片貝川へ戻って、川沿いの草地の広場でチゲ鍋宴会。薄暗くなる頃には、東屋で寝袋に入って熟睡。

4日、優雅に朝食を食べて、出発。昼過ぎ神戸着。

今回、林道の走行で、タイヤサイドにダメージが。特に無理な運転をしたつもりはなかったのですが、一步間違えればバースト。教訓「ボーディングすると高くつく。」

猫又山 大森雅宏 '06/06/04

会計山本をリーダーに、ナミカワさんと大森で猫又山に行ってきました。天気は快晴、スキーが上手だったら申し分ないのでしょうが。

車デポから林道を1時間あまり歩いて雪の上へ。猫又谷は大きく開けてコルまでどんどん伸びています。シールは使わずスキーは担いで。1,700m足らずまで担ぎましたが、寝不足で調子が悪く、リーダーに、「あかんわ、今日もバテた。ここで待つてよかと思う」と交渉。「コルまで行ってみませんか、剣もきれいに見えるし、スキーはデポしたら」とは山本リーダーのアドバイス。

出来の悪いのを上手に扱うなあ、と感心しながら気を奮い立たせてようやくコルへ。アドバイスどおり見事な眺めでした。来てよかったです。

荷物はデポして空身でピークへ。30年ぶりくらいです。大明神から毛勝パーティと猫又パーティと2年生の冬山でした。テレテレ歩いて時間がかかっただけのアタック(わかんを履いていたのでアタックというシャープな感じではなかったですが)と思っていましたが、北からの稜線は結構高低差もあります。記憶はあてになりません。去年も立山川で同じことを思いました。

くだりはナミカワさんと山本リーダーはスキーできつさと。私はスキーデポまで歩いて。あの傾斜では歩くほうがきっと早かったと思います。デポからは私もスキーで、待ってくれるメンバーに悪いなーと思いながら後を追って。

なんやかんやでこの日も10時間行動。しんどかったけれどいい天気でいい景色でした。

蝶ヶ岳

塩崎将美 '06/06/05

残雪の穂高を見ようと蝶に行って来ました。

6月1日

家を午前2時半に出発、豊科経由三股へ。名神の工事で予定以上に時間がかかる。2,000mぐらいから雪が出てくる。蝶沢のトラバースからは稜線まで雪の上。樹林帯で先行者のトレースを辿っていると突然トレイス消滅、後戻り。2回同じ失敗、後は赤い目印が見つかるまで立ち止まりユックリ登る。頂上まで6時間。ヒュッテ泊まり。1泊2食9,000円。同宿者4人。

6月2日

常念経由三俣の予定でしたが雪の多さに(いったん下った後の常念への登りに)恐れをなし来た道を戻る。下り3時間。2日とも槍穂高は見てるもの霞がかかった様にぼんやり。カメラを出す気にもならず。日の入り日の出も雲の中。

6月3日

雨宮、米山、鳥居、越田、二谷の諸先輩と武田会長と合流。奥飛騨の福知山(1,671m)に登山。良く整備された登山道をワイワイガヤガヤと2時間で頂上。ワイン/ビールで乾杯。頂上からは槍から乗鞍まで見渡せ、焼は目の前、錫杖の上に雪を頂く笠。おすすめ出来る山です。

6月4日

先輩達と別れ岐阜県の天蓋山(1,527m)へ、登り1時間半、下り50分。薬師三俣から御岳まで見えるはずが霞で何も見えず、残念。

4日連続の山歩きと帰りは節約モードで高速使用せずの運転で少々疲れました。

新制年寄り会

越田和男 '06/06/09

田邊ガチャさんのお世話で、毎年6月の第一週末に恒例となっている奥飛騨中尾の1泊行は今年も12名が相集いました。

今年も孫や病気の話などに偏らず、武田ユーさんからの現役山岳部の現状報告などに耳を傾けました。

記念写真をアルバム用に塩崎君に送ります。



柏 敏明 '06/07/02

富士山を登りながら森本君の音信が途絶えている事を、カンサンと心配をしていたのですが、帰りのバスの中で、携帯からHPにアクセスし、無事だったことを知り、ホッとしています。森本君の頑張りに敬服です。

と、云うわけで、カンサンと二人で秋に予定しているトレッキングに備え、高度順応と小生の体力テストを目的に富士山ツアーに行ってきました。昭和45年11月に水渡君、浪川君と登って以来の36年振りの富士山でした。バス2台がほぼ満席。その内3割近くが中国やアメリカその他の留学生でした。

30日7時半、難波を出発、京都経由で吉田口5合目に16時頃に着。着替えと夕食を済ませて18時に出発。留学生の強いこと、男も女もワイワイ言いながら登る。こちらはガイドのすぐあとを黙々と登る。懐電を頼りに4時間余り、22時半に8合目の白雲荘着。山開き前日なので、人は少ないと云われながらも蚕棚の幅3mに6人位詰め込まれる。隣の軒がひどく、寝付かれず。(カンサンではありません)

1時30分起床。1回100円の有料トイレを使用して、雨風の中を2時出発。3,500m位から頭痛はしないが少しふらつく感じ。高山病のはりしか。カンサンも4年前に鈴木さん、二谷さんと来られた時程でないが、今回もやはり、ふらつかれたとのこと。

カンサンに相当遅れて、バテバテで4時45分に頂上小屋到着。風雨強く小屋に逃げ込む。準備不足の連中は、寒い、寒いと震え上がっていた。三角点はあきらめ、朝飯を食べ5時45分に点呼を終えて出発。8合目位から晴れだした須走下山道を23回休んで8時45分、5合目駐車場に到着。

少し走ったリゾートホテルで、風呂に入ってバーベキューの昼食。産物屋で桃を買い、大阪に着いたのは、21時でした。

これで、9,800円とは、お値打ちのツアーでした。(通常は1万2~3千円)ただ、しんどかったです。

カンサン、色々と有難うございました。
所で体力テストはどうでしたでしょうか。

妙義山鼻曲山

越田和男 '06/07/13

奥武藏蕨山

越田和男 '06/06/09

梅雨入りの前日、曇天下(頂上付近は霧のなか)でしたが何とか一日降られずに歩いてきました。蕨(わらび)山は標高1,044m、登り2時間強、3時間縦走して降りたところに温泉ありという、まさに現在の小生向きの山でした。

同行は病克服後益々お元気なJAC国学院大山岳部OBの大橋晋さん夫妻。小生より三つ先輩。

林道通行止め

塩崎将美 '06/06/12

高校時代の友人と夜叉ヶ池から三周ヶ岳(1,292m)に登ろうと北陸道を今庄へ、広野ダムまで走ると大雪で林道崩れて通行止め、登山道も橋が壊れたりして登山禁止の看板。地図を眺めると林道歩きは直線距離で4kmぐらい、へたすると5~6km歩かされそう。思案して地元の登山者が現わる。どこか楽しい山は無いかと尋ねると付いて来いとのこと。今庄駅の直ぐそばの鍋倉山(516m)藤倉山(644m)を5時間かけて歩いてきました。登山道にはササユリが数多く咲き頂上には石楠花の花が咲いていました。残念ながら見えるはずの白山は霞の中でした。

頂上で登山者と話すとこの地域の山は今年の大雪でまだ林道通れず登れない山が多くあるとの事でした

富士登山

梅雨時、関東は曇天続きなるも雨降らずの天気。蒸し暑さを承知の上で会社OB仲間と西上州の山に出かけました。

さすがこの時期にこんな山を歩く物好きは皆無で、静かでしたが、妙義の中間道ではアライグマ？や青大将に驚かされたり、蛭にたくさん餌をやつたりでさんざんでした。鼻曲山頂では思いがけず、浅間の右遠方に懐かしの白馬三山、五竜、鹿島の後立山連峰が望めました。

泊りはまさに山中の一軒家、霧積温泉。良かつたです。

八ヶ岳山行

柏 敏明 '06/07/18

7月15日～17日、竹中君、水渡君、小西君、山本さん、森女史、そして小生の6名で八ヶ岳に行ってきました。

初日の山頂駅から北横岳ヒュッテまでは、雨に降られず曇り空のお陰で暑くもなく快適に登れました。山小屋は、中高年約40名位で相変わらず満員。山本さんが、うまく個室を確保してくれていたので、快適に過ごせました。夜は、ストーブを囲んで水渡君のネパール行の話などに花が咲きました。

二日目の横岳～蓼科山は雨風霧にやられましたが、想定内の範囲。お陰で今回の山行で山頂が見えたのはロープウェイから見た蓼科山だけでした。海の記念日前後に日程を組むこのパーティは、どうも毎年雨にやられます。

蓼科山の下りは、がら場の連続で嫌になる程長かったです。いいピッチで皆歩いたつもりだったのですが、標準タイムより遅く、お互い年をとったなど少しがっくりでした。

天気が悪かったかわりに、料理が良かったです。北横岳ヒュッテでは、馬肉のすき焼き。山小屋でのすき焼きも珍しいのに、しかも馬肉。あっさりと甘く、馬かった牛負けです。(おじんギヤグ)

下山後に泊まった小斎の湯での岩魚料理、骨酒も最高。

わりと楽な行程でしたので、雨に降られましたが、その分寒い位で、暫し暑さを忘れての楽しい登山でした。

節々がイタイ

大森雅宏 '06/07/30

播州、小田原川の沢登りに行ってきました。参加は、かんさん柏さん塩崎さんナミカワさん山本君に大森。午前中は薄日のさす天気で、もう少し太陽を期待していたのですが。

入渓地点に車2台で集合。今シーズン初めて沢に入りました。谷のスケールはあまり大きくありませんでしたが、滝つぼは割りに深くえぐっていて、胸まで浸かったり泳いで滝に取り付いたり、わいわい楽しい半日を過ごしました。

9時開始、12時前に黒岩滝下で終了。12時35分車デボに。

福田さん、ご心配の「御老体に鞭打ち過ぎて」、私はメンバーで2番目の若手ですが、帰ってきてから体の節々が痛みます。道具をベランダに広げて、少し昼寝と思ったら夕食までぐっすり寝込んでしまいました。50を過ぎていますので、いたわりながら山を楽しみたいと思います。

塩崎將美 '06/07/31

久しぶりの沢登り、泳ぎあり、シャワークライミングありで大いに楽しみました。
ア一楽しかった。

柏 敏明 '06/07/31

久し振りの遡行、楽しかったです。小田原川は泳げる淵も結構多く、水遊びを堪能しました。甲川の後遺症も若干あったのですが、最後まで付いて行くことが出来ました。皆さんにはいろいろお世話になり有難うございました。

ただ、左目は白内障の手術、右目は網膜剥離の手術で、どうも遠近感が上手く機能せず、皆さんはスイスイと石の上や、川底を上られていくのに、小生は、あっちへフラフラ、こっちへよろよろ、バランスの悪さも極まり、皆さんの5割り増しは歩いたのではないでしょうか。

これも、老体に鞭打ち過ぎの一種ですかね。この時期、水につかって、ア一冷たい。日が陰るとア一寒い。なんと贅沢な遊びでしょう。

ポンさん、皆さん、次回は是非、ご一緒しましょう。



夫々の掲示を楽しんでます

廣瀬健三 '06/07/31

7月21-22-23日と四国の剣山系の高城山他に登りました。

JAC関西支部が継続的に行っている四国分水嶺踏査に参加。

(H14/7月、ガチャさん達と愛知川を遡行した時以来のシュラフ持参行。)

75/6才の会員が数名居られましたが、凄いPOWER、小生も御蔭で”御元気ですね、どんなトレーニングしてます”と言われたりしました。ただし、23日は前日の酒盛りの為か余り元気なし。雨だし途中下山を提案、目出度く？これが採用され助かりました。

もう存分に登ったし、”今日は朝から温泉に入り、一杯やりたいナア”と報徳山岳部OBの宗実二郎氏にささやきましたら、曰く”甲南山岳部の人がそんなこと言ったらあきません、河崎オタマさんに怒られますよ。”と。

8月26/7日、第4回四国踏査行に参加します。(剣山ヒュッテ泊、なので、前回と違い寝具、炊事用食べ物／水 要らず。やや気楽。)

小屋泊まりで仙丈ヶ岳

越田和男 '06/08/04

このところもっぱら低山趣味でしたが、たまには3000m級も登らないかんなどい、不純な動機だが、登りやすそうなところを物色した結果が仙丈です。

それも北沢峠からいつきに登るのではしんどいばかりで楽しめないと想い、途中「馬の背ヒュッテ」な

るところに1泊して雲上滞留時間を長くとり、稜線漫歩を楽しみました。やっぱり3,000mは格別です。

夏山シーズン中の小屋泊まりなど、これまで抵抗ありましたが、そんなこと言ってられぬので、近年の改善を期待して、先ずは試しというわけです。結果、100人収容のところに62名の客、それでも一人畳一畳なく、とてもくつろげない。客のマナーが良いので何とか我慢出来たけれど、100人来たらどういうことになるのか。難儀なことです。

頂上近くの立派な村営の「仙丈小屋」で聞いてみたら、昨夜の客は26人でがら空きだったとのこと。この小屋はものの本では自炊客のみとなっているけど、実際は食事付きOK。民業圧迫といわれるのを避けてのことだそうだ。「電話すれば良かったのに、今度は是非どうぞ」と。

久しぶりの剣

山本 恵昭 '06/08/06

31日から、富山の文科省登山研修所に行って、今日帰ってきました。プロのガイドや山雑誌に出てくるような講師に説明を受けて、いい刺激になりました。

2日に室堂から剣沢へ入り、3日長次郎谷をつめてビバーク、4日山頂経由で剣沢へ戻りました。久しぶりに見る剣は、以前より大きく高く見えました。

長次郎谷右又の上部は雪が多すぎてシュルンドが大きく、うちの班以外は諦めてしましましたが、なんとか3時間ほどかけて通過し、池ノ谷のコルのすぐ南の岩峰の上でビバーク。

快晴の中、360度の展望。雲海に包まれた夕焼けの北方稜線、満天の星と20個ほどの流れ星、真っ黒が藍色へ白んで、さらにオレンジ色に変化する日の出前のひと時。最高の時間をごしました。

チロル地方

福田信三 '06/08/18

チロル地方のゼーフェルドで滞在していました。チロル地方の最大の町はインスブルックで、オリンピック2回開催地でも知られています

このあたりは、スイスが混み過ぎ、物価高のおり、それらを避けるスイス人に人気があります。おかしな世情です。確かに物価も安く、60歳以上のシニア扱

いがあります。この優遇策、ユーロ圏外の外人には意外と厳しいものです。

位置は、オーストリア西部の細くなったところで、ドイツ、イタリアも車で数時間の距離で、この時期、イタリア人家族が目立ちます。ドイツ語よりも多く聞こえます。

当初の予想と反し、低温で早朝は5度を切り降雪を見る山もありました。ほぼ2,000から3,000m未満の山波が連なり、ちょうどアルプスの東端の位置となります。

ミネラルウォータ 1本持って、ぶらぶらトレッキングを楽しみました。コルの小屋には立派なレストランがあり、ゆっくりビールを飲んで休憩。これが楽しみです。

くやしいっー 田邊 '06/08/22

誰や、おれの第二のふるさとを荒らすやつは! なんで福田にできておれにはでけへんのや。くやしいっー。

チロルわしも行く 越田和男 '06/08/23

ガチャさんすんません。

来月、仙吉らとスロヴェニアのハイタトラの麓を歩いたあと、チロルへまわる予定です。今度はハイリゲンブルートとマイヤーホーフェンに各3泊で、ガチャさんの昔歩いたグロスグロックナーの氷河を見てきます。

多忙と暑さのせい 田邊 '06/08/25

コッシンおまえもかつ!

てなことになるのでしょうか、これは超多忙と暑さのせいであついらいらと、と言うことでしょう。併せて福田君にも、お許しを。

数ヶ月かけてでもかつて青春時代に生活したオーストリーの総てを見てみたい、というのが小生の年来の夢なんです。だから指をくわえて見ている、という小生の僻みです。

インターハイ 50

大関 和夫'06/08/27

50年前の高校総体登山に参加。

神戸先生のお世話で、奈良県での祝賀会に行って来ました。190名の大宴会でした。

第1回選手は13名参加。

今年の大会は、選手役員で、500名も、大普賢岳を主に登山。こんな山もあるんですね。

楽しく拝見します

廣瀬健三 '06/08/28

諸先輩、諸兄の掲示を楽しんでます。盛りたくさんですね。

ガチャさん、実業の世界でのご奮闘、何かとご苦労の多い事と拝察します。先だってから、報徳OBの宗實さんから”田邊賀茶さんどうされてます?”との事です。原欣子さんが今年3月、おなくなりになつたそうです。ここに謹んで御冥福を祈りたく存じます。

小生、9月30日～10月9日まで「マナスル三山展望トレッキング」に参加する事にしました。はじめてのかの地のトレッキング、何かと教えて欲しい訳です。

カンロク、柏兄も参加可能ならええけどナア、今ごろ無理やね。人数少ないようです。

参加は、重廣恒夫氏、他JAC関西支部の人4名、あとJAC以外の人、2名。

(アルパインツアーサービスKK企画 288,000円)

カトマンズで西浜君に会えるかな。

森本君、シリヤに入った?

秋近し?

塩崎將美 '06/08/31

六甲を歩いてきました。

家から榎谷を登り穂高湖へ、徳川道を辿り森林植物園でビールで乾杯。小部峠へ。

今年はよく六甲を歩いてるのですが暑さで閉口してました。しかし今日は木陰で吹く風が心地よく季節が変わりつつあるのを感じました。

暑さも今少し、皆さんもう少しの辛抱です。

歩いた後、温泉に入ってきました。

有馬街道の小部峠のすぐ南に”すずらんの湯”と言うのが出来てます。大人800円。掛け流しの温泉です。色々な露天風呂があり楽しんできました。

蛭（ヒル）

川野 幸彦 '06/09/04

週末に千葉谷（兵庫県 明延）に行ってきました。参りました。蛭が大量に発生していて9ヶ所も刺されました。記憶では7匹を捕まえましたが、知らぬ間に刺されていたようです。でも、久しぶりの沢登りは楽しかったです。塩崎さん、大森さん、山本少年、色々とお世話になりましたがどうございました。今年は各地で蛭が大量に発生している様です。皆さんも沢へ入られる時は注意して下さい。今日は筋肉痛で苦しんでいます。日頃の運動不足のせいですね。

蛭の続き 大森雅宏 '06/09/05

沢登りに行って、書き込みの題が「蛭」と言うのもナンですが、私は 8 箇所でした。吸うだけ吸ってあちらさんから離れてくれたほうが出血が少ないような気がしますが、どうでしょう。ご存知の方おいでですか。

ところで沢登り、面白かったです。地図から想像できないような谷でした。

ヒル対策 山本恵昭 '06/09/06

明延の千葉渓谷は、シャワークライムあり20mほどの大滝ありで、なかなか変化に富んだよい谷でした。ただヒルがいっぱいいて、もう少し涼しくなってからの方が楽しめたかもしれません。最近、シカが増えた結果、シカの蹄の間に張り付いてヒルの分布も広がっているそうです。ヒルには、虫除けローション(20数年前のアラスカ新婚旅行の時の残り物)が、抜群の効果がありました。足首はもちろん、手、首、腹、背中と塗りまくった結果、私は被害0でした。

ただ、ローションのついた手のひらにヒルを乗せると、のた打ち回ってすぐに死んでしまうにはびっくりしました。あまりにすごいので、成分のディートをネットで検索すると、神経障害の副作用が報告されているそうです。日本製の薄いものは大丈夫なのかもしれません、少々血を吸われてもあまり使いすぎない方が良いのかも知れません。

写真のUP 塩崎将美 '06/09/06

千葉渓谷の写真をアルバムにUPしました。ヒルに悩まされましたが楽しい遡行でした。何時もの事ながら年寄りを引っ張ってくれた若手の皆さん有難う。



様変わりの比良山

kannroku '06/09/07

今年初めて比良山に行ってきました。以前の比良スキーキー場は跡形もなく八雲ヶ原にあった小屋も完全に撤去され自然回帰の工事をしておりました。比良山頂駅・比良ロッジも撤去中でした。3年もすれば完全に面影無くなっていることでしょう。自然復帰も大変だと思います。平日とは言え全山縦走してきましたが4名の人にお会いただけでした。静かな山になったものです。

藤木祭

廣瀬健三 '06/09/24

これからロックガーデンに行き、第十八回藤木祭に参加します。(天気良し、こないだ奮発して買った新品の山靴履いて。)

昨年は南里先生と出会いました。

宜しくとのことです

柏 敏明 '06/09/30

賀茶さん。遡行の打ち合わせ、楽しそうですね。小生も秋の遡行に連れて行って貰おうとウェットスーツやハーネスを購入していたのですが、都合が悪く

なり残念です。

先日、ある会合で宗實二郎という方にお会いしました。甲南の方ですか、田邊さんはお元気ですかと聞かれました。

お話を聞くと、戦後、24年3月に岳連が北鎌尾根を登った時、川崎さん達と一緒にさせて貰い、山登りを始めるきっかけにさせて貰いましたとの事。

又、26年の12月には甲南の合宿に参加させて貰い、賀茶さんや米山さん達と遠見尾根に行った事がありましたとの事。色々と話させて頂いていると、74歳で今年もヒマラヤへ行かれる由。会合が終わったら、白山に登ってきますと云われていました。

奥様も35年にデオ・ティバに登られており、ガネッシュヒマールの事もよくご存知でした。田邊さんに宜しくお伝え下さいとの事でした。住所、電話番号をお聞きしていますので、メールでお送りします。

帰宅して、75周年記念号の年表を見ると旧制甲南高校山岳部最後の活動として北鎌尾根が、新制高校山岳部第1回雪中露営合宿として五龍遠見尾根が記録されていました。その中に／宗実(報徳)とお名前がのっていました。

荒城川の沢登り

塩崎將美 '06/09/25

今のところ参加者は田邊、大森、山本恵昭、塩崎の4名。

我々3人は6日夜神戸を発ち7日に何処かの谷で遊んでから現地へ行きます。

荒城川沿いの林道を車が行けるだけ進み、林道横でキャンプしたいと思います。キャンプ地には4時か遅くとも5時には着く予定です。

アルバムのUP

大森雅宏 '06/10/14

駒王前夜祭の白水谷沢登り、写真を UP します。

生憎の雨模様でしたが、暑い頃に行けば楽しさ倍増間違いなしです。



北海道の秋

大関 和夫 '06/10/17

中学の時に、山登りを教えてくれた先生と同級生と定山渓温泉から豊平峡へ、84才の先生と68才の生徒15人で、紅葉の山を歩いてきました。山も随分永くやっているものです。山は、よいものです。70才の再会を期して、故郷の小樽を旅しています。

ネパール

廣瀬健三 '06/10/18

飯田兄、貴兄 コッシン夫妻 センキチ 大関がカトマンズに行ったのは 何時だった?

小生がガネッシュ関連で行ったのは、1964年(S39年)。

今回町中へ出ましたが、立ち寄ったのは御寺近辺だけで、あんまり変わっていない感じ。御寺の写真是たいした事ありませんのであと 何か面白そうな写真探します。同行の方がメールで送って呉れてますが、この転送の仕方わからず。(今回、塩崎兄に写真その物を送った次第。)

無名峰、現地で説明を受けた気がします。当時のメモ TRACE してみます。

PS:カトマンズの飛行場が随分良く成ってました。40年前はのっぱらと掘建て小屋みたいでした。(無論プロペラ機)

現在の飛行場ターミナルビルは竹中工務店の施工の由、ついで乍ら先月28日に OPEN のバシコク

のそれも竹中ですね。これはASIAの中でNO1の規模、成田の数倍。馬鹿でかく、6時間余りのTRANSITの間歩き回り、御蔭で腹ペコ、BEERとタイの名物、トムヤンクンが殊の外美味かったです。

ネパール 飯田進 '06/10/19

小生 行ったのは1994年4月末です。

山嶽寮49号にその時の駄文載ってます。10年一昔、時のたつのは早いですね。場末の映画館のような空港ビルが印象に残っています。



ネパールを見てきます

管理人 '06/10/23

明日、45日オーブンのチケットでカトマンズに飛びます。一人旅ですから気ままにのんびり山を眺めてみたいと思ってます。帰国は一応11月末を予定していますが高山病にやられたりホームシックで10日で逃げ帰ってくるかもしれません。

—塩崎さんのトレッキングあれこれ別稿「ネパールトレッキング事情」に掲載しています。(編集) —

ハイ・タトラ(スロヴァキア)

越田和男 '06/10/23

先月、平井吉夫の発案でハイ・タトラのトレッキングに行ってきました。ハイ・タトラ山脈は欧州アルプスの最東端とも、カルパチア山脈の一部ともいえる、ポーランド・スロヴァキア国境を東西に走る2,500m級の山並みです。

その南側の中腹にタトラ街道と呼ばれる山岳古道があり、今回はその一部を小屋泊まり四泊五日で歩いてきました。魅力的な岩峰群があり、もう少し若い時にいけば快適な岩登りが楽しめたことでしょう。日本ではあまり知られてませんが、地元では人気の山々で、ハイカーからクライマーまで、老若男女が楽しんでいました。

山道もよく整備され、社会主義時代に建てられた山小屋は実に立派で、食事もよく、金持ち国日本の山小屋のみじめさと比べると、どうも生活の基準が違うようです。ただ、チェック・インの度にパスポートを提出させられるのも社会主義時代の後遺症でしょうか。

鍋倉山

山本眞博 '06/11/06

3日、井上の幼馴染の吉岡さんと、スキーの常宿「中屋敷」の裏の最高峰「鍋倉山(1,288m)」に登ってきました。ブナは落葉していましたが、天気も良く最高でした。

ブナの巨木、森太郎、森姫には感動しました。

しんどかった

塩崎将美 '06/11/06

今朝一番の飛行機でカトマンズに帰ってきました。

一応ゴウキヨピーク 5,300mに登ってきましたが天気悪く、でかい山は何も見えませんでした。残念で

す。途中、山は頑張るのではなく楽しむのだとゆっくり行ったのですが最後に朝からガスがかかり展望は望めそうに無いのに、登って行く人たちを見ていると息切れでしんどいのに頑張っていました。

皆さんのアドバイスのおかげでひどい高山病には成りませんでした。

先ほど西濱君に連絡したら途中で見えたのなら良かったですやんと慰められました。たしかにエベレスト、ローツェ、チョーユー等しっかり見てきました。特にアマダラムが近くから見たせいか迫力がありました。

次はランタンに行こうと考えましたが途中会った人達が薦めるアンナプルナへ目標変更、天気が悪ければ何日か待てる余裕の計画で出かけるつもりです。カトマンズより

カニキノコの会 下見

山本 恵昭 '06/11/07

氷ノ山のブナの森で藪漕ぎを楽しんだ後、カニキノコの会の下見に行ってきました。

扇の山の林道は少し路肩が削れているようですが、特に問題なし。

森の中は、乾燥気味で、出かけたナメコも乾ききっていました。もう少し雨が降らないと厳しいですね。

浜坂のキャンプ場。今まで夏だけ営業だったので、今年は今も営業中?のようです。キャンプ受付や料金表の立看板があり、一人1泊 1,000 円と書いてありました。ただ、炊事場は閉めてありました。今までのように無料で使えないかもしれません。

山本眞博様

鍋倉山は山スキーのコース案内に時々出てきて、どこにあるのかなと思っていました。大きなブナの森が有るそうですね。一度行ってみたいところです。

Re: カニキノコの会

塩崎将美 '06/11/11

カトマンズから山がクッキリ見えたのであわててツーリストバスを予約、ヒマラヤの展望台として有名なナガルコットに1泊で行ってきました。アーチ、何とついていない事か、4時ごろ到着するも雲多く山は見

えず。宿にあった本を読みながら自棄酒。ところが朝起きると山のシルエットが見えてます。寒いのに宿の屋上で日の出を待ちました。空が明るくなってきて、鉛筆の先ほどの山をあれがエベレストと教えてもらいました。真っ白なガネッシュ、ランタンの山はかなり大きく見て大満足。少し歩いてマナスルも眺めました。

それにしても天気が一番良いはずなのにすつきりしません。昨晚はカトマンズでも雨が降りました。明日後日からのトレッキング、天気が良いことを祈っています。

今日はカンさんがポカラから戻られます。会うのが楽しみです。

大峰山系行き

廣瀬健三 '06/11/11

こないだの3／4日、大峰南奥駆道に行きました。

奈良県吉野郡十津川村上葛川の民宿に泊まり、玉置山、笠捨山、蛇崩山(だぐえ山)に登った次第。新しい山靴にも馴染み、足取りは快調でした。

殆ど人に会わず。又少し振りに見事な雲海も見れたり、ボタン鍋も美味く初めての大峰山系行きを大いに楽しみました。

塩崎君と再会

Kannroku '06/11/12

カトマンズに帰ってきました 関学小西、青木両氏と今夜は塩崎、西浜、高田(関学OBカトマンズ在住)とで宴会です 8,000m の山に圧倒 高山病にもかかりながらも楽しんできました いよいよスキーですか水渡さんも参加 関学の青木さんも水渡組に入れてやってください 彼も初心者です カトマンズにて

カニキノコ 最悪の天気

山本恵昭 '06/11/13

カニキノコの会、昨年の大雪に続き、今年は大雨・暴風・雹と3拍子そろった悪天候でした。参加は武田さん・谷くん、安井さんご夫妻・堀田さんご夫妻、柏さん・浪川さん、私の9名。

土曜の朝3時頃、雷雨の畠が平駐車場に着くとすでに武田さんのお車が。谷くんと、7時過ぎから雨の

森でキノコ採集。先週下見をしたポイントなどでそこそこ良いナメコとムキタケが採れました。武田さん安井さん堀田さんは、黄葉狩り。

温泉に入っている頃から、外は暴風雨に。キャンプ場の炊事場も強風で使える状態ではなく、急遽、風裏の公園へ。武田さんが東屋にシートを張ってくださいり、なんとか宴会態勢が出来ました。柏さん・浪川さんは到着し、美味しいお酒もいただいて、やつといつのカニキノモードに。

夜も大荒れ、車や芝生には霜が積もり、鍋も吹き飛ばされカニキノエキスがつまつた雑炊用のお出汁は大地に帰っていました。ネコ？ サル？ かもしれません。

私は、所要で朝食後7時前に出発。後片付けをお任せして、失礼しました。車から見えた海も大波で真白でしたが、競市のはうは、どうだったのでしょうか。



旨かったです

柏 敏明 '06/11/13

カンさん、無事にカトマンズに帰られた由。高山病に掛かられたことが気になりますが、ご無事で何よりです。カンさんや関学の小西君、青木さんの土産話が楽しみです。塩崎君も今度こそ天候に恵まれる事を祈っています。

この10月、心臓に2本のステントを入れる処置を受け、12月中旬にもう1本ステントを入れれば、大修理は完了。

1月上旬の杉の原は無理ですが、雪見会からは参加させて頂きたいと思っていますので宜しくお願ひ

します。水渡君もスキーを再開、仲間が増えて楽しめます。

一緒にヒマラヤへ行けなかった小生は、憂さ晴らしにキノコ・カニ鍋会に連れて行って貰いました。遅れてきた浪川君と小生を待ちかねたように、武田会長の世帯道具のランタンが明るく照らす鍋とカニ料理を前に、先ず乾杯。

山本君達が前もって取つておいてくれたキノコ鍋だけでも美味しいのに、その鍋に次から次とカニまで入る贅沢。堪りません。ビール、日本酒の旨い事、ムキタケの触感を初めて味わいました。キノコは歯と舌で味わうものですね。

安井、堀田両君の奥方も、ゆがいた勢子ガニ、現役の谷君が焼いてくれたカニ、キノコ・カニ鍋をワイルドに、豪快に、堪能されていました。Donnkiti 君が自宅で初めてスマーケした肉や魚も大好評、次回も頼みます。

翌日は恒例のカニの競り市、ウン万円分を競り落として各人に分配し、直行組、万灯の湯経由、高中そば組等に別れて帰途につきました。

皆さん有難うございました。来年も宜しくお願ひします。

最高の山を眺めて来ました

塩崎将美 '06/11/25

トレッキングを終えてカトマンズに戻りました。天気はそれほど良くありませんでしたが朝は毎日晴れてくれました。北に見ていたマチャプチャレがだんだん近づき、やがて東に見える所まで歩きアンナプルナBC。勿論処女峰アンナプルナのフランス隊のBCではありませんがアンナプルナ南壁等のBCです。アンナプルナサウスが南に目の前に見え主峰からマチャプチャレまで素晴らしい眺めでした。本当に山の懐に入込んだ気になりました。順調に行つたのでおまけにプーンヒルにも上がってきました。これまたダウラギリ、ニルギル、アンナプルナサウスそしてマチャプチャレと眺めの良いこと、簡単に山を眺めたいならお勧めのビューポイントです。それにしてもダウラギリやアンナプルナの8,000mの山はでつかいです。

面白いトレッキングでしたが明日からもう歩かなく

てよくなつた事に少しホットしてところもあります。

楽しいネパール滞在も 1 ヶ月を超ました。後二日で出国です。できればバンコックで旨い物でも食つて骨休めをして帰りたいと考えてます。

明日帰国便に乘ります

塩崎将美

' 06/11/28

ネパール帰りの私にはバンコックは先進国の大都会です。ホテルも車もエアコンがありますし何より飯が旨い。昨晩は友達の中国人に飯をおごつてもらいました。大皿に乗るぐらいの大きさの子豚を1匹丸焼きにして皮だけを北京ダックの様に食べたり、アヒル？(それにしてはでかすぎる)の水かきから足の部分の煮込みをしゃぶったりシャコのデカイ様なエビ？の揚げたやつにかじりついたら1か月分の栄養を補給している感じです。ちなみにアンナプルナでは1週間以上肉も豚も鳥も無くわずかな野菜だけの食事が続きました。カトマンズではステーキハウスにも行きましたが硬すぎて顆がだるくなる肉でした。

今日は朝からプールサイドでビールを飲みながらゴロゴロ昼ね、昼からはタイマッサージ、1時間 200 パーツを楽しみました。

明日の夜便で日本に帰ります。

帰つたら何を食べるか今からワクワクしながら考えています。

Re: 牛

塩崎将美

' 06/11/30

今朝関空に無事帰つてきました。

日本は寒いです。Tシャツ半ズボンのタイから帰つた身にはこたえます。

飯田様

› ところで、カトマンズにステーキハウス?なんの肉?

食べたレストランは"エベレストステーキハウス"、案内書によるとインドから輸入した本物のビーフとの事です。インドでも牛は神聖な生き物として崇められていると思っていたのですが。

300gのボリュームでしたが堅くて半分残しました。

ネパールで食べた肉ではエベレスト街道で食べた水牛の肉が一番旨かったです。シェルパシチュウ

に入ってました。メニューにありませんでしたがガイドが酒を飲む時注文していた水牛の肉と野菜をピリカラに炒めた物、これは旨かった。ロッジのカマドの上には細く切った水牛の肉が吊るしてあり燻製のような物でしょうか。

エベレスト方面では水牛の肉を担いで売りながら登つて行く行商人?を見ました。ところがアンナプルナ方面では山に入ると肉は全く無くガイドも鶏肉ならあるかもしれないが古いかもしないからやめた方が良いとの事でした。

ネパールの鶏肉はまずまずいました。

羊はメニューで見ましたが食いませんでした。

東京忘年会

越田和男

' 06/12/04

先週土曜夜、飯田幹事で関東在住老OB 10名参集。80代2名、70代2名、60代6名の皆さん、さすがに酒量は減つてもお元気。内外各地の山旅やスキーワークの話に興じた数刻でした。バブさんアフガン卒業して今度はモンゴル通いとか。



参加者:

伊藤文三 福井 實 砂川彰雄 米山悦朗

越田和男 平井吉夫 大関和夫 飯田 進

後藤 洋 水渡清夫

場所:

渋谷「隠れ家ごはん・月の宴」宮益坂店

初参加の後藤君が気をつかってボジョレ・ヌーボー一2本持参してくれ、美味しく頂きました。多謝。

スキー

塩崎將美

'06/12/25

21日から初滑りに浪川君と志賀高原行つきました。途中山本(真)君が合流し楽しんできました。初日は焼額を楽しみ、二日目は焼額を滑ついたら奥志賀との連絡リフトが動き出し奥志賀を楽しみ、三日目は横手山から渋峠、戻つて熊の湯、何処も雪質は最高。

雪が少なくコースの一部は閉鎖されてましたが(私にとっては幸せ。滑降禁止はたいてい急斜面)さすが志賀高原、ゴンドラの上から下まで滑れました。

雪不足の今シーズン、滑るのなら志賀高原がお奨め。

今年の歩き納めは超低山

越田和男

'06/12/28

この秋は、ヒマラヤ歩きやらヨーロッパのスキーやらとお元気な話が多く、それに世界辺境独り旅の現役森本君の無事帰国の報せもあり何よりでした。小生も9月のハイ・タトラ以後はもっぱら国内ですが分相応にあちこち歩きました。

締めくくりは家内との伊豆の温泉への行掛けの駄賃。沼津アルプスの北端2峰、以前登り残した横山 182m - 香貫(カヌキ)山 193m の大縦走。里山とはいえ、ロープが張り巡らせた高度差150mの横山の旧下降は腰痛の身にはちょっと難渋ものでした。

何とか転げ落ちずに、最後のもう一山の香貫山の展望台からは正面真近に愛鷹連山、その上に乗っかかるような迫力の富士の東南面を仰ぎ見て、恥ずかしながら今年の歩き納めの祝杯を挙げました。

西穂敗退

川野幸彦

'06/12/29

ご無沙汰です。お元気ですか?

昨日、独りで西穂高岳を目指しましたが、西穂山荘手前で敗退しました。最低でも独標。上手くいけば西穂高岳の頂上。と甘い考えでしたが“とんでもないこと”でした。新雪のラッセルはきつかったです。以下報告です。

•12/28(木)雪+ガス

新穂高温泉⇒ロープウェイ終点(9:45)⇒西穂山荘手前(13:00)⇒ロープウェイ終点(14:00)

松本の自宅から安房トンネル(片道 750 円)を抜け新穂高ロープウェイへ。ロープウェイを二つ乗り継ぎ終点へ。客は私一人で貸切状態。不安! 料金は往復2,800円。所要時間15分。視界はガスで50m位。

終点の駅では台湾からの団体さんが盛んに話し掛けてきた。台湾では雪が珍しく雪山登山はそれ以上に珍しいのかも知れない。ここからはハイカー向けに付けられたトレースをたどるが、10分も歩くとそれも無くなり古いトレースを進んだ。ここで先日買った新品のワカンを着けた。ワカンを履くのは25年ぶりである。ほぼ平らな樹林帯を1時間ほど歩くとトレースが突然途切れた。先人はここで引き返したようである。ここからは自力でのラッセルとなった。深さは緩斜面で膝程度。急斜面で腰位。

いやーっ! バテました。1時間半ほど必死で頑張りましたが嫌になり引き返すことにしました。引き返した地点は、木に打ち込まれた道標から“西穂山荘まで300m”的所です。帰りは、登りに3時間以上かかったところを40分。参りました。途中、4人ほど上がつきましたが、皆さん“ツボ足”でした。ワカンを着けてあれだけもぐったのでさぞ大変だろと思いました。最近は冬山にワカンを持たない方が多いのでしょうか?

温泉にでも入つて帰ろうかと思いましたが、それをして疲れて運転が出来なくなるので止めました。案の定、運転中に右足が攣りました。情けないです。

本年は色々とお世話になりましたがどうございました。来年もよろしくお願い申し上げます。また、各種行事にお誘い下さい!

六甲はやっぱりよろしいですね

越田和男

'07/01/17

先週末に甲南高校卒業50周年の同窓会に出席した翌日、旧友5名(内山岳部OBは廣瀬、平井、越田)で好天の六甲歩きを楽しんだ。

芦屋-高座の滝-A懸- B懸跡-風吹岩-横池-打越山-十文字山-西岡本のコースで、自重し

て地獄谷経由は諦めたが、ハイキングコースからはずれたA懸-B懸あたりは大地震で崩壊したとはいえる、昔の面影も残っており、年寄りには十分楽しめた。

今回猪には出遭わなかったけど、風吹岩で酒盛りしていたら、野良猫が数匹出てきて餌をねだった。ハイカーをあてに生きてるんでしょうかね。

よくキャンプした横池は静寂そのもので昔のまま。また、落葉樹の多い打越山あたりは、この季節は明るくて、落葉の絨毯が心地よかったです。道標のしっかりとっているのにも感心した。

今や高級住宅街になった昔のヘルマン屋敷跡は全く変わってしまって確認出来ず。十文字山まで迎えに来てくれた藤安のお宅にお邪魔しコーヒーをよばれたあと、甲南のキャンパス経由で岡本に至り解散。

小生そのあと新幹線で帰ったら横浜の自宅に8時半には着いた。秩父や甲州よりもずっと近い感じ。便利な世の中です。

日光の山二題

越田和男 '07/02/11

相変わらず、低い山々を歩いてます。関西出身者には馴染みがない日光の前山を2日間歩いてきました。

1日目は稻荷川上流の雲竜渓谷の氷瀑見物。今年も暖冬で完全冰結には至らず、危険な状態でしたので、ほんの入り口まで行き、引き返しました。それでも実に見事な巨大ツラには圧倒されました。

泊りは、これぞ秘湯、小来川(オコロガワ)温泉。関東周辺には実に素朴な山の宿があるのです。

2日目は、鶏鳴山 961m。廃道となった急峻な尾根道を辿る、誰一人出遭う事のない静かな山でした。だいぶしごかれましたが、頂上の質素な酒盛りが格別でした。

メンバーはJACのあまり先鋭的でない気楽な仲間4名で、略同年代の大学山岳部(大阪外大、国学院、学習院、甲南)出身者。年取ってもこういう山仲間はいいものです。

スキー近況

田邊 潤 '07/02/13

2/11 に家族と蘿原スキー場へ行つきました。3連休の日曜日でしたので、あのバブル時代を思わせる大賑わいでやはり家族連れが多く、ボーダーと見事に鉢合わせ衝突をしてしまいました。御岳周辺ではこの蘿原スキー場は国道19号線から最も近く気にはなっていたのですが情報不足で今まで行ったことがなかった所です。ゲレンデはかなり長大ですが、なんとなくまとまりがなく中級者から初心者向きといったところでしょうか。モーグリアンに格好のコースもありました。天候は吹雪時々晴れだったので眺望はよく判りませんでした。雪の状態が良ければ我々クラスに適したゲレンデということができるでしょう。少し変化の少ないところが欠点かもしれません。

スキー合宿

塩崎将美 '07/02/22

16日から19日まで高遠の田辺ガチャさんの別荘に集まりスキーを楽しんできました。

12名参加で1日目はプラッシュ鷹山、2日目は蘿原高原、3日目はフジミパノラマで滑りました。勿論夜は大関シェフの料理で大宴会。滑りまくり飲みまくり喋りまくりの充実した3日間でした。

ガチャさん、お世話になりました、有難うございました。

初参加の水渡さんから写真が届きましたのでアルバムにUPしました。



高峰高原

越田和男 '07/03/07

谷君の久し振りの現役報告楽しく拝読。

さて、小生からは相変わらずの老人報告ですが、高峰高原(車坂峠一帯)に日大WV部の山小屋があり、そこで「パミール中央アジア研究会」なる会の集いがあつて十数名で2泊3日を楽しんで来ました。出席者のなかに今秋エベレストを単独無酸素で登る計画の若者(といつても40歳くらい)がいて、彼の健啖ぶりには脱帽。

水の塔山2,202mや黒班山2,404mに登りましたが、あまりの雪の少なさに驚きました。黒班への登山路はカチカチに踏み固められ、峠からツボ足に軽アイゼンで楽勝。老人には都合が良かったですが、こういう条件下で春山を初体験したらやっぱり山を甘く見ることになるのでしょうか。

日大WVの山小屋は、30名ぐらいは収容できるもので、質素な無人小屋なのに良く管理され、煙たくない薪ストーブ、山の良書の揃った書棚、清潔な寝具などなど、快適さに感銘を受けました。

薙刀山

DONNKICHI '07/03/11

10日塩崎さんと久し振りに山スキーのメッカ石徹白の野伏山から転進して薙刀山行きました。白山中居神社7:20和田山牧場跡9:30牧場跡から見る野伏岳正面尾根は藪だらけで面白くなさそう、野伏の裾を巻くようにシュプールが有り、それを辿って行くと何時の間にやら薙刀平に上がってしまい、仕方なくシュプールどおり薙刀山頂上に着く12:00 下りはグサグサに腐った重雪に濃いヤブヤブで苦しみながら、ヘロヘロなり駐車場に着く14:30。

去年は時期遅れで登れず(5月)今年は人のシュプールを当てにして為に、薙刀山に転進でまたもや敗退の野伏岳でした。

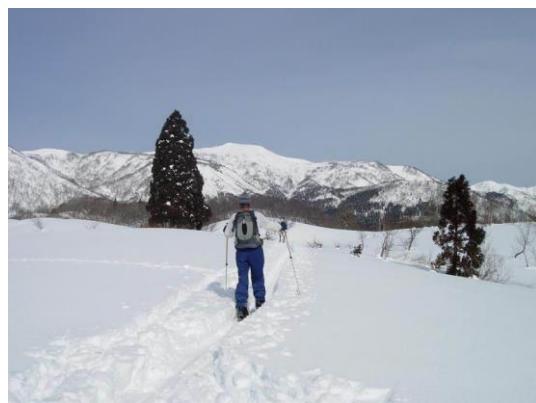
山スキー

塩崎将美 '07/03/12

浪川君の野伏は山スキーの初心者に最適との甘い声に惑わされ石徹白に行ってきました。3時間歩いてリタイア、和田山牧場までは登り返しがあるのでシールを付けたまま滑り(歩き)、牧場でシールをはずし滑り出したがこれに苦戦、

林道は雪が重くぜんぜん滑りません。林道をショートカットするのも密生する杉林に悪戦苦闘。バテバテの1日でした。

ほとんど滑れず雪の中を歩いただけでしたが天気も良く満足。



モンゴル

米山悦朗 '07/03/16

雪原の寒立ち馬を撮りに行ったところ45度の温度差に急性気管支炎を発生し点滴をしながら帰ってきました。年はとりたくないもの。

御岳はまだ春スキーのお勧め

田邊 '07/03/19

昨18日会社の同僚夫婦と息子との4人で御岳ロープウェイへ今シーズンの滑り納めに行ってきました。風はやや強かったですが快晴、気温マイナス2からマイナス4度と、今暖冬シーズンとしては異例の好コンディションでした。まだまだ御岳周辺はいけそうでお勧めです。気持ちよく今シーズンのスキーを終えることができました。先回浪川と富士見を8回十アルファー滑って翌週1週間体調不良でへばつたので今回は少し自重しました。お陰で今日は太腿が少し痛い程度です。

経ヶ岳とブラブラ寄り道

山本 恵昭 '07/03/24

23日、福井県の経ヶ岳へ行つきました。

奥越高原青少年の家6:30発。宿谷川をスキーで遡るつもりが、下部はあまりに雪が少なく、壺足沢登りをする羽目に。一ヶ所滝の高巻きもあって出だしから疲れる。林道から上はなんとか雪が続いており、ツララの垂れた保月山の岩場を見ながらブナ林の中を杓子岳へ 11:00。昨夜の雨は上部では雪だったようで粉雪が20cmほど。シールをつけたまま中岳を超えて経ヶ岳とのコルへ。ここから壺足キックステップで経ヶ岳山頂 12:45。野伏山から白山までの連なりが美しい。

山頂からスキーを履いて下降。南面のすっきりした急斜面を滑る予定が、一步踏み込むと腐った雪が雪崩れしていくので諦めた。笹混じりの登山道横を横滑りと小回りでごまかして下り、意気消沈。ではと気を取り直して期待した杓子岳からの下りも、朝の雪質とは打って変わってべトべト。林道からは、また壺足で雪面を踏み抜きながら、奥越高原青少年の家にふらふらになって辿り着いた 16:00。

24日は、銀杏峰へ行くつもりでしたが、シールの調子が悪く中止。糊がべトべトで、剥がすと納豆のよう

に糸を引く始末。

大野市のイトヨ(トゲウオの仲間)の生息地を見学。朝早くから涌水地をうろついていると、資料館のおねえさんが開館前にもかかわらず案内してくれた。陸封型の南限とのこと。調子に乗っていろいろ質問していると、高速道路通勤割引 9:00までに間に合わなくなってしまった。

開き直って地道で帰る途中、たまたま立ち寄った一乗谷朝倉氏遺跡が結構良い所でした。戦国城下町が広い範囲で発掘されて一部復元されている。湯殿跡石庭が見事で、いつまでも座っていたい気分でしたが、雨が降り始め、帰路へ。

以前絶品だった焼き鯖寿司を今回も買ってみましたが、何故かいまいちでした。残念！

会員の翻訳・著作

平井吉夫の翻訳新刊

岳友平井仙吉の最近の精力的な翻訳出版には眼を見張るものがあります。今回も冒険ファンタジーで、「ノーチラス号の冒險」、何と全 12 巻のシリーズです。ノーチラス号といえば、SF の古典、幾度か映画化されたあの「海底2万里」でネモ船長指揮する謎の潜水艦。今回の物語は第一次世界大戦の前後を時代背景に、ネモ船長の息子が親の秘密の遺産に遭遇して展開するという設定。

ドイツのSFファンタジーのベストセラー作家の 1992~2000 年の作品です。著者: ヴォルフガングホールバイン 訳者: 平井吉夫

第一巻: 「忘れられた島」第二巻: 「アトランティスの少女」創元社 2006 年 4 月刊 各 1,000 円以後第 12 巻(3: 深海の人びと、4: 恐竜の谷、5: 海の火、6: 黒い同胞団、7: 石と化す疫病、8: 灰色の監視者、9: 失われた人びとの街、10: 火山の島、11: 氷の下の街、12: ノーチラス号の帰還)まで続きます。お楽しみ下さい。

中井久夫氏の近著

今朝の朝日新聞の読書欄に先輩の新著・随想集の紹介記事がありました。

中井久夫著「樹をみつめて」 みすず書房 2,940 円 精神科医、翻訳・随筆家。

以前、伊藤文三さんや賀茶さんに中井先生のいくつかの著書を薦められことがありました。ちょっととつつきにくらい感じがしてそのままにしてましたが、今回はこの書評につられて読んでみようかと思います。

書評の見出しには「時空を超える人間を内側から見つめる」、末尾には「『精神科医の心の中にはいくつかの墓がある』。多くの理不尽な死を前に見た著者にとり、戦争を書くことは魂の供養でもあったろう。静謐だが重い余韻の残る一冊。」とあります。(評者・最相葉月)

— 現役の書き込み —

世界へ

森本 寛之 '06/05/11

山岳会のみなさんへ

ご無沙汰しております今年現役4回になりました、
森本寛之です。

以前より計画しておりました、世界への旅ですが、
今回どうぞ来週を目標に出発しようと思い立ちまし
た。

神戸からフェリーで上海、雲南省昆明(又は四川省成都、ゴルムド)、チベットラサ、カンリンポチエ、ダム、ヒマラヤ(カルパタール、ゴーキョピーク)、カトマンドウ、ポカラ、バナーラス、デリーへと向かいます。安全に十分配慮して病気怪我トラブルの無いよう心がけます。

URLをクリックしていただければブログにリンクします。極力現地のネットカフェなどで更新していきます。
<http://blog.livedoor.jp/ss361092>

夏山(滝谷)と今後の予定

谷 勇輝 '06/08/17

ご無沙汰しております。山岳部主将3回の谷です。

8月12日～15日にかけて、滝谷(涸沢BC)に行ってまいりました。

初日(8/12)

上高地より涸沢(BC)

今年は雪渓がたくさん残っており、5・6のコル、3・4のコル上部また、涸沢ヒュッテと涸沢小屋を結ぶ道のそばまで雪渓が伸びていました。

2日目(8/13)

涸沢(BC)⇒滝谷／第1尾根登攀(ノーマルルート)

涸沢(BC)より北穂北峰を経てB沢のコルからB沢(幅の狭いガリ)を下降。

その後、赤茶けたバンドとB沢との交差しているところをクラック尾根側に水平移動。

(トボでは水平移動するためのバンドが崩落により通行不可と書いてあり、別の取り付き方法が紹介されて

いましたが、ハーケンを数枚打ち、崩落前の取り付け方法で通過可能でした。)

合計3ピッチ程ザイルを伸ばし、第1尾根取り付き(T4)に到着。

1P 40m II 幅50～60cmのバンドを左上。

2P 35m III 凹角～左のクラック

3P 40m V 凹角。出口に小ハングあり。

4P 50m I リッジ

5P 20m IV フェースからバンドを左上。

6P 40m III フェース

これより上(Aフェースは崩落により登攀不可と書いていましたが、見たところ登攀可能と判断し、隣のクラック尾根へ入らず、Aフェースを登攀)

実際、崩落は思ったより登攀に影響しておらず、2ピッチ程で北穂頂上へ。(登攀終了)

北穂頂上にいた人々は、何やらギアをガチャガチャさせ壁を登ってくる私たちを見て奇妙そうな面持ちで眺めたり写真撮影したりしていました。

その後、ギアを整理してBC帰幕。(14時間行動は疲れました。)

感想:とにかく浮石が多くかったです。1手1手浮いてるかどうか注意深く確認しながらの登攀であり、気が抜けない登攀でした。

3日目(8/14)

涸沢(BC)⇒ドーム中央稜登攀

涸沢(BC)より北穂南峰を経てC沢右俣を下降。南峰からはドーム北壁がしっかりと見えました。

C沢右俣(III)3ピッチほどをコンテで下降し、懸垂地点(T1)へ。T1から20m懸垂しT2へ。その後左へ回り込みながらトラバースし、ドーム中央稜取り付きへ。

しかしここにきて順番待ち。{基部に2パーティ(5名)、上部にも2か3パーティ}

結局取り付いたのは12時。

1P 50m IV チムニーからカンテ

2P 20m V リッジから左のスラブ

3P 40m I リッジ

4P 40m IV 凹角～チムニー

5P 40m V 凹角を登りハングを右から巻く

15時、ドームの頭(登攀終了)その後帰幕。

感想:予報では午後から一時雷雨との予報があり、登攀中天候が急変しないか心配でしたが、何とか帰幕まで持ってくれました。第1尾根と比べるととても岩質が硬く、快適な登攀ができました。

4日目(8/15)

涸沢(BC)→上高地

上高地はお盆ということですごくたくさんの人が訪れていました。

追伸:この後私は文部科学省主催の大学生登山リーダー研修会(夏山①、期間6/2~8)に引き続き、夏山②(期間8/24~30)に参加させていただきます。

また、現役の夏山は9月の初旬に北アルプス縦走を考えています。

文登研 夏山2 報告

谷 勇輝 '06/09/01

6月に行われた文部科学省主催大学生登山リーダー研修会 夏山1に引き続き、8月24日から30日に行われた同主催夏山2に参加してきましたのでご報告させていただきます。

24日、25日

登山研修所にて村越氏による「読図とプランニング」、そのほかに「応急処置について」、「確保理論」等の講義を受けました。

(村越氏:山と渓谷社から発行されている「最新読図術」の著者)

<http://www.atc.ne.jp/seikindo/html/saisindokuzu.htm>

26日

立山ケーブル、美女平からバスで室堂入りし、各班ごとに別れて剣御前小屋経由で剣沢(BC)へ。

私は夏山1夏山2共に1班に属し、班員は京都府立大山岳部1名と拓殖大学山岳部2名でした。(夏山1では東海大山岳部、北海学園山岳部、早稲田歩こう会、日大山岳部でしたが、今回の夏山2では早稲田以外は皆、合宿等により参加していませんでした。再会できず残念。)

剣沢到着後、別山の岩場にて岩登り講習。(2P登ったところで、時間の都合により懸垂で基部まで下

降しBC帰幕。)

27日、28日

この2日間は研修生が自由に山行計画を立てることが出来る日であり、私たちの班では、27日ハツ峰Dフェース/富山大ルートを登った後、池ノ谷乗越しを経て、三の窓でビバーク、28日チンネ左稜線を登った後、本峰経由で別山尾根を下降し剣沢(BC)帰幕の予定でした。

27日 4:30発

日の出前にBCを出発し、剣沢を長次郎谷出会いまで下り、ハツ峰Dフェース取り付きへ。かなりガスが濃く、Dフェース取り付きに至まで少し時間がかかる。

・富山大ルート

1P 20m IV+ ハングを左から巻き、スラブ

2P 30m III 脆い凹角からフェース

3P 40m IV+～V- 凹状のフェース

苦しくもこのピッチのフェースで一箇所、体が振られそうになりヌンチャクをつかんでしまいAOになる。オールフリーを逃す。

4P 30m IV バンドを左上

5P 30m IV リッジ

6P 30m II リッジ

3時間少々で登攀を終え、Dの頭で小休止した後、予定通り三ノ窓へ。

三ノ窓に到着後、3~4人が泊まれる岩小屋を見つけ、本日の宿とする。しかし岩小屋入り口付近にキジうちのあとが。

池ノ谷乗越し手前から雨が降り始めたのですが、同研修で三ノ窓ビバーク組みのツェルトを張っていた班に比べれば(?)岩小屋の中はとても快適でした。

28日

予定ではチンネ左稜線に取り付く予定でしたが、天候が思わしくなく午後から雷の予報が有り、登攀後にBCまでの縦走も控えていたので取りやめることに。その為、この日は三の窓から池ノ谷ガリーをつめ、本峰経由の別山尾根下降の縦走のみ。

しかし研修が目的なので、また天候も何とか持ちこたえそうだったので一服から背負い搬送の訓練をしBC帰幕。

29日 4:30発

この日はこれまでの既成ルートとは違い、あまり人が登っておらず、情報量の少ない八ツ峰マイナーピーク/東面スラブルート(V-, 620m)を登る予定でした。

しかし取り付きの八峰三ノ沢を登り、F1を巻いたところで雨が降り出し撤退。撤退後、天候が回復。余った時間で長次郎谷出会い対岸にある岩場にてナチュラルプロテクションのみでの登攀訓練を行ったのちBC帰幕。

30日(下山日) 4:30発

BCから歎御前小屋経由で室堂へ。

BCから室堂まで2時間少々で到着し、その後バスとケーブルを乗り継ぎ研修所へ。

以上が文登研 夏山2の報告です。

追伸 帰りの富山駅前にある、山家がよく行く(?)という(うまくて量が多く、そのうえ安い)お好み焼き屋‘ぼてやん’で京都府立山岳、早大山岳/歩こう会、上智大山岳、東京理科大山岳と山の話をしながら飯を食って帰ったのが印象的でした。

現役／夏山合宿

谷 勇輝 '06/09/02

大変恐縮ながら連続投稿させていただきます。

明日から現役の夏山合宿として槍・穂縦走に行きます。

[期間]

9月2日～7日(予備日1日含む)

[参加者]

CL(食料/装備) 理工3 谷 勇輝
SL(記録) 文2 神澤 太一

[日程]

9月2日

大阪～上高地～徳沢～槍沢キャンプ地

3日

槍沢キャンプ地～槍ヶ岳～中岳～南岳キャンプ場

4日

南岳キャンプ場～北穂～涸沢岳～穂高岳山

荘付近キャンプ場幕営

5日

キャンプ場～奥穂～西穂～西穂山荘付近キャンプ場幕営

6日

キャンプ場～上高地～大阪

7日

予備日

怪我/事故のないよう気をつけます。

かに・きのこ

谷 勇輝 '06/11/08

大変遅くなりましたが、かに・きのこ鍋に参加させていただきたいと思います。現地までは武田さんの車に同乗させていただけたことになりました。武田さん ご迷惑おかけいたしますが宜しくお願ひいたします。

実は、11/1～5まで富山で文部科学省登山研修／山岳遭難救助研修Bに参加して参りました。班員は東京理科大山岳部1名、龍谷大ワングル1名、大阪市大山岳部1名、慶應大ワングル1名、京大山岳部1名、甲南大1名の計6名でした。

担当講師は、日本プロガイド協会所属の黒田氏と山下氏でした。

救助はとても大変でかつ危険を伴うので、研修を受けたと言うものの、本当に大事な事はまず、遭難しない事！だと強く実感しました。

今年の活動あれこれ

谷 勇輝 '07/03/05

昨年末の12月30日～1月3日にかけて鹿島槍・東尾根に行ってきました。

後立山において近年稀に見る好天でした。それは写真をご覧いただければお分かりになるかと思います。

12月30日

前夜発で大谷原入りしていたので早朝から駐車場を出発(8:30)し、林道を歩き東尾根に取り付く。

取り付きまでの林道に積雪はあるものの、歩行にはさほど問題ない。15cmぐらいだろうか。

取り付き早々、いきなりの急騰。しかし先行パーティのトレースがあり急な階段をひたすら登っていく感じでどんどん高度を稼いでいく。14:30 一ノ沢の頭手前で行動をやめて幕営。

12月31日

7:00 に出発する。前日の先行パーティのトレースはそのまま残っており、使わせていただく。たまにトレースを踏み抜きながらも、ラッセルの事を思うとカナリのハイペース。すると先行に3人、3人、1人(合計7名)のパーティがラッセルに続いている。しばらくすると先頭に追いつき、お札を一言、ラッセルを交代する。

総勢約15人が数珠繋ぎとなり、お昼頃に第一岩峰基部に到着。先行パーティが抜けた後、私たちが抜ける頃には日が暮れてしまい、ぎりぎり抜けられてもよいテント場が無いかもしれないとの判断でお昼頃に岩峰基部に幕営。

大晦日は東尾根から大町の夜景がトテモ綺麗に見えました。写真に撮れなかったのが残念!…

1月1日

7:00 前にテント場を出発し、第一岩峰に取り付く。雪壁は前日のトレースが残っており、早朝だけに雪が締まって登りやすい。そのせいか、斜度は見た目ほどきつくな登りやすかった。新雪の時のことを考えると怖い。

その後第二岩峰基部に到着。すると前日のパーティが取り付いて間もない。3時間?ぐらい尾根上で待機したであろうか。しかし、天候が良好なのがせめてもの救い。それでもじっとしていると体冷えてくるので、雪洞を掘って体を温める。夢中になって掘っているとあっという間に4,5人は入れそうな雪洞が完成! あつたまる。

12時頃にやっと順番が回ってきて登攀開始。2Pの中盤に少しかぶった凹角があり、先行パーティはそこで苦戦を強いられていたが…。あっけなく通過することができた。この日は第二岩峰上部でタイムミット。よさそうな場所を選んで幕営。

1月2日

連日続いている好天もココで終わり。本来の後立山の姿に(?)視界が5~10m程で前日のトレースは殆ど残っていない。視界が悪いために北峰に到着し

たのも初めは確信がもてなかつた。

しかし読図で無事南峰への吊尾根に入ることができた。改めて、視界が悪い時の読図の有用性に気付かされる結果となつた。

しばらく吊尾根を下ると、急な南峰の登りがでてくる。しかし、雪面がクラスしておりアイゼンの爪が良くきまり登りやすい。

そして、だらだらと南峰からの尾根を下り、冷池山荘を通り過ぎ赤岩尾根2,300m付近に幕営。

1月3日

7:00 頃テント場を出発。高度を下げたのか天候は曇り空で穏やか。しかし山頂は雲に覆われて見ることが出来ない。赤岩尾根をひたすらに下り、お昼前に大谷原の駐車場到着。

今回は、大部分を先行パーティのトレースを使わせてもらった結果、無事に赤岩尾根へと抜けられたと思う。

追伸

恥ずかしながら、昭和6年(1931年)5月に東尾根(二ノ沢より)田口一郎さんと西村雄二さんが初登攀され、また翌年の昭和7年(1932年)4月に東尾根(三ノ沢より)今度は田口二郎さんと近藤実さん、伊藤新一さんにより初登攀されていたことを戻ってきてから知らされました。

改めて旧制甲南の凄さと先鋭的に活動されていたのだと実感した次第です。

1月13日~14日

先の投稿にもありました、現在ヒマラヤ、クンブー地方の未踏峰遠征に行かれている関学の中島さんと他3名の社会人の方とハケ岳にアイスクライミングに行ってきました。

少ないですが数枚、写真の方添付させてもらいます。

2月17日

たまたま北海道に行く機会があり、知り合いの方がミックスクライミングに行くというので一緒させていただいた。

場所は千代志別といい、札幌から車で2時間ほどである。海岸線沿いに面しており、車止めから徒歩

15分で到着！！以前はもっと近くまで車で入れたのだと…。改めて北海道のアイスへのアプローチの良さを実感。

写真のペンシル状の滝はまだ2,3登しかされておらず、北海道で最難の滝なのだと。(因みに写真のオレンジの方は既にこの滝を登られている。)

今回はこの滝には登らず、下部の岩でミックスクライミングを体験させていただいた。

最初はバailを岩に引っ掛け、アイゼンの前爪を引っ掛ければ簡単に登れるのでは？…がしかし、それには及ばず、登り方が独特でかなり苦戦しました…。

その後、一旦車止めまでもどり今度は氷を登りに行くためにハーネスをつけたまま車に乗り移動。15分程沿岸を走ったところで車を道路わきに止め、海岸線に下りていく。すると高さ50m程のゴキビルという滝が姿を見せる。(徒歩5分程で滝に到着。アプローチのよさはすばらしい。)

今年は暖冬だと騒がれているが、北海道も例に外れず。写真見てのおとり、ザクザクの氷。しかしせつかく滝の基部まで下りてきたので1本登って車止めにもどり、この日はこれにて終了。

追伸

明日から3週間タイにクライミングをしに行きます。
【タイ・プラナン】と検索していただくとたくさんの記録
が出てくると思います。

概要については現役HPにアップいたしました。

谷 勇輝

'07/03/27

現役の谷です。

本日、無事タイより帰国しました。

現地では連日30°Cの暑さや食べ物で体調を崩したりしていました。

しかし、朝夕は気温も下がりすこしやすく、クライミングには絶好のコンディション。

お腹はユルイままでしたが、途中トイレに行きつつ何とかクライミングする事が出来ました。

現地では各国からクライマーが沢山集まっており、岩場で知り合ったヨーロッパ(ドイツやノルウェー)のクライマーは日本人より安全確保に関する技術や知識がしっかりしているな、と思いました。

日本と西洋の登山・クライミング時の安全確保の技術・知識に関して、西洋と山の状況等合致しないので一概に鵜呑みにするのはよくないと思いますが、実際に接してみて、やはり日本人に比べてヨーロッパの方が進んでいると実感しました。

また、現地では日本人も数人登りに来ており、楽しく交流する事が出来ました。

山岳会1年生

森本 寛之 '07/03/22

こんにちは、現役4回、山岳会1年生の森本です。

報告が遅れましたが、無事五体満足で帰国してまいりました。これからも、非力ではありますが、現役のバックアップ等に尽力しようと思つております。これからもどうぞよろしくお願ひします。

また、山岳会1年生として、森本寛之をどうぞよろしくお願ひします。

帰國のお知らせ

大学山岳部のホームページ

<http://www.club.konan-u.ac.jp/~alpine/>

山岳会ページからもリンクしています

現役部員のヒマラヤ登山

現役部員の谷勇輝君が、同志社大学山岳会・日本山岳会関西支部共催の「クビ・ツアンボ源流域学術登山隊2007」に参加しています。関係ホームページから計画概要をご紹介します。

クビ・ツアンボ源流域学術登山隊2007

1. 目的

ヒマラヤ山脈の北側最奥、プラマプトラ(ヤル・ツアンボ)河の源流の一つであるクビ・ツアンボ河を極め、その源流にある未踏の最高峰に登頂する。また登山・学術活動を通じて現役学生の育成を行う。

- (1) 源流域の未踏峰クビ・カソリ(6,721m)、アブシ(6,254m)、ランタチエン(6,198m)の初登頂を目指す。
- (2) 本活動を通じて関西を中心とした若手登山家を育成する。
- (3) ヤル・ツアンボ河の最源流となるクビ・ツアンボ河の源を確認すると同時に源頭に到達する。地球温暖化による地球環境調査(氷河後退)を行う。踏査予定氷河はアサジヤ氷河、ランタチエン氷河とする。
- (4) 河口慧海が白巖窟からマナサロワール湖へ抜けたルートを調査する
- (5) 標高(気圧と酸素濃度)が閉鎖集団中の認知処理に及ぼす影響の研究

2. 実施時期

2007年8月上旬～10月上旬

3. メンバー

9名

隊長	和田豊司	日本山岳会／同志社大学山岳会
登攀隊長	千田敦司	日本山岳会／同志社大学山岳部サブコーチ
隊員	谷 勇輝	甲南大学理工学部 4回生
	下里直樹	同志社大学文学部 4回生
	石川敬三	同志社大学工学部 3回生
	小谷紘平	同志社大学工学部 2回生
	小林博史	同志社大学政策学部 1回生
	藤井良太	京都府立大学農学部 2回生
	寺倉惣吉	同志社大学山岳会

関連ホームページ

同志社大学山岳会 <http://doushishasangaku.kitunebi.com/>

日本山岳会関西支部 <http://www4.kcn.ne.jp/~jac-ks/kaigai2007/kubi-plan.html>

編集後記

今年は涼しいな、と思っていたのは夏の初めだけ。振り返れば体温より暑い 40 度の酷暑でした。皆さんは夏をいかがお過ごしになりましたでしょう。

さて、編集。今年も読者からいくつかご要望をいただきました。

戦前の甲南・早稲田両山岳部を経験された貴重な体験を、旧制高校OBの佐野さんに書いていただいたら、というご意見。早速甲東園にダイヤル。直接受話器をお取りになった佐野さんはご寄稿のお願いを快諾してくださいました。もう 70 年も前のことだからはつきりしないことも多くて、と書いておられますが、記録もワックスのこともはつきりしておいでです。

越田さん、お寄せいただきましたご要望、ご指摘のテーマはもう少し宿題にお預かりします。有難うございました。

「甲南Today」に「鳩杖」を連載されていた中井先生（新制高校OB 1997 年～2004 年甲南大学文学部教授）にもご寄稿いただきました。こちらは田辺さんから小原さんに、小原さんから中井先生にお口添えをいただきました。

旧制高校尋常科から新制中学高校へ移り変わる戦後の雰囲気の中、若い日の渾沢の体験を「私の人生のジグソーパズルには欠かせないピース」と記しておられます。ご専門の医学書ほか隨筆集や訳詩集のことは、ホームページの「会員の著作紹介」に記事があります。近著の隨筆集「樹をみつめて」には、平生鉄三郎先生のことから二楽荘・大谷光瑞のことなどの「甲南裏山物語」。他の隨筆集にも神戸の街や阪神間の文化など、甲南にゆかりのある人には身近なテーマの作品がいくつもあります。別に岩波書店の雑誌「図書」には昨年 7 月から隔月で「私の日本語辞典」。異色は絵本、「いろいろずきん」（作 エランベルジェ）の絵と訳。幅も奥行きもすごい方がおられるなあと思うのは編集担当だけでしょうか。

スロヴァキア・タトラは国学院の大橋さん、ネパールは関学の小西さん（ホームページ）と今号は外部の方からも原稿をいただきました。そのほか四国の山、雲南紀行やチベットヒッチハイク、第二次大戦前後の登山についての論考、山岳書評と幅広く原稿をお寄せいただきお礼申し上げます。

毎号のことですが、事務局井上さんが作ってくださる会員短信のページ、塙崎さんが管理しておられるホームページからの転載も大切な記事です。お二人にもお礼申し上げます。

この号が皆さんのお手元に届く頃には、現役部員の谷勇輝君が参加しているチベット「クビ・ツアンボ源流域学術登山隊 2007」（同志社大学山岳会・日本山岳会関西支部共催）がきっと成功裡に終了していることと思います。次号には関連記事を掲載してお届けしたいと思います。

原稿宛先 山嶽寮編集担当

電話／ファクシミリ

大森雅宏

Eメール

山 嶽 寮 第 62 号

発行 2007 年（平成 19 年）10 月

編集人 山本真博 印刷 カツヤマ印刷

